
桜に因りて雨を舞う

チャルミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜に因りて雨を舞う

【Nコード】

N3295H

【作者名】

チャルミー

【あらすじ】

大学生の悠奈は、ひよんなことで友達のユキが一目惚れをした相手、堂藤亜希との関わりを持つようになる。彼女は、はじめて彼と目が合った時の、亜希の中にある「何か」が、気になっていた。

《序章》

季節は春がはじまった頃。不思議と全てを新しく始められるような気持ちになる暖色の空気。時折に過ぎる冷たい風が、理由もなく宙に浮いた気分を現実へと引き戻す。

―ずっとずっと待ってるから：

悠奈は住宅街の片隅に狭い砂場と小さな滑り台があるだけの、こじんまりとした公園のベンチに座り、雲のない霞みがかかった青空をゆっくりと仰いだ。

―いつまでも、ここで待ってるから：

目の端に映る桜の木は、今にも弾けそうなたづなを抱えている。その薄ピンクに焦点を合わせるように目を細めた彼女は、何かを感じたかのように微かに瞳を開いて、幸せそうな笑みを浮かべた。

―ずっとずっと、あなたに届くように祈ってたのよ：

―感じる。もうすぐ、あなたに逢えること。

―逢いたい。

―地獄に堕ちてもいいから

―逢いたい。

【1】目眩—1

二年前の春の終わり―

桜は花びらを雪のように落とし、初夏の太陽が照りはじめていた。郊外のマンションに母親と二人で暮らしていた恩田悠奈は、大学生活2度目の春の終わりを、季節が移ることを感じる余裕もない程忙しく過ごしていた。

彼女は、大学の講義が終わると、ほぼ毎日深夜までのアルバイトをしている。悠奈が中学に入っすぐ、父親の起業の失敗が原因で両親は離婚した。余裕のない生活の中で、少しでも母の負担が軽くなるようにと、高校生の頃から続けてきた居酒屋でのアルバイトは、あっという間に5年目に入った。

そんな学業とバイトの掛け持ちの毎日は慌ただしく過ぎていったが、悠奈にとっては一日一日が充実している日々だった。

その日も、いつも通りに夕方6時に居酒屋に着くと、店の2Fの更衣室で作業衣のようなグレーの制服に手早く着替える。腰にエプロンを巻くと、栗色の緩いウェーブの長い髪を一つに束ねて軽く化粧直しをした。

―巧くん、もう来てるのかな…

彼女は手に持ったファンデーションケースの鏡を覗き込む。そこには、丸い大きな濃い茶色の瞳、小振りの鼻、形のいい唇が順に映った。

悠奈は1年程前、この居酒屋で働き出したアルバイトの隅内巧と知り合った。同じ大学の1回生と3回生だった二人は、何かと会話もはずみ意気投合し、恋人同志として付き合うようになるまでに、そう時間はかからなかった。

支度を済ませた悠奈は、更衣室から2階の個室の座敷部屋を抜け、

階段を降りて厨房に向かう。1階は厨房が見えるカウンター席とオープンな座敷になっている。所々に生け花が活けてある上品な店内、そして新鮮な魚と天婦羅が楽しめる、巷で評判の店だった。

「おはようございます」

悠奈は、厨房にいた店長に気付いて笑顔で挨拶をした。

「あ、おはようございます。今日もよろしく願いますね」

丁寧に愛想よく返事を返す店長は、まだ二十代後半の少年のようなあどけなさの残る、この店『椿屋』の二代目跡取りだった。

店内を見回した悠奈は、まだ客もまばらであることを確認すると、厨房から裏口に出た。通路に並べてあったケースの中のビール瓶を手早く拭き、ケースごと引きずって店内のドリンク専用の冷蔵庫の前に置く。

「おはよう」

ふいに、真後ろで聞き慣れた声に振り返ると、エプロンを後ろ手で締めながら、人なつっこい笑顔で立っている巧の姿があった。

「あれ？ 遅刻？」

「バイトまでちょっと仮眠と思ったら寝過ぎしまった」

寝癖のついた真っ黒な短髪を撫でつけるように押さえた彼は、くつきりとした顔立ちに苦笑いを作る。

「じゃ、またあとで」

片手を上げると、調理の補助をするために、急いで厨房の中に入っていた。

—まったく子供みたいなんだから：

悠奈は笑みを浮かべながら、ビール瓶を冷蔵庫に並べはじめる。彼女にとって、巧は年上だが目の離せない弟のような存在だった。以前、彼に他の女性の存在を感じた時も、そのことを追求せず静観していた。巧は、自分の移り気を察している筈の悠奈が何も言わないことに後ろめたさを募らせ、結局は彼女一人に気持ちを戻す。喧嘩もなく穏やかに付き合いを続けているのは、悠奈が母親のような気持ちに徹しているからだった。

8時を過ぎた頃、店内は満席の状態で客の笑い声や店員のオーダーを読み上げる声で賑わっていた。店の玄関に置かれた木製の長椅子には、席が空くのを待っている客が並んで座っている。

「恩田さん、悪いけど、上の座敷に人が足りないから手伝ってくれないかな？」

突然、バタバタと2階から降りてきた店長が、階段下にいた悠奈に声をかけた。

「あ、はい、いいですけど…」

「じゃ、とりあえず、先に2階のトイレチェックして、個室のお客様の空いた皿やグラスを引いていてください。あとはマネージャーに聞いて」

彼は早口でそれだけ言うと、忙しく小走りにカウンターに向かって歩いていった。

悠奈は、店長の指示通りに階段を駆け上がり、すぐ右にあったトイレの扉に掃除中の札を掛けて入った。トイレの扉を閉めた瞬間、身体に何かが通過したような、ふわっとした軽い目眩を感じ、足下がふらついて洗面台に両手を付き項垂れる。

―まただ…疲れてるのかな…。寝不足だし今日はやく寝なくちや。

最近、悠奈はこの奇妙な目眩を頻繁に感じていた。

洗面台で勢いよく水を出して、両手を冷たい水に晒し続けると、除々に目眩はおさまる。血圧は元から低かったが、貧血の目眩ではない。宙を浮いたような感覚と同時に、確実に何かが通り過ぎるのだった。人間の視線のような、感情のような、説明のつかない何かを感じていた。その度に気が遠くなるようなふらつきを覚えた。

ちょうど去年の秋頃からはじまった目眩は、月に2度程だったものが、この一ヶ月位は週に2、3度程度までに回数が増えている。日々の忙しさに、病院にも行かずじまいになってしまっていることを後悔する瞬間だった。

―しっかりしなきゃ

彼女は、軽く両頬を叩いて、無理矢理に鏡に向かって笑って見せてから、気持ちを入れ替えトイレ掃除にとりかかった。

店の忙しさがピークを過ぎた頃、2階での仕事を済ませた悠奈が下に降りると客は半数ほどに減っていた。厨房の横の洗い場には、洗い終わって積み上げられた食器が山積みになっている。布巾を片手に食器に手を延ばそうとした彼女は、音もなく、いきなり後ろからグッと腕を引っ張られた。

「悠奈ちゃん、ちょっと」

突然の人の気配に驚いて振り返った悠奈の目の前に、同期のアルバイトの樹杉ユキが立っていた。

「びっくりした…。どうしたの？」

面喰らった表情を浮かべた悠奈に、ユキは腕をつかんだまま、ここに笑っていた。

丸顔に、眉の上で切り揃えられた前髪。少し赤茶のボブが印象的な彼女は、顔全体で笑うような笑顔が魅力的な女の子だった。

だが、目の前のその笑顔が、悠奈にはいつもとは違って見えた。自分に向けられた視線が背後に抜けてしまっているような、微妙に焦点が合っていないような、どこか奇妙な感覚を受ける。

「ユキちゃん、大丈夫？」

顔を近付け、ユキの瞳を覗き込んだ。

「ちょっと、こっち来て欲しいの」

悠奈の呼び掛けを無視したユキは、ついてこいとばかりに手招きしたかと思うと、洗い場から座敷へと向かって歩いていく。悠奈は、理由が分からないながらも急いでユキの後を追いつ、1階席が見渡せるカウンター前に立っている彼女に追い付いた。

「ねえ、伍番席、見てみて」

ユキは、悠奈の耳に顔を近付けて小声で囁く。

悠奈は言われた通りにその席に目を向けたが、途端に、ふうっと

軽い目眩を感じた。

【1】目眩―2

―ただだ…酷く疲れてるのかも…

悠奈はこめかみを押さえると、ゆっくり深呼吸し、目眩とそれに伴う不安な気持ちを落ち着かせた。

「どうかした？ 頭痛？」

「え…あ、ううん、何でもないの。で、伍番がなんなの？」

悠奈は、心配気に声をかけてきたユキに、少し無理をして笑顔で答えた。

「ん…、あの、団体客なんだけどね…」

座敷に目を向けて呟くユキの声に促され、目眩の余韻を感じながらも、再び視線を伍番席に向ける。

店の入り口から一番近い伍番の席に座っていたのは、10名近くの団体客だった。そこには二十歳前後の男女のグループが座っていたが、各々が個性的で素人離れしていて、この居酒屋の一角に異質な空間を作り出していた。

「こっち向いて座ってて、帽子被ってる人いるじゃない？ あの人どこかで見たような気がするんだけど、悠奈ちゃん知らない？」

「…え、ん、帽子？ 被ってる人はいるけど…。ここからじゃ良く見えないなあ…」

背筋を伸ばして首を傾けながら、悠奈は伍番席を凝視した。

そこにはハット帽を目深に被って、薄手の皮のジャケットを着た人が座っていることは確認できたが、帽子の顰で表情までは分かりづらい。彼は決して目立つ行動はしていなかったが、団体の中でも浮き立つ存在感が目を引かせた。

二人が、伍番席に目を向けていると、後ろで小さく舌打ちが聞こえる。

「また堂藤亜希かあ？」

巧が、いつの間にか厨房からカウンターに出てきていた。

「なに？ 堂藤って？ 巧くん、彼のこと知ってるの？ あの団体知ってるの？」

咄嗟に目を輝かせて振り返ったユキは、彼を質問攻めにした。

「：いやあ、団体ってか、俺が知ってるのはあの帽子の男、堂藤だけだ。悠奈は知らないのか？ あいつ、うちの大学の俺と同じ4年生だぞ。やたらと女にモテモテで騒がれてるだろ？」

面白くなさそうな声で呟く。

「へえ：そうなの？ 知らない」

悠奈は、帽子の彼を見つめたが、見たことも、堂藤という名前を聞いたこともなかった。

「ユキ、あれはやめとけ。常にいい女が周りを固めてるから、お前なんか相手にもされないぞ。」

「ベ…べつに、そういうんじゃないって、見たことある人だったから…」

「あゝ、なんか昔、雑誌モデルしてたとかなんとかって噂だからなあ…。それで見たことあるんじゃないの？」

吐き捨てるように言った巧は、そんなにいい男かあゝ？ と、ぶつぶつ言いながら厨房に戻って行った。

「ってことみたいよ。分かった？」

まだ、じつと放心状態で伍番席を見ていたユキに、悠奈は苦笑いで声をかける。

「あ、うん、雑誌かなにかで見たのかもしれないね…」

心ここにあらずという感じで、口先だけで答えたユキの顔には、能面のように表情が見られない。

「ユキちゃん、大丈夫？」

「え？なにが？」

ユキは、ふっと夢から覚めたように不思議そうな顔をした。

「…ん、なんでもない。あ、わたし、そろそろ片付けに戻るね」

悠奈は、ユキの様子に違和感を覚えていたが、考え過ぎだろうと思いつながら洗い場に戻った。

1階席の客も全て帰り、午前1時少し前になった頃、店内がほぼ片付いたのを見計らって、悠奈は掃除機をかけはじめていた。

「あれ〜？」

ちょうど悠奈の目の前で、かがんで座ぶとんを整頓していたユキが声をあげた。

悠奈は、その甲高い声に、掃除機のスイッチを切って彼女を見る。

「どしたの？」

「携帯忘れてる」

ユキは、手に持ったレモン色の携帯を、ほらつとばかりに高く上げて見せた。

「この携帯…この席って、確か堂藤って人が座ってたんだよね…」

独り言のように呟いたユキは、その携帯電話を躊躇せず開いた。

「ユキちゃん、携帯、店長に渡した方がいいよ」

悠奈は、他人の電話を覗く行為に驚いて声をかけたが、ユキは全く聞こえていないかのように無心でボタンを押し続けている。

「ユキちゃん?!」

咎めるような呼び声に、ユキは我に返ったように携帯電話から目を離れた。

「あ…じゃ、これ、ごめん、店長に渡しに来て」

とってつけたような笑顔浮かべると、立ち上がって手を延ばし、携帯電話を差し出した。

—なんで自分で持って行かないんだろ…

いきなり携帯を渡された悠奈は、普段のユキらしくない行動を不思議に思いながらも、店の入り口のレジで売上げの計算をしていた店長に電話を届けに行く。

「店長、すみません、携帯電話の忘れ物なんです…」

小銭を数えていた店長に、小声で気を遣いながら声をかけた。

「え、携帯？」

店長が、少し面倒そうに彼女を振り返った瞬間、店の玄関の扉が音もなくスッと開き、微かにオリエンタルな柑橘系の風が流れ込む。

「あ…」

香りに誘われるように視線を向けた悠奈は、思わず小さく声を上げた。

「…あの、携帯、忘れてなかったです？」

落ち着いた声と静かな物腰で店に入って来たのは、さっきまで伍番席にいた堂藤と呼ばれていた彼だった。

悠奈は、間近で見ることになった彼の姿に、強い引力のあるオーラを感じ目を奪われた。細身の長身に、さらりとした茶色い髪。帽子を取っていた彼の表情を目前にした彼女は、長めに延びた前髪の奥の、切れ長で魅惑的な瞳に吸い込まれる。

「恩田さん、その携帯、お客さまの携帯じゃないか？」

店長は悠奈の持っていた携帯を見ると、

「あちらの携帯でしょうか？」

と、彼ににこやかに笑って聞いた。

「そう、そうです」

ほっとした表情を見せた彼は、レジの横に立っていた悠奈に数歩近付いた。

「…あ、ど…どうぞ」

何故か自分の鼓動が聞こえる程の緊張を感じていた悠奈は、視線を落としたまま、携帯を両手で持って差し出した。

「ありがとう」

お礼を言った彼は、悠奈の手の平から携帯を取ったかと思うと、数センチ程持ち上げたところで手を止める。

なにか不都合があったのだろうかと自然と彼を見上げた彼女は、一瞬、時が止まったかのように息を詰まらせた。深く落ち着いたオリーブ色の瞳に真直ぐ視線を捕まえられ、逸らすことができない。

逃げたくても逃げられない、そんな無力な感覚に落ちた。

彼は、悠奈に向かって静かに微笑うと、何もなかったように携帯をポケットに入れ、店長に軽く会釈して店から出ていった。

「恩田さん、もしかして知り合い？」

「…え、いえ…」

店長の不信気な表情に、逃げるようにさっさとその場から離れる。悠奈は、理由の分からない胸の動悸を抑えることができず、急いで洗い場に行くとコップに水を注いで一息で飲み干した。

「なに？ なんなの？ この気持ちは…？」

彼と視線を合わせた時の、不安と期待が絡まったような、今までに感じたことのない胸の高鳴りに戸惑いを感じていた。

「あの瞳は…」

悠奈は、自分のざわついている胸を、握りしめた両手で強く抑えた。

【1】目眩―3

居酒屋から出て大通りの歩道を一人で歩いていた亜希は、路肩に見慣れたビートルが止まっていることに気付く。迷わずゆっくり車に近付き、助手席側の窓をコツツと軽く叩くと、運転席側にまわりドアを開けて乗り込んだ。

「どうした？　こんな時間に」

シートを下げて足を伸ばした彼は、助手席側を見ることもせず、ジャケットのポケットから煙草を出して、少し前屈みになるとジッポで火をつけた。

「嫌な予感がしたの。あなたは携帯の電源切ってるし、仕方ないから宏樹に電話したら、一緒に居酒屋にいるっていうじゃない。わたしを除け者にしたわね…」

助手席に座っていた雑賀留美は、亜希の右手の煙草を取り上げると、真っ黒な長い髪を耳にかけ、背もたれに凭れて一吸いする。

「そんなつもりはない」

「恩田悠奈でしょ。わたしに会わせたくないの？　そんなに彼女が気になる？」

留美はイライラした声で、その完璧とも言える程整った透き通る白い顔を亜希に向けた。

彼は、そんな彼女の声が聞こえていないかのように、黙ったままエンジンをかけると車を発進させる。

「…亜希は、わたしの心配なんて何も分かってないのよ」

彼女は悲し気な声で言い放つと、足を組んでネオンが流れる窓の外に投げやりに目を向けた。

亜希は、運転しながら再び煙草に火を付け一吸いし、前を向いたまま彼女の肩に優しく手を乗せた。

「誤魔化されないわよ」

軽くあやされているような気分になった留美は、振り向き様に大きな瞳で亜希を睨んだ。

「大丈夫だから。心配しなくていい」

「心配いらない訳ないじゃない。あなたを解るのはわたししかない」

叫ぶように言った彼女は、身体を揺すって肩に置かれた彼の手を払いのける。

亜希は信号待ちで煙草を消すと、ハンドルに両肘をつき、留美に視線を向けた。

「俺が解るのか？ 留美は同士だからな…」

微かな笑みを浮かべて呟く。

留美は、彼の同士という言葉から一線が置かれたことを読み取り、胸が締め付けられるような切なさが入み上げてくることを感じた。

「意地悪っ」

抑え切れない痛みを誤魔化すように、咄嗟に運転席側に身を乗り出し、亜希の首に白い両手を回して、そっと唇に触れる程のキスをする。

「…車、出せないだろ。危ないから大人しく座ってろ」

全く顔色を変えない彼は、涼しい微笑みを浮かべたまま留美を言葉で制すると車を出した。

「俺は、お前の従兄だけど一応男なんだから。今度、さっきのようなことした時は…。何もしない保証はないからな」

淡々と、まるで妹を相手に優しく言い聞かせているような口調を聞いた留美は、自分の気持ちが届かないもどかしさに苦しくなる。彼女は、亜希が自分のことを異性として見ていないということとは十分過ぎる程分かっていて、分かっているながらも、彼への愛しさは募るばかりで止めることが出来ない。

— 恩田悠奈 —

心の中でその名前を呟くと、今まで感じたことのない、胸が焼け焦げてしまうような嫉妬心を感じる。

彼女は、無言で運転している亜希の横顔を見つめながら、彼を自分の腕の中だけに独占してしまいたい気持ちが身体の隅々まで広がっていることに気付いていた。

【2】予感―1

六月最初の日曜、悠奈は午後から夕方のバイトに入るまでの時間、ユキに誘われて駅の地下街に来ていた。美容関係の専門学校に通っているユキは、暇さえあれば洋服や化粧品の店をチェックして回っている。

「悠奈ちゃん、歩き疲れたからここでお茶しよーよ」

両手に重そうに紙袋を持って、ヒールの高いサンダルを履き、疲れた足取りになっていたユキは、地下街の小さなカフェの前で足を止める。

「まったく、買物し過ぎじゃないの？」

悠奈は笑いながら、そのカフェにすでに入っているユキの後ろを付いていった。

「先に座っておいて。注文しておくから」

ユキに席に座るよう促した彼女は、レジで二人分のアイスコーヒ―を注文した。

奥のテーブル席で、紙袋をどこにどう置こうかと悩んでいるユキの姿を見ると、微笑ましくも羨ましくも思える。

ユキは、一人で学校近くのマンションに暮らしていた。生活をしていくことに必要なお金は、親の仕送りだけで余裕でまかなえている。彼女のバイト代は、洋服、化粧品、旅行に消えていった。

―そういえば、随分洋服も買ってないな…今着ているパーカーも

何年前のдаро：

悠奈は、自分の薄手のパーカーにジーンズという、あまりに色気ない自分の姿に苦笑いしながら、アイスコーヒーを乗せたトレイを運んだ。

「アイスコーヒーでよかったよね？」

テーブルにトレイを置くと、ユキの前の席に座った。

「ありがとう」

ユキは、にこにこつと顔全体で笑う。

彼女は華やかだった。髪型も化粧も、神経質なくらいに気をつけている。

悠奈は、ユキの薄いピンクの袖が膨らんだフェミニンなセーターに目を向けると、

「ユキちゃんて、女の子してるよね」

と、ため息まじりに呟いた。

「え？ やだ、そうかな？」

ユキは、嬉しそうに顔を綻ばせる。

「だって、悠奈ちゃんなんかは、土台がいいから何もしなくても目立つけど、あたしは頑張って着飾らないと誰も気にかけてくれないから」

そう言葉を続けるとアイスコーヒーを一口飲んだ。

「そんなことないよ」

「そうよ。あたしみたく、のっぺりした顔は、化粧で凹凸つけるの大変なんだよ。寸胴を誤魔化すために洋服もあれこれ悩まなきゃいけないし。悠奈ちゃんみたいに可愛く生まれてたら、こんなに必死に自分を作らなくてもすんだのに…」

彼女は、羨まし気に、上目遣いに悠奈を見た。

「何言ってるの。ユキちゃんはかわいいよ」

「え、またまた。ほんと？ でも、嬉しい。ありがとう」

ユキは照れながらも、嬉しそうな笑顔で素直に褒め言葉を受け止めた。

悠奈には、そういう真直ぐな彼女が、とても可愛らしく感じられる。自分は、こんな風に素直に気持ちを表現できるだろうかと考えてみたが、全く想像できなかった。巧の前でも、『女の子』にはなれない。気がつけば、どこかで気持ちをセーブして、何事も客観的になって見ている自分がいた。

アイスコーヒーを半分程飲んだユキは、突然頃合を見計らうような顔をして、普段より改まった表情で話し出す。

「あのね…」

「え？」

悠奈は、声の色が変わったユキを見つめ、次の言葉に聞き入った。

「悠奈ちゃん、次の土曜って何か予定ある？ 巧くとデートとか？」

彼女は、悠奈の顔を覗き込むように聞いた。

「え…、ううん、別に巧くんと会う予定はないけど…」

悠奈は、できるだけ土曜はバイトに入らないことにしていた。予定がある訳ではないが、週に一度の休日と決めていて、一日中家でのんびりすることが多かった。

「じゃあ、つきあってほしいのっ」

ユキは、テーブルから上半身を乗り出して悠奈に迫った。

「…は？ なにを？」

悠奈は、彼女の勢いに身体を少しのけぞらせる。

「じつはね、先月、バイト先に堂藤って人が来てたでしょ？ 彼と連絡とってるんだ」

ユキは目尻を下げて嬉しそうな笑顔をつくった。

「え…？」

悠奈は、異常に気持ちが揺さぶられた自分に気付く。堂藤亜希。彼が椿屋に来て1ヶ月以上経ち、その存在を忘れかけていた筈なのに、堂藤という名前を聞いた途端、胸を何かが突き抜けた。

「彼、携帯忘れていったじゃない？ あの時、すかさず彼のナンバーをあたしの携帯に送ったんだ…で、後で電話して。まだ、あれから会ったことはないんだけど、各日くらいでメールしてるの」

ユキは、頬を少し赤らめながら、照れたように両手で自分の顔を挟んだ。

「…まじで？ ユキちゃんて、すごい積極的なんだ」

悠奈は、ユキの行動力に目を丸くした。

「だって、一目で、すごく気に入っちゃったんだもん。亜希さんのこと」

悠奈は、堂藤が椿屋に来た日のことを思い出していた。

あの日は、やたらとユキらしくない行動が目についた日だった。

確かに、ユキが彼を気にしているような言動は窺えたが、常に微妙な違和感があったのだ。

にやにやした幸せそうな笑顔のユキを見つめながら、悠奈は何かが府に落ちないような気がしてならなかった。

「それでね、土曜に、クラブでパーティーがあるんだって。そのパーティーに呼ばれちゃった」

「クラブ？」

「うん、楽しいから、おいでよって。友達も沢山呼んでおいでって。だからね、悠奈ちゃんと一緒に行ってほしいの」

ユキは、甘えるような声を出す。

「え…でも…わたし、クラブとかは…」

少しひきつった笑いを浮かべた悠奈の左手を、ユキは、いきなり両手で掴む。

「お願い。あたし、一人じゃクラブなんて行けない…」

「…でも、その彼はユキちゃんの顔さえ知らないんじゃないの？
そんな状態で会えるの？」

「大丈夫。あたしの写メ、送りまくってるから。ね。お願い」

瞳を潤ませたユキは、悠奈をじっと見つめた。
その瞳に切迫されたものを感じ、

「…うん、じゃあ、行こうかな…」

悠奈は、押し切られるように了承してしまった。

やったーと両手を上げて喜ぶユキを見ながら、悠奈は、複雑な自分の気持ちを感じていた。

本来なら、クラブというような圧迫感の感じる空間は苦手で、どんなに誘われても行くことはない場所だった。今回、ユキに頼み込まれて仕方なくという体裁をとったが、内心はそれだけではないと自分で分かっていた。頭の片隅で、堂藤のことが気になっていたのだ。

―彼に会いたいと思っている？

彼女は自問自答する。

たった一度だけ顔を見ただけの彼に、何故か、もう一度会ってみたい、否、きつと会うに違いない、そんな宿命に近い予感が無意識の底にあった。

「ほんと嬉しい。誰も一緒に行ってくれなかったらどうしようって思ってたの。これで亜希さんに会える」

素直に嬉しそうな笑顔のユキに、悠奈は微かな罪悪感を感じていた。

【2】予感―2

「またまた堂藤かよ」

大学の食堂の端のテーブル席に座っていた巧は、両手で頭を抱えて大袈裟にため息をつく。

「つてか、巧、シャツ汚れてるよ」

向かいの席に座っていた悠奈は、彼の、黒いTシャツの上に着ていた綿シャツの胸の辺りを指さした。

「あ、さっき食べたカレーうどんだ…」

彼はシャツを引っ張りながら俯いて、汚れていることを確認したが、「目立たないからいいや」と、そのままにしておいた。

悠奈は、そんな大雑把で飾らない巧と一緒にいるのが楽だった。自分も無理せず自然につきあえるからだ。

「ユキにも困ったもんだよな…。クラブなんか一人で行けっの」

彼は、テーブルに片肘をついて顎を乗せる。

「で、悠奈は、一緒に行くんだな？」

少し不機嫌そうに彼女を見た。

「…うん。どうしてもって言われると断れなくて」

「ふーん…」

巧の不満気な顔に、悠奈は手に汗がにじんでくるのを感じた。嘘はついていなかったが後ろめたい。精一杯の作り笑いを彼に向けると、テーブルの上に置いていたペットボトルの水を、気まずい空気を誤魔化すように一口飲んだ。

巧は、ふと悠奈から視線を外し、食堂の入り口の方角を見つめると皮肉っぽく呟いた。

「：噂をすれば、ってやつだな」

彼の視線をたどるように悠奈は振り返る。

胸が一瞬大きく高鳴った。そこには、居酒屋で見た堂藤亜希の姿があった。キャンパスで初めて見る彼は、黒いスカジャンと所々が破れたジーンズという格好を下品にならずに着こなしている。他の学生と大差ない格好をしている、目立ってしまうのは彼の天性の魅力かもしれない。

彼の少し後ろを、真っ黒な長い髪で、身体にフィットした赤いミニのワンピースを着た長身の美女が歩いていた。

「さすがに今日は取り巻きはいらないな」

巧の言葉に、悠奈は身体を戻して彼を見た。

「取り巻き？」

「そう。あの彼女、留美っていうコが一緒にいる時は、他の女は堂藤に近寄れない。あいつが一人の時は、必ず大勢のファンみたいな取り巻きがくっついてるんだけどな」

彼は、面白くなさそうに鼻で笑いながら言う。

「へえ…てか、巧、なんでそんなこと知ってるの？」

「え、だから、悠奈が知らない過ぎなんだって。あいつらの噂はどこに行っても飛び交ってるぞ」

「ふん…」

悠奈は、芸能人でも確認するような感覚で、もう一度振り返った。亜希は、食器返却口の横に設置されていた自動販売機の取り出し口から缶コーヒ―を取り出している。そして、落ちた前髪をかきあげながら、ゆっくりと振り向いた。

悠奈のいる方向に―。

はっとして息がつまりそうになった彼女は、急いで前に向きなおる。

「巧、そろそろ行かない？」

そわそわしながら、椅子から軽く腰を上げた。

彼女は、亜希の姿が気になりながらも、胸に忍び込む不安を感じ、すぐに立ち去りたい気分になる。

「は？ まだ時間あるだろ？」

不思議そうな顔をして聞いた巧は、何かに気付いたように悠奈の斜後ろを見て、黙ったまま序々に視線を上にはずらしていった。

悠奈は、その彼の様子を見ながら、自分の大きくなっていく動悸を感じる。

斜後ろから足音を感じた彼女は、身を縮めて構えたが、ちょうど

真横を横切ったその影に否応なく吸い込まれるように視線を向けた。

―切れ長の、色素の薄い瞳

その瞳が、すれ違い様に、静かに彼女の中に入ってきた。

悠奈は、一瞬、時間が止まったような感覚に落ち、胸の奥がざわつきながら熱くなるのを感じる。

居酒屋で携帯を渡した時のことなど、彼は覚えているはずもなかったが、その瞳は、確実に悠奈の瞳をポイントにして向けられた。亜希が通り過ぎると、彼の後ろを歩いていた長身の女性が続く。例えば、色白のインドの美女という顔だちで、パーツが大きくバランスよく整っている。彼女は悠奈の横を通り過ぎると、不意にふっと振り返った。見下ろし加減に悠奈の顔を見つめ、口許に冷たい笑みを浮かべた。

―なに？ 見られた？

確実に二人に視線を向けられていた悠奈は、冷やりとした気が背中落实到したことを感じた。

「あいつらとクラブ？」

巧は、通り過ぎた二人の姿を目で追いながら不機嫌そうに呟くと、ペットボトルを取って半分程残っていた水を一気に飲み干した。

「やっぱ、気にいらないな。クラブ、断れないなら一緒に行くからな」

貧乏ゆすりをしながら悠奈を軽く睨む。

―本当に子供っぽいんだから：

悠奈は、巧の分かりやすい反応を見ながら小さくため息をつき、困ったように微笑んだ。

―でも…どうして、わたしを見たんだろう：

二人とすれ違った時の彼等の視線に、説明のできない不安を感じていた。だが、同時に彼女の心の奥底で、その理由を確かめたいという、怖いもの見たさのような好奇心が湧いていることも事実だった。

【3】影へ近付く―1

土曜は、悠奈にとって、待つ程もなくすぐにやってきた。

同じような日々の変化のない一週間など、矢のように過ぎていく。彼女は昼頃に目を覚ますと、洗濯と掃除を済ませてキッチンで冷蔵庫の中を覗いていた。

百貨店の鞆売り場で働いている母は、土日はほとんど出勤している。クラブに行くまでに母の夕飯を用意しておこうと、合い挽き肉と、玉子、玉葱、ブロッコリーを次々と取り出し、オムレツの下準備をはじめた。

玉葱をみじん切りにしていた時、キッチンのテーブルの上に置いていた携帯が鳴り、メールが届いたことを知らせた。

「ユキちゃんだ…」

呟くと、手を洗って携帯を開き、その内容に目を通した。

【今日、クラブに行く前に、うちに寄ってほしいの。どうしても着ていく服が決まらないから、悠奈ちゃんに見立ててほしいの。だから、巧くんと待ち合わせてる30分前の8時半くらいに来てく】

悠奈は、その文面にユキらしさが出ていて思わず笑ってしまう。

―仕方ないなあ…

了解のメールを返信する。

服に悩むくらい気合いが入っているユキに感心しながらも、自分もクラブという場所に何を着て行けばいいのか分からないことに気

付いた。

家事を終えた悠奈はシャワーを浴びると、自分なりにお洒落をして、少し早めにユキのマンションに向かう。

ユキのマンションは、学生や単身者用のワンルームマンションで、通勤・通学に便利な場所にあった。バイト先の椿屋からは歩いて十分もかからない。

8時を過ぎた頃にマンションに着き、部屋のインターフォンを押すと、数秒もしないうちに玄関が開いて、スリッパ姿で頭にカーラーを巻いたユキが笑顔で出迎えた。彼女の大胆な姿に驚き、悠奈は全開になっていた玄関を急いで閉める。

「ごめんね。何着ていいか、全然決まらなくて…」

困ったように甘えた声を出したユキは、悠奈を部屋に招き入れる。その、女の子らしいピンクを基調にした部屋には、ベッドの上にも床の上にも洋服が敷き詰められていた。決して広いとは言えない部屋には足の踏み場もなくなっている。

「かなり悩んでるみたいね…?」

「えー、だって、亜希さんに会えるし」

悠奈は、溢れんばかりの笑顔を前にして、ユキが服装に悩んでいたのは、クラブという場所に行くからではなく、亜希に会うためだったことに今更気付いた。

「てか、悠奈ちゃん、今日はめずらしく女のコッぽいね。そのワンピースかわいい」

「…そう? ユキちゃんが何を着るか悩む程だから、気をつかわな

きやいけない場所なのかと思ってたんだけど…」

どうも違うみたいね…と言いたい言葉を飲み込んだ。

悠奈は、オフホワイトでAラインの膝上丈のワンピースを着ていた。普段からジーンズを履くことが多い彼女にとって、かなり着慣れない服装だった。

「え？ 全然。めっちゃラフで良かったんだよ」

「そうなんだ…」

―無理しなくて良かったんだ…

悠奈は、心の中でため息をついた。

「ねえねえ、このスカートなら、トップはどれがいいかなあ？ 亜希さんて、女の子のタイプってどんななんだろう？」

ユキは、散らかっている服の中のミニスカートを指差しながら、眉間に皺をよせて真剣に悩んでいた。

―彼の好みのタイプを気にするほど、ほんとに好きなんだ…

悠奈は、ユキの気持ちを再認識する。

「彼のタイプ…。までは分からないよねえ…」

ふと、食堂で亜希の傍にいた留美の存在を思い出した。

―二人はどういう関係なのだろうか…友達同士にしては距離が近

くて、恋人同士にしては距離が遠いような…

そんな悠奈の思考をかき消すかのように、

「無難に、可愛い系で行くことにするっ。」

と、ユキの決断した声が響いた。

「じゃあ、このフリンジスカートがいいんじゃない？」

「あ、それいいでしょ。履いたら可愛いんだよ。でも短すぎかも」

「んー、なら、このパンツ？」

「あ、あたし、このキャミ着たいんだあ」

「じゃあ、色的にこのパンツじゃ無理だね」

「え、じゃあ…」

二人のやりとりは、巧が待ちくたびれて悠奈の携帯に電話をかけてくるまで続いていた。

シルバーのワゴンで迎えに来ていた巧は、二人を乗せてクラブまで車を走らせている間、すこぶる不機嫌だった。

「巧くん、ごめんってば。服が決まらなかったの」

運転席の後ろのシートに座っていたユキは、巧を覗き込むようにして愛想笑いをする。

「…そんなことで三十分以上も待たすなよ」

至って不機嫌さは変わらない。

「ビール、奢るからっ。ねっ」

「…。俺、運転」

「一杯くらいなら、いいでしょ？ 待たせたお詫びに奢らせて」

痛々しい程、彼に気をつかっているユキに、悠奈が助手席から振り返って口助けをする。

「大丈夫よ。巧くんは心が広いから、すぐに機嫌なおるわよ」

“心が広いから”を強調するように言った。

「…。ったく…そんなに気にしてないって」

巧は、呆れたように言い放ったが、横顔にはわずかに笑みがこぼれていた。

悠奈は、少し機嫌がなおった彼を見てほっとする。単純で素直な彼の扱い方には慣れたものだった。

三十分程して、国道沿いにあるクラブに着く。そこは1年程前に使わなくなった倉庫を改装したもので、一見、怪しい雰囲気のある大バコクラブだった。

建物の正面扉の上に『J A N G G』というネオンサインが青く光っている。扉を開けると、真っ暗なスペースにキャッシャーだけが浮き上がって見えた。

【3】影へ近付く―2

「どうぞ」

キャッシャーの前に立っていた店員が、気軽な感じで声をかけてきた。ユキは、急いでキャッシャーの前まで行く。

「あの、樹杉といいますけど…堂藤さんの知り合いで」

「あゝ、亜希さんの…。聞いてるよ。そのまま入っちゃって」

店員は、にっこり笑って、奥の扉を指差した。

「あ、それと、ロッカー使うなら、右奥にあるよ」

彼は付け足すように言った。

ロッカーに向かって歩くユキの後ろを、悠奈と巧は、落ち着かない様子で付いていった。

「ユキ、金いらないのか？」

「んゝ、亜希さんに、キャッシャーで堂藤って名前出してって言われてたから、そうしたんだけど…」

「へーえ、憎いね。ま、タダに越したことはないんだけどな」

巧は、二人がロッカーに荷物を入れるのを見ながら、皮肉めいた口調で呟いた。

荷物を入れ終わり、ユキがクラブの中に入る扉を開けると、大音

量が流れ出す。前方の大きな柱の向こうにフロアが広がっていて、踊っている人達が数名見えた。そのフロアを囲むようにソファ席が並べられ、奥の一段高い場所でDJが回している。吹き抜けになっている2階の一部にも、ソファ席が何席もあった。

「まだ時間がはいから人は少ないみたい。何か飲もうよ」

ユキは、音に負けないように声を張り上げてそういうと、二人の手を引っ張って、入り口の右側にあったカウンターに歩いて行く。

「彼を探さなくていいの？」

悠奈は、カウンターで、ドリンクメニューに目を向けていたユキの耳に口を近付けて聞いた。

「…だって、素面じゃ緊張しすぎて何話していいか分からないから、ちょっと飲んでから探す」

「あ、なるほど、勢いつけてからね…」

「えっと、二人とも、ビールでいいよね？」

ユキの質問に二人は頷いた。

三人は、缶ビールが各々に回ると、誰からともなく小さく乾杯をする。一杯目のビールを、ユキはほとんど一気に飲み干した。

「おいおい、大丈夫か？」

「大丈夫よ。もう一杯飲んでいい？」

「別にいいけど、潰れんなよ…」

彼女は、巧の言葉など聞いていないかのように、ウェイターにビールを追加注文していた。

カウンターから見るフロアは薄暗く、たまに照明の光が動いている。エレクトロというジャンルの音の下で踊っている人達を見つめながら、悠奈は、その音と光が混ざりあった異次元のような空間に、現実逃避するにはベストな場所だと冷静に感じていた。

「あれ、留美ってコ…」

巧が悠奈の肩を軽く揺さぶった。

悠奈は、彼の視線の先にいた人物に目を懲らした。カウンターに向かつて歩いてきたのは、長身で長い黒髪の、学食で亜希と一緒にいた彼女だった。真っ赤な胸下までのショート丈のTシャツに、黒いマイクロミニのスカート、膝上まである夏仕様の編み上げブーツを履いたモデルのような彼女は、暗いクラブの中でさえ周りの視線を集めていた。

「誰？ 知り合い？」

ユキは、不思議そうに二人を見た。

カウンターの傍まで来た留美は、笑顔を浮かべて三人に近付いた。

「こんばんは」

彼女の瞳は、まず悠奈に向けられ、数秒絡みついたかと思うと、ふっとユキに移動する。

「ユキちゃんね？ 亜希から聞いてる。写メ見てたからすぐ分かっ

たわ。」

突然話しかけられたユキは、一瞬、面喰らった表情になり、目の前にいた留美を上から下まで見つめながら「：そうですか」と、無表情に小さく呟いた。

彼女の態度は、明らかに留美に対抗心を抱いたものだった。

「ちっちゃくって可愛いコね。亜希なら、奥の席にいるから、行ってみるといいわ」

くすりと笑った留美は、三人の間をすり抜けると、カウンターでウェイターと親し気に話し出した。

「：悠奈ちゃん、ついてきてっ」

ユキは、少し不機嫌に悠奈の手首を荒っぽく掴んで歩き出す。

悠奈は巧を振り返ったが、彼は呆れたように手を振って見送るような態度を示した。

ユキは、悠奈を引っ張りながら、フロアの脇の通路をVIPに向かってずんずんと歩いていた。DJブースの後ろから、十段程の階段を上がった場所に、フロアが見渡せる席が設けられていた。横に並べたテーブルを囲うようにソファが並べられている、二十名程しか座れないスペースだが、このクラブではVIP席の扱いになっている。

階段を上がった所で、悠奈から手を離れたユキは、一瞬、怯んだように固まった。VIP席には十数名程が座っていたが、どの人物も個性が強く、一般人には足を踏み入れにくい雰囲気を出していた。足を止めたユキの隣で悠奈が立っていると、後ろから両肩を掴んで顔を覗き込んできた男がいた。

「君、亜希の知り合い？」

金色の短髪に、面長で可愛い顔つきの彼は、にこにこ笑いながら悠奈に聞いた。

悠奈が慣れ慣れしい態度の彼に戸惑っていた時、留美の声が真後ろで聞こえる。

「宏樹、だめよ」

彼女は、彼の手を悠奈から離して、睨むように見つめた。

「このコは彼氏と一緒に来てるの。ベタベタしないで」

「なんだよ、ちょっと話してただけなのに」

彼は少し拗ねた表情を作ると、さっさとソファ席に向かって歩いていった。

「さ、あなたたちも来なさいよ」

留美は、居場所がなさそうなユキの腰に手を回したかと思うと、ソファ席に向かって連れて歩く。

残された悠奈は、仕方なくその二人の後に続いた。

「あら、亜希はいないの？ 亜希のお祝いなのに、仕方がないわね…」

辺りを見回した留美が、呆れたような声をあげると、悠奈とユキに空いているソファを指して座るように促した。

ソファの周りには、有名人の祝い事かと思う程、花束や綺麗に包装された箱が山積みになっている。

【3】影へ近付く―3

「もしかしたら、亜希さん誕生日なの？」

ユキは、目を丸くして悠奈に向かって声を張り上げた。

「え…わたしが知ってるはずないじゃない。ユキちゃん、聞いてないの？」

悠奈は、驚いているユキをなだめるように言う。

「あなたたち、亜希の誕生日パーティーって知らずに来たの？ 亜希とどういう知り合い？」

突然、ユキの前に座っていた、ピンクのウィッグを着けた、ボンデージスタイルの女性が二人の会話に入ってきた。

「え…あ、わたしたち居酒屋でバイトしてて…。そこに亜希さんが来てたんで…。だから、知り合ったんです」

ユキは、戸惑いながらも、途切れ途切れに返事を返した。

「…へー、めずらしい。じゃあ、普通の学生よね？」

「ええ…。めずらしい？」

「だって、亜希って普通の学生の知り合いなんていないもの。ここに集まってるメンバー見ても分かるでしょ？ まあ、亜希のファンみたいなコは学生に山程いるけどね」

彼女は、小馬鹿にしたように笑うと、シガレットケースから煙草を取り出した。

悠奈は、彼女の言葉を聞いて、再度この場にいる人達を眺めたが、ウィッグの彼女の言葉は十二分に納得できた。悠奈とユキは普通過ぎて、この場の空気から完全に浮いている。悠奈は、十数名のその輪の中に座っていることに、海外に來たような違和感を覚えた。

一瞬、周りがどよめいたかと思うと、スタッフの二人が、席までシャンパンと大きなケーキを運んできていた。

「亜希さんのお誕生日祝いなんですけど……。いらっしやらないですね。このシャンパンはオーナーからのプレゼントで、こちらのケーキはスタッフからです」

そう言って手際よくシャンパンを抜いてグラスに注ぐと、もう一人のスタッフが各席に置いていった。留美は、彼等にありがとうと言い、全員にシャンパンがいきわたるのを確かめると、座ったままグラスを掲げた。

「じゃ、その辺をふらふらしている主人公は放っておいて、もう一度乾杯しましょ。亜希、二十二歳の誕生日、おめでとう」

彼女の声の後に続いて、おめでとうという声が飛び交う。

クラッカーを鳴らし、残っていたシャンパンをかけあって盛り上がっている彼等を見ていると、悠奈は何故か居心地が悪くなり、ユキにトイレに行くと言って席から離れた。

―巧くんはどこにいるんだろう？

客が増えてきている通路を抜けてカウンターまで行ったが、彼の

姿は見当たらない。携帯電話をロッカーに入れてしまっていた彼女は、人込みの中から巧を探し出さなければならなかった。

巧は、ダンスからは縁遠いタイプで、フロアの中にいることはまづない。一F席を探し回って巧を見つけられなかった彼女は、二階席への階段を途中まで上った所で、ふと足を止めた。階段を上がってすぐ右側にトイレがある。その横に、巧は壁に凭れて立っていた。彼の横には、まだ十代に見える、流行の服装で固めた女の子が立っている。二人は楽しそうに、お互いの頬をつねってじゃれあっていた。

悠奈は、数秒の間、二人から目を逸らすことが出来ず釘付けになったが、巧が女の子の頬に唇を近付けた瞬間、跳ねるように階段を降りてカウンターまで早足に歩いていった。

—どうして、わたしが逃げなきゃいけないの？

カウンターでジントニックを注文し、ウェイターがグラスに氷を入れジンとトニックを注ぎライムを絞っている手慣れた様子を見ながら、自分の行動を冷静に思い返して心の中で苦笑いした。

巧の行動は、全く予想できなかったことではない。過去にも浮気はあったのだし、こういう場所に来れば、普段よりも開放的にもなることくらい分かっていた筈だ。少しでも彼を放っておいた自分が悪いのだと、自分に言い聞かせようとしていた。

「放っておけばいいわ…」

口に出して呟くと、ウェイターに渡されたジントニックのグラスを一気に飲み干す。

すぐに、ジンライムを追加注文し、グラスを持ちながらフロアに向かった。身体に入ったアルコールが胃の辺りで熱くなって蒸発しているように感じる。更に一口、グラスに口をつけ、アルコールの

力で巧の存在を頭の外に追いやろうとした。

フロアでは、クラブに着いた頃より倍近くの客が踊っていた。皆、決められたようにDJブースに身体を向けて踊っている。

陶醉したように踊っている人達、どこか周りを気にしてぎこちなく動いている人達、友達同志で輪になって楽しそうに踊る人達、そんな群集を脇から見ていた悠奈は、ふと、一つの空間で目を止めた。

―あの人は…？

彼女は、フロア真中あたりで一際目立つ女性の姿に目を奪われた。

背の高いその女性は、目深にチューリップ帽を被っている。表情は分からなかったが、ふわりとした長いスカートの裾を持って、羽が生えたかのように軽やかに踊っている。

―なんて…

なんて、キラキラしているんだろう…

悠奈は、スポットライトを浴びているような、その姿に惹き付けられ、知らず知らずに目で追いつけていた。

―まるで蝶のよう…

曲が変わった隙について、その女性の周りに5、6人の女の子が群がると、一人が背伸びして悪戯気に女性の帽子を奪い、自分の頭に乗せた。

「…え」

悠奈は、思わず声を漏らして目を見開く。

帽子を奪われたその人物は、慌てることなくさりとした前髪を掻きあげながら微笑むと、変わらず曲に沿って心地よく揺れていた。

【3】影へ近付くー4

―違う世界の人だ：

目を奪われていた人物が亜希だと気付いた悠奈は、彼が自分と同じステージ上にはいない、遠い人間であることを実感していた。

―他人をあれだけ引き付ける魅力って何だろう。不思議な人：

ジンライムのグラスを空にした悠奈は、アルコールが身体にまわってきたことを感じると、フロアから離れてカウンターでペットボトルの水を受け取った。深夜に近付くにつれて増えた客で、落ち着いて立っている場所さえなくなり、ユキが座っているVIP席に向かう。

フロアの横の通路を人の波を避けながら歩いていた彼女は、いきなり後ろから、ぐいっと腕を掴まれた。驚いて振り返ると、見たことない、スーツ姿の男が立っていた。

「一緒に飲まない？」

悠奈は掴まれていた腕を引っ込め、その男を訝し気に見上げた。

「二人？ 二階席で一緒に飲もうよ」

男は、もう一度悠奈の腕を強く掴んで、自分に引き寄せた。彼女は、男から発せられている、きついアルコールの匂いに拒否感を抱く。

「は…離して。彼氏と来てるから」

「へえ、嘘だろ？ さっきからずっと見てたけど、一人で飲んだだろ？」

悠奈は、“ずっと見ていた”というその言葉に鳥肌が立ち、逃がれようと掴まれた腕に力を入れたが、全く動かない。

男は彼女を引っ張って、引きずるように力づくで歩きだした。

「いいだろ？ ちょっと一緒に飲むだけなんだからさあ」

「いやですって。離してっ」

悠奈は叫ぶが、その声は、音と人混みに消えていく。クラブという場所遊び慣れていない彼女にとって、声をかけてくる客をかわす方法など、知る術もなかった。

通路を強引に引っ張られていた時、前方から歩いてくる亜希の姿が目に入った。咄嗟に助けを求めたいという気持ちが湧いたが、たくさんの女の子達に囲まれて楽しそうに話している彼は、遥か彼方にある存在のように感じた。自分のことなど、知っている筈もない。悠奈は、一瞬でも助けしてくれるかもしれないと期待したことに、思いつきを感じて彼から目を逸らせる。

再び男から離れようと試みてはみたものの、力まかせに引きずられ続け、自分の力ではどうすることも出来ないことに情けなさを感じた。

―あ、スタッフなら…

この店の店員なら、この状態をどうにかしてもらえるかもしれないと思い付いた時、

「いっっ…！」

突然、男が短く声を上げて、数歩、横に飛んだ。

同時に、彼女は掴まれていた男の手から解放される。

不意に自由になった悠奈が、男に視線を向けると、隣には亜希の姿があった。

「あっら、ごめんなさい、ぶつかっちゃったわ」

いつの間にか男の肘の下あたりを掴んでいた亜希は、にっこりと笑って茶化すような口調で言い放つ。

悠奈は、突然の出来事に、何が起こっているのか理解できないまま、二人のやりとりに見入っていた。

「な…なんだ」

「アタシ、機嫌わるいの。誕生日だったのにバツゲームで今日一日お姉してなきやいけないのよ。そのうえ、変な客が、強引に女の子をナンパしてるの目にするからねえ…」

亜希は、そう言いながら、男の腕を、掴んだ手で握り潰すように力を入れる。華奢に見える彼は意外に力があるのか、男は大きく顔を歪めて口を開けたが、言葉にはならなかった。

「吐き気がするのよね」

口許に笑みを浮かべて手を離れた亜希を、男は数秒睨み付けていたが、全く動じない相手に観念したのか、そそくさとその場から立ち去った。

悠奈は、涼し気な表情の亜希の顔を見つめたまま、呆然と立ちつ

くしている。

「大丈夫？ 一人？ 彼氏は一緒じゃないの？」

亜希は、相変わらずのお姉言葉で悠奈の顔を覗き込んだが、彼女は心ここにあらずといったように、言葉を無くしたままだった。

取り巻いていた女の子達に席に戻るよう合図した亜希は、悠奈を見て軽く首を傾げ、ふっと微笑む。

「さてとお…このコ、どうしようかしら」

そう言って、ゆっくりと手を延ばし、優しく包むように悠奈の手を握った。

その手の暖かさと、彼から漂うオリエンタルな柑橘系の香りに、どくんっと心臓が脈打ったのを感じた彼女は、夢から覚めて正氣に戻った気分になった。

「いらっしやい。彼氏のところ、行きましょ。一人でいない方がいい」

亜希は、彼女を促すように歩き出したが、数秒後、何かを思い出したかのように足を止めた。

「それから。助けて欲しい時は素直に頼りなさい」

悠奈に軽いウィンクを投げ、優しい口調で呟いた。

「あ…」

彼女は、驚いた表情で亜希を見返す。

彼は微笑むと、彼女から目を離して、彼氏はどこかしら？ と、

辺りを見渡しながら歩き出した。

―わたしが助けて欲しいと思ってたこと、この人は理解ってた？

悠奈は、彼の洞察力に驚きを感じつつも、自分の手が大きな美しい手に繋がっていることに現実感がなく、ふわふわと宙に浮いたような気分で歩いていた。

「二階？」

「あ…いいです。わたし、一人で行けますから…」

悠奈は、巧が二階にいることは分かっていたが、女の子とじゃれている真最中だということも分かっていた。そんな場所に一緒に行ったところで、亜希が不快な思いをするだけだと思った。

「まかせなさい」

亜希は抽象的な言葉を返したが、不思議と悠奈はその言葉に安心を感じる。二階への階段に向かって足を進めている彼に、すべて任せてついて行こうと決めた。

二人が階段の下まで歩くと、その前に、待ち構えるように壁に凭れて立っている留美の姿があった。

彼女は、二人に目を向けて近付いてくると、

「あら、二人でどこへ行くの？」

と、にっこりと笑顔をつくって亜希の目の前に立った。

「彼女を彼氏にあずけにね」

「ふーん、このコの彼氏なら二階にいたけど、今行かない方がいいんじゃない？」

留美は、意味深な言葉を投げた後、悠奈をチラッと見た。

「かまわない」

笑みを浮かべた亜希は、悠奈の手を離して階段を上りだした。

「亜希っ！」

留美は追いつるように叫んだが、彼は僅かに振り返って口許に笑みを作ると階段を上っていく。

悠奈は、彼に続こうとしたが、激しい憤りを映していた留美の瞳が自分を見つめていることに気付いた。一瞬、身体全体に走る寒気を感じたが、留美を残し、急いで亜希の後を追った。

【3】影へ近付く―5

2階で亜希に追い付いた悠奈は、一番手前のソファ席に、巧と女の子が座っている姿を確認した。ソファの二人は、薄暗い空間がムードを高め、人目もはばからず密着状態で抱き合うように座っている。予想通りの展開ではあったものの、悠奈は鈍器で頭を打たれたような衝撃を受けた。

巧は、近づく二人に気付いたようで、一瞬固まった後、驚いたように立ち上がった。座ったままきょとんとしていた女の子に屈んで耳打ちし、慌てた様子で二人　がいる方向へと歩いて来る。

「どうした？　パーティ終わったのか？」

少し酔っているような巧の目は、焦点が定まらないように泳ぎながら、二人の間を行き交っていた。

「いや…。このコが男にからまれてたから。君に預けようと思ったんだけど…」

亜希は、言葉を切ると、腕組みをしてソファの彼女に視線を向けた。

「あ、彼女、高校の時の後輩。そう、後輩なんだ。久々に、こんなところで会って盛り上がってさ…」

巧は、更に目を泳がせて、普段より1オクターブ程高い声で言い訳をする。

その態度に、見え見えの嘘をついていることが分かった悠奈は、諦めの感情とともにため息をついた。

「そう…。後輩か…。君、このコの彼氏なんだよな？」

亜希は、巧に近付き、彼の顔を至近距離で斜から覗き込む。

「ねえ？ 彼氏なのよねえ？」

再びお姉言葉を復活させて微笑んだ彼だったが、声は低く押し殺されていた。

悠奈は、その声音の中に胸がざわつくものを感じ、亜希の顔を見上げた。

「え、そ…そうだけど…」

巧は、少し怯えた声を出して、逃げ腰になる。

「なら、なんでこのコの傍に居ない？」

「…え…あ」

言葉にならない声を出した巧を、亜希は、無言で見つめたまま立っていた。

その表情には、何の感情も浮かんでいなかった。ただ、瞬きもせずに視線を送り続けている。

悠奈は、突如、周りの空気が湿気を帯びたように重くなっているのを感じ、全身に絡まる理由の分からない不安に襲われた。

「なに？ 目眩が…」

彼女は、軽い目眩を起こして俯いた。頭がぐるぐる回ったまま治

まらず、その場に立っていることがやっとで、時間が経つ感覚すら分からなくなる。数秒経ったのか数分経ったのか、十分以上経ったのか…。霞みがかかった揺らぐ視界の中で、無理に頭を上げてみたが、近くにいる二人の姿すらぼやけて見えていた。

―…ジン、飲み過ぎた？

こめかみを指で押し、強く目を閉じて目眩がおさまるのを待つ。どれくらいの時間がたったのだろうか。

除々に目眩も治まり、意識がはつきりとしてきた悠奈は、耳に入ってきた亜希の声で正気に戻った。

「ま、好きにしろ。彼女は預かっとく」

淡々と話している亜希は、巧からゆっくりと数歩離れる。

巧は、無表情で何の言葉も発せず、抜け殻のように俯き加減で立っていた。

「ほら、行くわよ」

亜希は、悠奈の背に手を回して階段の方向へと軽く押した。

彼女は、歩きながら一度振り返ったが、巧は相変わらずその場で身動きせずに立ったままだった。巧のことが気になりながらも、亜希に促されるまま2階から階段を降りる。途中で、留美がさっきと同じ場所で待ち構えていることに気付いた。

「亜希…」

留美は倒れ込むように亜希の傍に来ると、彼の腕を両手で掴み、何も言わずに目を見開いて立っていた。表情は強張って、微かに身

体が震えている。

悠奈は、普通ではない彼女の状態に、何か良くないことが起こったことを感じ取った。

「VIPで待ってて」

亜希は、今にも倒れそうな留美の身体を支えながら、優しい微笑みを悠奈に向けた。

「あ…はい…。あの、大丈夫ですか？」

「大丈夫。あ、変な男に捕まらないように。それと、上でお姉言葉使ってなかったことは内緒ね。バレたらまた罰ゲームだから」

悪戯っぽく笑う彼に、悠奈はこくと頷くと、人混みの中をVIP席に向かって歩き出す。途中、亜希と留美の様子が気になり、階段を振り返ってみたが、そこにはもう二人の姿はなかった。

彼女がブースの横の階段を上がってVIP席に戻ると、ユキは同じ席から動かず、一人でぽつんと座っていた。

「あ、悠奈ちゃん！ どこ行ってたの？」

ユキは彼女に気付くと、少し不機嫌な顔をして、自分の隣の椅子を叩いて、そこに座るように示した。

「ごめんね、ちょっと気分悪くなっちゃって…」

「そうなの？ 大丈夫？」

悠奈の嘘の言い訳に、素直に彼女は反応した。

「ん、大丈夫。ごめんね。」

悠奈は、そう言いながらユキの隣に腰を下ろす。

嘘をつきたかった訳ではないが、今までのことを口に出して説明できるほど頭の中の整理がついていなかった。

「もう、聞いて。亜希さん、ずっといないのよ。話なんて全然できないうし。他の人は踊りに行ってほとんどいなくなっただし…」

十数名程いたVIP席には、悠奈たち以外に数人だけしか残っていなかった。

他の面子は、客が増えて盛り上がってきたフロアに流れているのだろう。悠奈がフロアを見下ろすと、すし詰め状態の人間が、大音量の元で照明の下にうごめいているのが見られた。

―なにが楽しいのだろう…。

上から見下ろしていると、やたらと客観的な気持ちになった。

一時間ほど、悠奈はユキと他愛ない会話をして過ごしていたが、腕時計を見て午前1時を過ぎていることに気付く。

「そろそろ帰ろっか？」

「そうね。亜希さんも戻ってこないし。あ、巧くんは？」

「…さあ」

悠奈は、答えにくそうに苦笑いする。

巧には、悠奈がVIP席にいることは分かっていたはずだが、全

く姿を現さなかった。

「彼、飲んでるから、タクシーで帰ろ」

彼女は、ソファから立ち上がると、ユキの手を引っ張って立たせる。

ユキは、悠奈の反応で何かを察したのか、それ以上、巧のことを聞こうとはしなかった。

二人が、ブースの横の階段を降りようとした時、下から跳ねるように駆け上がってくる男がいた。

「や。間にあってよかった。送ってくよ」

そう言って、整った顔に可愛いらしい笑顔を見せたのは、宏樹と呼ばれていた金髪の彼だった。悠奈とユキは、何のことか分からず、お互いに目を合わせる。

「亜希に頼まれたんだ。送ってあげてって」

「え、亜希さんはどこにいるの？」

ユキは、彼に、すぐるような瞳を向けた。

「今帰ったよ。留美が体調悪くてね。送っていった。だから、俺が二人を送るように頼まれたんだ」

宏樹は、二人の間を割って入ると、両手に悠奈とユキの手をつないで、じゃ、行こうかと、にっこり笑った。

その笑顔は、悪びれていない子供のように純粹だった。

【4】トラップー1

「宏樹さん、送ってくれてありがとう」

ユキは、後部座席からフロントミラーに映った宏樹にペコッと頭を下げ、ドアを開けて外に出る。車の助手席に残っていた悠奈に、窓越しに手を振ると、自分のマンションに入って行った。

宏樹は、ユキが視界から消えると車を発進させ、

「狭くない？ さっきから窮屈そうだから。気楽にしてくれたらいいよ」

と、にっこり笑った。

悠奈は、彼の言葉で自分が必要以上に気を張っていることに気付く。

宏樹は、一見、モデルのように近寄りがたい雰囲気を持っていたが、話してみると、ごく普通の人なつこい人間だった。

「宏樹さんて、亜希さんとか留美さんとかと仲良しなの？」

悠奈は、沈黙を避けるように話を切り出した。

出会って間もない人と、車内に二人きりという状況への不安が、彼女をいつもより饒舌にさせた。そんな悠奈の気持ちに気付いたのか、宏樹は、小さくくすつと笑って答えた。

「ああ、仲良しだよ。亜希とはもう高校からのつきあいだからね。留美とは2年程かな。あの二人は従兄なんだ。」

「従兄？」

「ああ、亜希のお母さんのお姉さんの娘が留美」

「そうなんだ…」

悠奈は、二人が遠い親戚と聞いて、妙に納得がいった。

友達でも恋人でもない、でも何か繋がっているような二人の距離感。

「亜希の両親は五年以上別居してるみたいだけどな。母親が出ていたらしくて。あ、亜希のお母さんの父親ってのはイギリス人なんだ。だから、ヤツはクォーターになるのかな…。」

「え、そうなの？ だから透き通るような瞳なのね…」

亜希の瞳の、日本人離れした美しいオリーブ色を思い出す。彼の秀でた魅力は、血が混ざっていることから作られているのかもしれない。

「仲良しかあ…。俺は、亜希のこと長いつきあいだし友達とってるけど、亜希はどう思ってるんだろうな」

「何かが違う感じ？」

「ふと、ね。心許してない時があるような…。ま、あそこのメンバーの中にいると、みんなあっさりしたもんだから、気にならなくなってくるけどね」

そう言って笑った宏樹の横顔は、少し淋し気に見える。彼の声の

トーンや話し方は、実に内面の感情をよく表していた。喜怒哀楽が、すぐに外に出てしまうのだ。

「でも、誕生日パーティーまでしてお祝いしてるってことは、みんな仲いいんでしょ？」

「いや、お祭り好きなやつらだから…。目立つ格好して、他とは違うんだって自己主張するけど物足りなくて、現実逃避に飲んで騒いでドラッグして…。寂しいやつらかもね…。結局、今日だって、心から亜希におめでとうって思ってたのは数人しかないんじゃないかな」

宏樹の言葉からは、自分もメンバーの一員だということに、ジレンマを感じていることが窺えた。

悠奈は、そんな彼の言葉を意外な気持ちで聞いていた。クラブにいた亜希の周りのメンバーは、個性が強くて大胆で、どう見ても一般人には見えなかった。一人一人が自信に満ちあふれて輝いているように見えたが、それは虚勢ということだろうか。飾った人間同士の心の通わない集団。彼女は、空虚なものを感じる。

「けど、ちょっと安心したかな。亜希にも、君みたいな、まともな友達がいるんだと思うと、ほっとするよ」

彼は、悠奈をちらっと見ると、にこっと笑う。

「…亜希さんは、宏樹さんに心開いてると思うな…。宏樹さん、すごくい人だもん」

悠奈は、心からそう思った。

宏樹は素直で正直で、自分を隠すことがない。そういう人間を前

にして、誰だって心に構えをつくる必要はないだろう。

「ありがとう」

宏樹は、嬉しそうに少年のような笑顔を浮かべていた。

悠奈は、マンシヨンの近くの国道で、宏樹に車から降ろしてもらって彼の車を見送った。

国道から細い道に入ると、クラブでの巧のことを思い出しながら歩いていった。かなり酔っていた様子の彼だったが、付き合っている彼女がいるスペースで、他の女と抱き合える心境が分らない。だからと言って、裏切られた悔しさはあったものの、嫉妬心は全く感じなかった。すっかり、母親化してまっている自分に気付かされていた。

メールくらいは送ってきているかもしれないと、鞆の中から携帯電話を取り出して開く。そこには、着信があったことが表示されていたが、巧からではなく、意外にも自分の家の電話の番号からだった。彼女は、留守録のない家からの着信に、胸騒ぎを感じて足をはやめた。

数分ほど歩いて、更に細い道を右に曲がると、百メートルほど先にマンシヨンがある。そのマンシヨンの2階に彼女は住んでいた。

「え…」

悠奈は、声を漏らして一瞬足を止めた。

自分のマンシヨンの前に、赤い光りが回っている。目を懲らすと、それは警察のパトロールカーだと分かり、更に嫌な予感が増した彼女は、小走りでマンシヨンまで向かっていた。

エントランスに入ると、自分の部屋がある二階に階段を駆け上がった。廊下にマンシヨンの住人が四、五人、不安そうな表情で話を

しながら立っているのが見える。

悠奈はその中に、隣の部屋の水戸という年配の女性がいるのを見つけた。

「何かあったんですか？」

早足に住人達に近付くと、胸騒ぎを抑えて水戸に声をかけた。

「悠奈ちゃん！」

水戸は彼女を見た途端、目を丸くして、大きな声をあげる。

「あんたの部屋、大変なのよ！」

水戸は、いきなり悠奈の右腕を両手で掴むと、住人たちの間を抜けて、二階の一番奥にあった彼女の部屋に急かせるように歩いた。

悠奈は、自分の部屋のドアが開けられたままで、前に警察官が一人立っているのが見えると、頭から血の気が引いていくのが分かった。

「恩田さん、悠奈ちゃん、帰ってきたよ！」

玄関から部屋の中に向かって、水戸は大声で叫ぶ。

悠奈は、頭が混乱しながらも、自分の部屋で警察が来る事件が起こったことだけは理解していた。

玄関のすぐ向こうのキッチンから、彼女の母がパジャマ姿で真っ青な顔をして出てきた。

「悠奈……」

母は彼女を見ると、少しほっとしたように表情を和らげる。

悠奈は、急いでブーツを脱いで玄関に上がり、真っ青な母を支えるように腰に手を回した。

「お母さん、何があったの？」

できるだけ、気持ちを落ち着かせて尋ねる。

「火炎瓶が…」

「…え？」

母は足がかすかに震えていた。

「火炎瓶がベランダから投げ込まれたの…」

【4】トラップー2

母はその場で、その日に起こった事件の説明を淡々と言葉にした。部屋に火炎瓶が投げ入れられたのは、今日の午前一時頃だったらしい。

寝室で寝ていた母は、枕元に置いていた電話の子機の呼び出し音で目を覚ます。電話に出ると、受話器からは雑音だけが聞こえ、数秒後に途切れてしまった。その後、すぐにリビングの方向からガラスの割れる大きな音がし、驚いた彼女は持っていた子機で110番を押して、あらゆる部屋の電気を付けながら、恐る恐るリビングに足を運んだ。そこには人の気配はなかったが、ベランダから割られたガラスが飛び散り、その前のソファの上に小さな炎を出している瓶のようなものが転がっていた。

火炎瓶の中のガソリンがほんのわずかであったため、火はすぐに消すことができ、大事にはならずすんだということだった。

刑事は、殺傷能力のない火炎瓶であったことから、犯人は殺人なぞが目的ではなく、嫌がらせか脅しのつもりで投げ入れたのだろうと言ったが、悠奈も母も、恨まれるような覚えが全くなかった。

念のため、二人は水戸の部屋に一日だけ泊めてもらうことにした。水戸は、夫と高校生の息子の三人暮らしで、“女二人で物騒な部屋にいるより、男の気配があるだけでもウチのほうが安心でしょ”と、自分達の部屋に泊まることを進めてくれたのだ。

「大したことなくなくて良かった…」

悠奈は、隣の布団で横になっていた母に呟く。

「…きつと、刑事さんが言うように、脅かすくらいのもりで誰かがしたことなんだろうけど…。電話は火炎瓶を投げ入れた犯人から

のものだったと思うの。どちらにしても、うちが狙われていたってことは確かだわね…」

母の声は小さく、不安気だった。

「お母さん、大丈夫よ。とりあえず、睡眠とらないとね。今日のことは、少し忘れて寝なくちゃ。」

悠奈は、わざと明るい声を出した。

「そうね。おやすみ…」

消え入るような母の声を聞いた後、静かになった空間で一人になった意識を感じた悠奈は、不安が身体全体にいきわたるように染み出してきた。

―誰かに狙われている…。自分だけが狙われているならまだましだ。母が狙われているとしたら…。

彼女は、ついマイナス思考に走ってしまいう気持ちに、“しつかりしろ”と喝を入れると、布団を頭から被ってきつく目を閉じた。

その日から数日間、悠奈は大学もバイトも休んでいた。

母のダメージが想像以上に大きく、わずかな音にでもびくびくするようになり、一人になることに極度に怯えるようになったからだ。当分は、警察官がマンションの周りをパトロールをしてくれるということだったが、それでも不安は消えないようだった。

悠奈も母も、今回の出来事の原因をあらゆる方向から考えてみたが、どうしても火炎瓶を投げ込まれる理由が思い当たらない。

ベランダのガラスは、マンションの共用部分に置いてあったコン

クリート煉瓦で割られていたようだ。部屋は二階だったが、一階は駐車場になっていて人目につかず、犯行を行いやすい環境ではあった。

キッチンで昼食の後片付けをしていた悠奈がダイニングテーブルに目を向けると、椅子に座っていた母が、目の前の湯のみを覇気なく見つめていた。悠奈は、カップにインスタントコーヒーを入れながら、彼女にそっと声をかける。

「お母さん、わたし、明日から学校に行くけど、少しの間、瑞江おばさんのところで世話にならない？」

熱いお湯を注いだカップを、母の前の湯のみと差し換えた。

「…それもそうね。お姉さんの家なら一人暮らしだし気兼ねしないものね…」

「ん、しばらく落ち着くまで、おばさんの家に行こうよ。あまり長くお邪魔するのは良くないけど、少しの間なら、おばさんも暇つぶしになるんじゃない？」

悠奈が笑顔で励ますように言うと、見るからに頬がこけて青い顔をした母の顔が、一瞬だけ柔らかくほころぶ。

「ね。決まり。すぐ用意しよ。お母さん、おばさんに電話して。今から行こう」

彼女は、明るい声で母を急かすと、鼻歌まじりにキッチンから出て、荷物をまとめるために自分の部屋に向かった。

部屋に入ると、気が抜けたように力なくぺたんと座り込んで、小さくため息をつく。

瑞江は悠奈の母の姉で、一人で一軒家に住んでいた。夫に先立たれ、子供は既に自立している。事情を話せば、しばらくの間は泊めてくれるだろう。だが、ゆくゆくは、またこのマンションに戻ってこなくてはいけない。犯人が捕まれば、気持ちも落ち着くに違いないが、状況が変わらない限り不安から逃れることはできないだろう。沈んでいく気持ちに気合いを入れなおそうと、頭を思いきり振り、クローゼットから洋服や下着を出して鞆に詰めはじめた。荷物を詰め終わって、ベッドの上に無造作に置いていた携帯電話を手にとると部屋から出る。何気なく携帯を開くと、ユキからのメールが送られてきていた。

【明日、バイトに出るんだよね？ いろいろ大変な時だろうけど、少しバイトの前にお茶しない？ 時間作れるようなら、四時に、この前の買物帰りに寄ったカフェに来てください】

悠奈は、マンションの部屋に火炎瓶が投げ込まれたことを、ユキをはじめ、日頃から関わりを持つ人達には全て伝えていた。すぐに伝えるべきか悩みはしたが、後から知れ渡って、あることないことを言われるより、ありのままを説明しておいた方がいいと考えたからだった。

ただ、巧には、あの日以来連絡をしていない。彼からも連絡は一度もなかった。

ユキに、了解と短くメールの返信をする。

—また、亜希さんのことがどうのこうのって話かな…

苦笑いしながら携帯を鞆に入れた。

【4】トラップー3

次の日、悠奈は大学の講議を終え、ユキと待ち合わせていたカフェに向かった。

叔母の家は、悠奈のマンションよりも便利な場所にあり、バイト先の最寄駅には電車で十分ほどの距離だった。

四時少し前にショッピングセンター内のカフェに着くと、めずらしくユキが先に来て待っていた。前回座っていた場所と同じ席に座って、頬杖についてアイスコーヒーのストローをいじっている。

悠奈は、カウンターでオレンジジュースを注文すると、急いで席に向かった。

「ユキちゃん、待った？」

声をかけると、彼女は身体をびくっとさせて顔を上げた。

「あ、悠奈ちゃん、ううん、待ってないよ」

少し元気がなさそうに笑う。

悠奈は、そのユキの表情に、あまり喜ばしい話ではないことを悟った。

「どうしたの？ 何か話したいことがあるの？」

前の席に座り、ストローをオレンジジュースのグラスに入れ、平静を装いながら聞く。

「…そう。伝えなきゃいけないことが二つあって。とりあえず、一つは、巧くんのこと」

「…巧？」

ユキから彼の名前が出ると思いもしなかった悠奈は、一瞬顔色を変える。

マンシヨンの件でナイーブになっている気持ちを、更に波立たせることはしたくないと思っていた。けれど、逃げてばかりいても現実はいつか受け止めなければならない。彼女は覚悟を決めると、ユキの言葉を待った。

「巧くんからメールが来てね。悠奈ちゃんに伝えてほしいって…」

「メール？」

「うん。…今は、何も言えないし、会うこともできないから、悠奈ちゃんも連絡してこないでほしいって。でも、いつか、ちゃんと話すって…」

ユキは、悠奈の顔色を見ながら、言いにくそうに話した。

「…そう。分かった」

悠奈は、ため息混じりに声を出す。

―連絡してほしくないってことか…。もう終わりってことね…。

彼女は、巧から別れを告げられたことを確信していた。

「…こんなこと、なんで、わたしにメールしてくるんだろ…。自分で伝えればいいのにね」

「ごめんね、ユキちゃんに余計な気をつかせちゃった」

「ううん、悠奈ちゃんが悪いんじゃないよ。巧くん、いきなりバイトも辞めたらしくて。悠奈ちゃんに会うのが気まずいのかな…なんだか、男らしくないよ」

ユキは、俯き加減に微かに瞳を潤ませている。

「…ありがと、でも、わたしなら大丈夫だから」

悠奈は、自分のことを思ってくれているユキの気持ちに胸が暖かくなり、自然と表情が和らいだ。

巧とは、別れることになるかもしれないと薄々感じていたせいか、寂しさはあったが悲しいという感情はなかった。どこかで、母親役から解放されたような、肩の荷が降りたような感覚すら感じる。

「悠奈ちゃん、ホントに大丈夫なの？」

「ん、大丈夫」

微笑んで答えた悠奈の、いつも通りの平静さを感じ取ったユキは、見るからに安堵の表情を浮かべてアイスコーヒーを一口飲んだ。

「それでね、もう一つのことなんだけどね」

ユキは、さっきまでの表情とはうってかわって、満面の笑顔になった。

「あ、話、二つあったんだよね」

「そう。あのね、悠奈ちゃんがいろいろ大変なこと、話しちゃったのね。亜希さんに」

その名前を聞いた途端、悠奈は全身に電気が走る。

「…え？ わたしのこと…？」

「うん、おうちに火炎瓶が投げ込まれたこと」

にこにこつとユキは笑った。

「は？ え？ わたしのこと知らない人に、なんで？」

悠奈は目を丸くする。

亜希に、ユキと友達だということは知られていないはずだった。ともすると、あの非現実的空間のクラブで、“ナンパされていた厄介な女を彼氏の居場所に連れていった”ことすら覚えているかさえ怪しかった。

「知ってるよ。写メ送ったもん」

「…は、いつ？」

「いつって、わたしが亜希さんに最初に送った写メに、悠奈ちゃんも映ってたよ」

ユキは、鞆から携帯を出すと、亜希に送った写メを探し出して悠奈に見せた。

「ほら。これ。友達の悠奈ちゃんと、その彼氏の巧くんですって伝えてたもん」

そこには、数カ月前にバイト先の歓迎会で撮った、二人がほろ酔い顔で並んでいる画像があった。その後ろには巧の姿も写っている。

「なんだ…。知ってたんだ…」

悠奈は、亜希が食堂で自分に視線を向けたことや、クラブで助けてくれたことは、ユキの友達だと知っていたからだだったのだと今更ながらに気付いた。

「で、ね、悠奈ちゃん。今、そのマンションに帰っても落ち着かないでしょ？ だから、亜希さんが、うちのマンションにおいでって」

悠奈は、ユキの話の内容が理解できず、少し眉間に皺を寄せて首を傾げる。

その様子を見たユキは、言葉を付け加えた。

「だからあ、亜希さんの住んでるマンションって、亜希さんのお父さんのものなんだって。ちょうど、海外出張してる人たちの部屋があって、誰か住んでくれる人を探してたらしいの。身一つですぐ住めるから、しばらくの間住めばいいって」

「…は？ あ？」

にこにこ笑っているユキの顔を見つめ、悠奈は、口を開けて固まっていた。

ユキは今日、必ず亜希の話をするだろうとは思っていたが、こういう展開になることは全く予想だにしていなかった。

「あ、亜希さん家、駅から徒歩十分のところらしいから、めちゃ便利だよ。環境も悪くないって」

「…ってか、ユキちゃん、その話、本当なの？ 亜希さんも、ちょっと言ってみただけとかじゃないの？ そんなに軽々しい話じゃないんじゃないかな…」

悠奈は、苦笑いしながら、オレンジジュースのストローに口をつけた。

「ううん、本当よ。だって、今日、簡単な間取図持ってくるらしいもん」

「間取図？」

「うん、その部屋の。今日椿屋に持っていくって言ってたから。亜希さんに会えるんだ」

ユキは、嬉しさを隠しきれないかのように、顔を紅潮させてとろけるように笑った。

悠奈は、呆然と彼女の笑顔をみつめながら、亜希の姿を思い出していた。つかみどころのない、違う世界にいるような存在。それなのに、確実に自分の心を占めていく。彼女は、居心地のいい、けれど不安が渦巻く蜘蛛の巣に捕まってしまったような複雑な心境だった。

【4】トラップー4

「悠奈ちゃん、亜希さん来たっ」

厨房の洗い場で、洗浄機から食器を取り出していた悠奈の後ろから、バタバタとせわしない足音とともに、ユキの少し緊張した声が飛んでくる。

「え、ほんとに来たんだ…」

悠奈は、ユキを振り返りながら、動揺を隠すように低い声で呟いた。

「ほんとにつて、あたりまえでしょ。嘘だと思ったの？ 亜希さん、カウンターに案内したから、悠奈ちゃんもすぐに来て」

ユキは、地団駄を踏みながら声を荒げて言うと、踵を返して厨房から出ていった。

悠奈は、自分の耳でも聞こえる程の心音に戸惑いながら、深く深呼吸すると、出ていったユキの後を追う。彼と会う時は、いつも脈拍が上がり奇妙な緊張感が走った。クラブでのお礼も言わなくちゃいけないのだろうかとか色々考えを巡らせながら、手の平が汗ばんでいくのを感じていた。

椿屋に彼等二人が現われたのは、オーダーストップ間際の十一時三十分頃だった。店員からも客からも注目を集めながらカウンターに通された二人は、ロックTの上にフードジャケットをはおり、黒のワークパンツをはいた亜希と、タイトな黒いシャツに濃いブーツカットデニムをはいた宏樹だった。

特別に目立つ格好をしている二人ではないが、人を引き付けるに

は充分な二人二様の魅力を放っている。

「悠奈ちゃん！」

カウンターの端の席から、彼女を見つけて手をあげて叫ぶ金髪の頭が見える。

「あ、宏樹さん……」

笑顔いっぱい大きく手を振っている宏樹の行動は、そのクールな容貌からはギャップがあったが、彼らしいあどけなさに思わず顔が綻ぶ。宏樹の隣の席には亜希の姿があり、その後ろに膝をついて座っていたユキが、オーダーをとる格好をしながら嬉しそうに話をしていた。

悠奈は、急いで三人がいる席に小走りに向かった。

「こんばんは、宏樹さん、この前は送ってもらってありがとう」

宏樹の隣に膝をついた彼女は、周りの視線を気にしつつ小声でお礼を言った。

「全然だよ。それより、あの後大変だったらしいね。大丈夫？」

「あ、うん、大丈夫……」

「ま、当分、物騒だから亜希ん家に居座ればいいよ。気兼ねしなくていいから」

彼は、そう言って、亜希を振り返った。

ユキと話していた亜希は、ふっと悠奈に目を向けて静かに微笑う。

ただ座っているだけでも、そこには彼の独特の空間というものが出来上がっていた。悠奈は亜希と目が合ったことを感じると、大きく高鳴る鼓動を抑えながら、小さく会釈した。

「で、亜希さん、間取図は？」

ユキが後ろから甘い声で話しかけた。

「車の中。帰りに渡すよ」

「帰り？」

「せっかくだから、二人とも送ってく」

「え、ほんと？ バイト終わるまで待っててくれるの？ やったあ
っ」

ユキは、座ったまま、跳ねるように喜ぶ。

「悠奈ちゃん、今日の仕事、はやく終わらせようね」

幸せいっぱいという表情の彼女に笑顔を返した悠奈は、怪訝そうに視線を向けてきている店長に気付き、慌てて立ち上がって厨房に向かった。

— どうしてこんなに胸が…？ 彼の瞳…？

裏口から通路に出て、ひんやりした壁に凭れて深く深呼吸する。
亜希の近くにいると、緊張が高まって呼吸が浅くなる。彼のことを、異常に意識していることに気付いていた。

悠奈とユキが一時頃にバイトの片付けを終え店を出ると、すぐ前に宏樹が立っていた。

「おつかれ。向こうで亜希が車で待ってるから」

宏樹は、大きな通りの方向を指さしながら、先に歩き出した。店の前は道がせまく、車を止めるようなスペースはない。通りに出ると、宏樹はすぐ近くの路肩に泊めてある車まで歩き、後ろの席のドアを開けて振り返る。

「遠慮なく乗って」

二人に声をかけ、自分は助手席に乗り込んだ。車の真後ろにいた二人は、目を見合わせる。

「この車って…？」

ユキは、小声で悠奈に呟いた。

「うん…、このマークはベンツとかいうあれ？」

悠奈は、磨きあげられていた車を見回して呆然とする。

「二人とも、なにしてんの？ 乗りなよ。まあ、俺の車じゃなく亜希の親父のだけどさ…」

車の外で立ち尽くしていた二人に、宏樹が車の助手席から振り返って話しかけた。

その声に促され、ユキが車の後部座席に乗り込み、悠奈が後に続いてドアを閉める。

「お疲れ。これ渡しとく」

亜希が、運転席から後ろ手に二つ折りにされた紙を後部座席に差し出した。ユキは、その紙をすかさず受け取って悠奈に渡す。

その紙には、部屋の間取図が書かれていた。悠奈は、暗くてよく分からない図面を目にしながら、今断っておかないと引っ込みがつかなくなると思い、声をあげた。

【4】トラップー5

「あの…、すごく気持ちは嬉しいんだけど、わたし…」

「気をつかわなくていいから」

亜希は、前を向いたまま一言だけ口にとすると、エンジンをかけて車を発進させた。

宏樹が助手席から身体を後ろに向け、亜希の言葉に補填するように話し出す。

「マジ、気をつかうことないよ。俺も、亜希のマンションに住みついてるんだ。しかもタダで。部屋は全室南向きだし、駐車場ありだし、亜希ん家の高級車は使い放題だし、ラッキーくらいに思っておけばいいって」

その彼の言葉に、ユキが驚いて反応した。

「え、宏樹さんもタダで住ませてもらってるの？」

「そう。俺の時もタイミングよく部屋が空いた時だったから。だから、悠奈ちゃんも、軽い気持ちで居候するつもりで来ればいいんだって」

「…悠奈ちゃん、やっぱり住ませてもらいなよ。わたしだって部屋が空いてたら住みたいくらいなのに…」

ユキは悠奈の顔を見て、少し悔しそうに唇をかみしめて呟いた。

「…ん、でもそんなに簡単には…」

困ったような表情をしていた彼女に、宏樹は不思議そうに首を傾げる。

「深く考えなくていいじゃん。どうして迷うかな？」

「…見ず知らずの人にお世話になるってことでしょ。わたしだけじゃなくて母親もいるから」

「でも、そのマンションに住み続けるのは物騒だろ？ お母さんが一緒なら、余計に心配じゃない？ あそこは防犯は最先端だし間違いないく安心できると思うよ」

宏樹のいたわるような声に、悠奈は気持ちが緩み、少し肩の力が抜ける。

「そう思わないか？ 亜希」

宏樹は、前に向きなおって、運転席の亜希に声をかけた。
信号待ちで車を止めた亜希は、一呼吸程の間を置いて口を開いた。

「悠奈」

彼は、宏樹の質問には答えず、悠奈の名前を呼ぶ。
突然、彼に自分の名前をはじめて呼ばれた悠奈は、胸が一気に熱くなったのを感じた。

「はい…」

「マンションまでの道を教えてくれないか？」

彼はシートに凭れて、バックミラー越しに彼女に聞いた。

「え…あの…」

彼女は言葉を詰まらせた。

ここで、叔母の家に泊めてもらっていることを言ってしまうと、亜希のマンションへの誘いを断りづらくなりそうだったからだ。

「あ、そういえば、悠奈ちゃんて、今、お母さんと叔母さん家に泊めてもらってるんだったよね？」

ユキは、悠奈の気持ちも知らずに、横から口を挟んだ。

「え？ そうなんだ？」

再び宏樹が後ろを振り返った。

「やっぱり、そのマンションに住み続けるのは怖いもんなあ…。叔母さん家に住み続けることも出来ないだろ？ 何も考えなくていいから、おいでって」

案の定、彼は、さっきより強引に亜希のマンションに住むことを勧めてくる。

「ん…ありがとう…少し、お母さんとも相談してみる」

「絶対、安心だから」

悠奈は、宏樹の笑顔に押されるように、前向きともとれる返事を返してしまった。

彼の言葉には裏がなく、本気で心配してくれていることは充分伝わってくる。ただ、これ以上、亜希と関わることにためらいを感じた。彼に近付くたび、熱くなる胸の奥で、理由の分からない警鐘が鳴っているような気がしていたのだ。

ユキのマンションまで車を走らせた亜希は、“いやゝ、まだ帰りたくない”と、駄々をこねる彼女をなだめて降ろした後、悠奈に叔母の家までの道順を聞きながら運転していた。

「この辺りって、高級住宅街だね。大きい家多いもんなあ…」

宏樹は、車が住宅街に入ったことに気付き、目を懲らしながら外を眺めていた。

車は、やっと通れる程の細い道をくねくねと曲がって、一件の家の前に止まる。叔母の家は、まだ築年数が浅く、七十坪程の木造の平家だった。

車から降りた亜希は、さりげなく後部座席のドアを開けてから、煙草を取り出し火をつける。

そのドアから降りた悠奈は、

「遅い時間に送ってもらって、すみませんでした」

と、車に凭れて煙草を吸っていた亜希にペコッと頭を下げた。

「悠奈」

立ち去ろうとした彼女だったが、彼の声に足を止める。

「何の心配もないから」

振り返った彼女の頭に、彼は優しく手を乗せると、軽く首を傾げて悠奈を見つめた。

優しく穏やかな声と、漂う独特なオリエンタルの香り。予期せず間近に亜希を感じた彼女は、その体温に甘えてしまいたい衝動に駆られた。月明かりの下の亜希の表情は妖しく美しい。深い瞳に引き込まれてしまいそうな感覚に落ちた。

「すぐ、来なさい」

その声が悠奈の身体に響き渡る。彼の言葉に、彼女の気持ちは大きく揺らいだ。

「…うん、ありがとう」

悠奈は、俯いてそれだけ言うと、逃げ出すようにその場から離れて叔母の家に駆け込んだ。

— 苦しい…。

胸が今にも身体の外に突き出てきそうな勢いで波打つ。

しばらく落ち着くまで玄関で座っていた彼女は、足音を潜めて、玄関のすぐ横の八帖程の和室に入った。

電気を付けると、部屋の真ん中に布団が敷かれてあることに気付く。

— 叔母さん、布団を敷いてくれてたんだ…

彼女は叔母の気遣いに感謝しながら、敷かれた布団の横に腰を降

ろした。

亜希から渡されたB5サイズの二つに折られた紙を広げると、4LDKの部屋の間取図があった。間取図の下に、走り書きで、《家具も空調も防犯も完璧だから、すぐにでも住むように》と書かれた文字を見て、悠奈は自分の中で何かが溶け出していることに気付く。普段の亜希は、まるで別の世界を生きているようなイメージだったが、その、少しカクカクとした癖のある字が人間味を感じさせ親近感を沸かせた。

—このまま、彼のマンションに住んでもいいのかな…。深く考えなくていいのかも。

悠奈は、俯いた姿勢で間取図に目を向けたまま考え込む。

次に亜希に会って、“おいで”と言われれば、きつとすぐにでもマンションに行ってしまうだろう。彼の言葉には、相手を引っぱり込んで従わせてしまう魔力のようなものがある。何一つ、特別なこととは言っていないのに、どうしても抗えない魅惑的とも思える威圧感があった。

—明日、お母さんに話してみよう：

彼女は決心すると、手に持っていた紙を丁寧に四つに折り畳み、鞆の中に入れる。

無意識の層でざわつく胸騒ぎを感じながらも、誤魔化すように頭の中を空にした。

【5】蜘蛛の巣―1

その日は梅雨明けを感じさせるような晴天だった。

悠奈と母は、真新しい6階建のマンションのエントランスホールにいた。その吹き抜けの空間は明るく清潔で、まだ新しい建物の香りがする。二人は、設置されていたソファの端に、所在無げに座って宏樹を待っていた。

「すごく広いわね…」

そわそわした様子で呟いて、床の御影石や天井の高さを見回している母に、悠奈は苦笑いを向けた。

「こんなマンション、本当に家賃を払わずに住んでいいのかしら…」

母は壁に飾られた絵画を見て、ため息まじりに呟いた。

この高級マンションに住むことに、悠奈はまだ半信半疑でいる。

母は、元居たマンションの部屋に戻ることが不安で仕方がなかったのか、亜希からのマンションを貸してくれるという申し出を伝えるやいなや、二つ返事で了解した。

亜希の電話番号さえ知らなかった悠奈は、ユキを間に入れて、彼と引越しの相談を進めていた。当人との接触は全くなしに事が運んでいるだけに、現実感が湧かず、ふと、全てが大掛かりな冗談かもしれないとさえ思うこともあった。

部屋には家具も揃っているということだったので、大きな荷物は持たず、必要最低限なものだけ簡単に荷造りを済ませ、後から引越し業者に届けてもらうようにした。

落ち着かない悠奈が、立ったり座ったりしていると、ホールの奥から自動ドアの開く音と共に、バタバタという足音が聞こえる。

「悠奈ちゃん。いらっしゃい」

人なつこい笑顔で走ってきたのは、ダークブルーの繋ぎを着た宏樹だった。

「あ、宏樹さん。よろしくお願いします」

悠奈は、彼に頭を下げると、隣にいた母の背中に手を置いて、

「母です」

と紹介する。

「お母さん？ 石谷宏樹といいます。このマンションの持ち主の知り合いで、僕もここに住んでるんです。分からないことあったら、僕に何でも聞いてくださいね」

宏樹は笑顔で話すと、まずは部屋に案内すると言って、二人をホールからエレベーターに案内し、5階まで昇った。

「501号室だから、端部屋で、住みやすいと思うよ」

彼は、先に立って廊下を奥に進んでいく。

一番端の部屋に着くと、小さな鉄の門から中に入りドアの鍵を開けて、二人を中に入るように促した。悠奈は、母の背中を押しながら玄関から中に入る。

「めちゃきれい…」

彼女は、思わず呟いた。

広い玄関は大理石が敷かれている。靴を脱いで中に入ると、突き当たりが廊下で、右に曲がると広い洋室が3部屋あり、左に曲がるとキッチンとリビングダイニングと和室があった。どの部屋もきちんと片付けられ、高価そうな家具が揃えられていた。

「宏樹さん、ほんとにこの部屋使っているの？」

「気にしないでいいって。部屋は使わないほうが傷むだろ？ 留守番してあげてるって思っているから」

宏樹は、自分の部屋のように、ずんずんとキッチンまで歩いて冷蔵庫を開けると、ペットボトルのお茶を取り出して二人に渡した。母は、綺麗な部屋に機嫌を良くしたようで、お茶を持ったまま、軽い足取りで和室を覗いたりリビングからベランダに出たりしている。

「冷蔵庫の中、必要だろうと思うものは亜希が揃えてあるみたい。好きなように使って」

「ありがとう…。で、今日は亜希さんは？ 挨拶したいんだけど」

「亜希は、出かけてるよ。たぶん夕方には帰るんじゃないかな。亜希の部屋は601で、ちょうどこの上だから、また後で顔出してやってよ。でも、あんまり気を遣うとうっとうしがる奴だから、手みやげとかは持っていないように。あ、ちなみに俺の部屋は303ね」

彼はそう言いながら、キッチンのコンロに火を付けてみたり、引き出しや棚の中を開けて中をチェックしたりしている。

「キッチンもすぐ使えるし、大丈夫かな。あ、それと…」

繋ぎのポケットを探ると、1枚のメモを出した。

「亜希と、俺の電話番号とアドレス。何かあったら、どっちでもいいから連絡して」

にっこり笑って悠奈に差し出す。

彼女は、頷いてメモを受け取ると、除々に亜希との距離が近付いていることを感じる。

その後、宏樹は浴室の使い方や、ゴミの日などの説明をして、自分の部屋に戻っていった。

早速、部屋の掃除をはじめていた母は、マンションの二十四時間体制でのセキュリティシステムに安心したようで、疲れていた表情に明るさが戻ったように見えた。

悠奈は、ベッド付きの洋間の1部屋を自分の部屋として使うことにして、引っ越し業者から届いた自分の荷物を片付けていた。

―わたしは恵まれているんだろうか…

今、このマンションに家賃なしで住めること事体、ふわふわした非現実なことのように思えたが、亜希や宏樹にとっては何ら普通なことなようだ。その感覚の差に、大きなギャップを感じていた。

―お金持ちと貧乏人の感覚の差かな…

彼女は、自分はどうしてもお金持ち感覚にはなれないと確信し、心の中で苦笑いした。

片付けが一段落して腕時計を見ると、午後五時三十分を過ぎてい

る。部屋から出てキッチンに入ると、母が夕飯の用意をはじめていた。

【5】蜘蛛の巣―2

「お母さん、堂藤さんのところに挨拶に行ってくるね」

「あ、じゃあ、お母さんも一緒に行くわ」

広いキッチンで、機嫌よく米を研いでいた母は、慌てて濡れた手をタオルで拭いた。

「いいわ。わたし一人で行く。気を遣われるのが嫌いみたいだから、仰々しくならない方がいいと思うし。軽く挨拶してくるわ」

悠奈は母に笑ってそう言うと、パタパタと足早に玄関まで急ぐ。外に出てから、高鳴りはじめていた胸の鼓動を誤魔化すように、小走りにマンションの端にある階段で6階に上がった。

6階には、601号室から604号室の4部屋しかない。奥の601号室の前に行くと、鉄の門も玄関も5階と同じ造りだったが、部屋の広さは倍以上はあるだろうと思われた。

彼女は、緊張で強張った指で玄関のインターフォンを鳴らすと、呼吸を整えるように小さく深呼吸をする。

―今日からよろしくお願いしますって、それだけ言えばいいんだから

自分に言い聞かせるように呟いていた。

しばらく経っても応答はなく、もう一度インターフォンを押そうとした時、目の前の玄関のドアがゆっくり開いた。

中から微かにシャンプーの香りが漂い、大きな瞳が悠奈を捕らえる。

「…あら…悠奈ちゃん？」

ドアを開けて、少し驚いた表情で口許に笑みを浮かべて立っていたのは留美だった。

悠奈は一瞬、息を呑む。

留美は胸の開いた、ミニのバスローブ姿でドアに寄り掛かって立っていた。たった今までシャワーを使っていたようで、素顔の彼女の頬はピンク色に染まっている。いつもより表情が幼く見えたが、真っ黒な濡れた髪が、艶っぽい色気を醸し出していた。

「あ、ごめんなさい…今日、こちらに引っ越してきたんで、挨拶だけさせてもらおうと思ったんですけど…」

こういう状況で、どう対応していいか分からなかった悠奈は、戸惑いながら視線を落として一步後ずさった。

「どうぞ。亜希ならリビングにいますわ」

留美は、髪をかきあげて、ドアを大きく開ける。少し前屈みになった彼女の胸元がはだけて、同性でありながらも悠奈は目を逸らせた。

留美は、そんな彼女を見つめ、何かを思い出したように一呼吸置くと、

「あ、もしかしたら、まだ寝室かもしれな…」

意味あり気に、大きな瞳で上目使いに笑った。

「え…、あの、また来ます。まだ荷物が片付いてないんで…」

悠奈は、留美から視線を外したまま愛想笑いを浮かべて不自然に会釈し、門から外に出て逃げるように階段に向かった。階段を駆け降りたところで歩調を戻すと、ゆっくりと自分の部屋に向かって歩く。

―何してるんだろう…。ちゃんと挨拶してくればよかった…。留美さんの姿に驚いて逃げるように立ち去るなんて、意識しすぎだわ。二人がどういう関係であろうと、わたしには全く関係ないことなのに…。

彼女は、胸に染み入るもやもやしたものをかき消すように頭の中を空にすると、5階の一番端の部屋に入って行った。

「悠奈ちゃん、来てたけど？」

留美は、キッチンの冷蔵庫から缶ビールを二本取り出して、リビングまで持っていく。

ローソファで、片膝を抱えて煙草を吸っていた亜希の隣に座ると、缶のリングを引き開けて、一本を彼の前に置いた。

「…で、いきなり来て、その格好はなんだ？」

亜希は煙草を灰皿に押し付けソファに凭れると、バスローブ姿の留美に低い声で呟いた。

「言ったじゃない。わたしの家のシャワーの調子が悪いから借りに

来たんでしょ。シャワーの後はバスローブじゃおかしい？」

彼女は、企みを隠した魔女のように笑うと、缶ビールに口をつける。何も答えない亜希の膝に、その白い手に乗せると言葉を続けた。

「ねえ、あのコがこのマンションに住むこと、知らなかったんだけど。どうして教えてくれなかったの？」

留美は、亜希に甘えるように撓垂れかかると、彼の顔を覗き込む。

「いつか分かることだろ」

彼女をかわすように立ち上がりかけた亜希に、留美は噛み付くように言葉を投げた。

「逃げるの!？」

鋭く射抜くような視線を向ける。

「どうした？」

亜希は、ソファに座りなおして留美の顔を見ると、軽く首を傾けて聞く体勢をとった。

「気にいらないの。宏樹は知ってたじゃない。あのコがここに引っ越してくること。わたしだけ除け者にしてるでしょう？ 亜希が、あのコのこと特別に思ってることくらい分かってる。何だっていうの？ 彼女はあなたのことが解るっていうの？ わたし以上に解るっていうの？」

腹立たしさに任せて、彼女は心に溜めていた不満を一気にまくしたてた。

「違うだろ。除け者なんかしてないし、留美が俺の一番の理解者だ。」

「違うって何が？ わたしは理解者？ そんなこと聞いてないっ」

留美は悲痛な表情で言い放って、目の前に置いてあった缶ビールを、亜希の後ろの壁に投げ付けた。缶は鈍い音を立てて真下に落ち、フローリングを濡らす。

亜希は、何ごともなかったかのように、

「はやく着替えろ。風邪ひくぞ」

と、優しく彼女の頭に手を乗せて呟いた。

留美は、次の瞬間、力が抜けたように小さなため息をついた。彼女は、亜希の瞳に、労りと同情の色が浮かんでいることに気付き、どうしようもない切なさに苦しくなる。そんな彼の瞳を見つめると、無表情にゆっくりと着ていたバスローブの緋を解きはじめた。

「留美。自分を貶めるようなことはするな」

亜希は、素早く彼女の手を押さえ、憂いを含んだ瞳で、言い聞かせるように低く静かに呟いた。

「どうして、わたしじゃなく、あのコなの？ わたしじゃ…だめ…なの…？」

溢れる涙を隠すように俯き、身体を震わせ、言葉にならない細い

声で訴える。

今にも消え入ってしまいそうな留美を、亜希は、ソファの背もたれに掛けてあったブランケットを取って包み込んだ。

「絶対：離れないから」

顔を上げた留美は、彼の胸にすがりつくと頬を埋めた。

涙に濡れた大きな瞳が、じわじわと悠奈への憎しみの色に染まっていた。

【5】蜘蛛の巣―3

悠奈が亜希のマンションに引っ越し、1ヶ月以上が経とうとしていた。

日々の生活は何も変わらず、彼女は大学とアルバイトで忙しい生活を送っている。変わったことと言えば、事件以来、沈みがちだった母が落ち着きを取り戻し、仕事に復帰したことくらいだった。

たまに宏樹が部屋に顔を出しに来たが、亜樹とは話す機会さえなかった。彼の部屋で留美と顔を合わせてからというもの、引っ越しの挨拶もメールで済ませたままにしている。数回、エントランスで女子高生らしき団体に囲まれている彼の姿を見かけ、横を通り過ぎる時に会釈はしたが、そういう近所挨拶程度の関わりがなければ、全くの他人と同じようなものだった。

その日は土曜日で、悠奈はラフな部屋着で一日のんびりと家事をして過ごしていた。朝から天気が悪く、今にも雨が降り出しそうな曇空だったが、マンションには乾燥機が設置されていて、今日二度目の洗濯をはじめていた。彼女は、前のマンションよりずっと贅沢な生活を送っている気分になっていたが、その便利さに慣れられず、食器も洗浄器があるのに少量なら手で洗ってしまう。

―やっぱり、貧乏性って抜けないなあ…。

長年培ってきたライフスタイルは、すぐには変わらないことを痛感し苦笑いした。

キッチンを片付けて自分の部屋に向かっていた悠奈は、設置電話が鳴っていることに気付く。急いで部屋に入ると、子機の受話ボタンを押した。

「はい、恩田です」

「あ、恩田悠奈さんですね。警察のものです。事件の件で…」

受話器から、少し神経質そうな男の声が聞こえた。

「あ。はい、何か分かりましたか？」

「ええ、被疑者が、ほぼ確定したんですが…」

「え？ 分かったんですか？」

悠奈は、子機を持つ手に力を込めて、思わず大きな声を出した。

「はい、隅内巧という二十一歳の男性です。お知り合いですよね…」

「…は？」

彼女は、一瞬目を見開き、耳を疑った。

「隅内巧。あなたとお付き合いしていた人物ですよね？」

淡々と話すその声に、悠奈は、除々に足が震えてくるのを感じ、その場にゆっくりと座り込んだ。

「…まさか、彼が犯人？ どうして…」

彼女には巧が被疑者だということを、にわかに信じることはできなかった。

真実だとしたら、一体、何のためにあんな事件を起こしたのか。

どう考えても彼の動機に見当がつかなかった。

悠奈は、受話器から聞こえてくる刑事であろう人物の言葉に、呆然としながら耳を傾け続けていた。

警察は、火炎瓶に使われた瓶が、この近辺では『J A N G G』でしか扱っていない輸入飲料だったことから、当日『J A N G G』に行っていた悠奈の身辺から捜査をしていたということだった。元々、アリバイのなかった巧に目を付けていた警察が、ほぼ被疑者だと固めたのは、犯行当日、駐車場に残ってあった僅かな指紋と、巧の指紋がほぼ一致したことからだった。

巧は、あの日の事件以降、度々、悠奈の部屋を黙って見上げている姿を住人に目撃されていた。パトロールをしていた警官が、夜中に彼の姿を見つけたが、警官を察知した彼は逃げ出し、現在は行方不明だという。

その日の夜、悠奈は仕事を終えて帰ってきた母と夕食を済ませた後、自分の動揺を悟られないように平静を装って、事件の被疑者が巧であることを知らせた。

一瞬、持っていたコーヒーカップを強く握り、まさかというような表情をした母は、ふっと力が抜けたように、

「そう……。でも、巧くんらしくない、なにか魔が指したのかしらね」

と、同情の色を瞳に浮かべ、自分の娘を見つめて苦く笑った。

「分からないの。まだ信じられないくらいだもの」

悠奈は、無理に笑顔をつくって母に答える。

「……でも、悠奈、あなたのせいじゃないのよ」

母は、包み込むような優しい声音で言った。

悠奈は、その言葉に、心の氷が解けたように胸が暖くなり、目頭が熱くなる。彼女は、自分が付き合っていた彼が母に危害を加えたということで、重い責任を感じていたのだ。

まだ捕まっていない巧のことなど、事件に関しての問題は山積みに残っているものの、見知らぬ第三者ではなく、知人の犯行だと分かっただけでも先の生活に光が見えた。被疑者が確定した以上、犯人に怯えることなく、元のマンションに戻るができる。

元のマンションの住人には、すぐに全てが知れ渡ることになるだろう。そんな環境に戻ることは、悪い意味での注目の的となるに違いなかったが、これ以上このマンションに居座ることはできない。考えてみれば、よく知らない他人のマンションに住んでいること自体が常識はずれなことだった。冷静な判断能力が鈍っていて、部屋を借りることにしたのも先走り過ぎたのかもしれないと悠奈は思っていた。

亜希の存在を、いつも心のどこかで気にしていた悠奈だったが、これをきっかけに距離を置くことを決心する。今までも、決して意識的に近付くつもりはなかったが、この数ヶ月の間で微妙に距離は縮まっていた。彼にはこれ以上近付かない方がいいと、彼女自身の無意識の層から警告が出されていることを無視し続けることは出来なかった。

【5】蜘蛛の巣―4

翌日の日曜の昼間、悠奈は母と話し合い、次の週末には自分達のマンションに戻ることを決めた。

引越してきてから、ほとんど亜希に会えていなかった悠奈は、今回の部屋を出る挨拶くらいは直接言わなくてはと彼の部屋に向かっていた。

6階への階段を上りながら、いつもの緊張が高まってきていることを感じる。廊下に出て真直ぐ歩いていると、ちょうど亜希の部屋から出てきた人物が、エレベーターの方向に歩いていく姿が見えた。

―誰…？

悠奈は、その人物の足音を消すような歩き方が気になり、目で追いながら亜希の部屋の前まで行った。亜希の友達にしては少し様子がおかしい。右奥にあるエレベーター前で、キャップ帽を目深に被って俯いていたその人物は、真夏に長袖のグレーのパーカーを着て黒いパンツを履いている。背中を丸めて身を潜めるようなその不自然さに、悠奈は目が離せなくなった。

―あ…

彼の服装を観察していた悠奈は、足下で目を止めた。

―あの靴紐は…

その汚れた白いコンバースの、茶色の靴紐に彼女は息を飲む。

薄暗く顔が見えない彼に向かって、咄嗟に、彼女は声に出して叫んだ。

「巧くん！」

エレベーター前で、一瞬身体を強張らせた彼は、声の方向にゆっくりと顔を上げた。

「巧くんなの！？」

もう一度叫んだ悠奈に、彼は驚いたように固まったが、キャップ帽を少し上げて、自分が巧であることを示すような態度を取る。

その姿を見て、彼女が走り寄ろうと数歩踏み出した途端、彼は手の平を彼女に向け、腕を思いきり突き出した。

「え…？」

悠奈は、巧から向けられた、“来るな”というジェスチャーに、身体を動かすことができなかった。

巧は、何かを訴えるように彼女に視線を向けたかと思うと、エレベーターの中に消える。

―なに？ どういうこと？ どうして？？

巧の姿が消えた後、彼女は咄嗟にエレベーター前まで走ったが、降りていくエレベーターを追いかけたところで間に合う筈もなく、警察に追われている彼は逃げるだけだということを察する。ポケットに入れていた携帯を取り出して、巧のナンバーを押してみたが、逃走中の彼が携帯を持っている確率は少なく、何度か呼び出し音は鳴ったが、留守番電話に繋がった。

―どうして？？

頭が混乱していた彼女は、亜希の部屋には行かず、エレベーターで5階に降りて部屋に戻った。リビングのソファの上に座り、目を閉じて大きく深呼吸すると気持ちを落ち着かせる。そして、巧の行動を亜希の部屋から出てきたシーンからもう一度思い出していた。

— いったい、彼の部屋で何をしていたんだろう…

亜希の部屋で、二人は何をしていたのだろうか。他に誰かいたのだろうか。悠奈は、亜希への疑惑が湧いてきていることを感じると、頭を振ってポケットの中の携帯を取り出した。

「どうぞ。入って」

部屋の中からドアを開けた悠奈は、電話で呼び出した宏樹を笑顔で迎えると、リビングに通した。リビングのテーブルの上には、既にビールと簡単なおつまみを用意していた。その様子を見て、黒いTシャツと短パンのラフな部屋着姿で来ていた宏樹は不思議そうな顔をする。

「なにこれ？ 何かの祝い？」

「んー、ちょっと相談があって。どうぞ」

彼女は、彼にソファに座るようにすすめると、グラスにビールを注いだ。

彼は、腰を降ろしてグラスを持ち上げ、ありがとうと言うと一口飲む。

「で、相談て？」

少し興味あり気な瞳で、前に座った悠奈に聞いた。

「あのね、事件の犯人、わたしの付き合っていた人だって分かったのね。で、前に住んでいたマンションに戻ろうと思うの」

「…え、付き合ってたって…。どういうこと？ 捕まったのか？」

宏樹は目を丸くした。

「ううん、今、逃走中みたい」

悠奈は、さっき亜希の部屋から出てきた巧のことは黙っていた。

「捕まってないのか？ なら、まだここに居たほうがいい。もう少し落ち着くまで居ることはできるだろう？」

彼は真剣な表情で悠奈を説得するように詰め寄った。

「ありがと。でも、彼は犯罪めいたことなんてできる人じゃなかったから、きっと何か理由があったんだと思う。もう、危険はないと思うの。それに、ここに住ませてもらうのも申し訳ないし、元のマンションの部屋も放っておくわけにはいかないし。だから、今週末にでもまた引っ越そうって思ってる」

悠奈は意志が変わらないことを強調するように、強い瞳できっぱりと言いつつ切った。

「…ふーん。決めたんだな。そっか」

宏樹は、諦めたように、小さくため息をつく。

「そうなの。でね、宏樹さんに頼みがあつて…」

悠奈は、彼のグラスにビールを注ぎ足しながら話を続けた。

「わたしの我が儘でこのマンションに引っ越してきて、しかもタダで住ませてもらって、またすぐに引っ越したいっていうこと、亜希さんには言いにくくて…」

「言いにくいって？ 亜希に？」

彼は、意外そうな表情をすると、注がれたビールに口をつけながら言った。

「うん。なんだか申し訳なくて、顔を合わせづらいの…」

「顔合わせづらい？ ふーん…。で、俺に変わりに伝えてほしいってこと？」

釈然としないような顔で、宏樹は、女の子のように長い睫を微動だにせず悠奈を見つめた。

彼にとって、亜樹は大切な友達だった。その友達と関わらないようにしたいと言っている彼女のことが納得ができなかったのだ。

「ごめんなさい。亜希さんには感謝してるんだけど、良くしてもらった分、すごく言いづらくて。その点、宏樹さんは、ずっとここに来てから面倒見てもらってたから何でも話しやすいし…。」

悠奈は、俯き加減で不安気に呟くと、上目使いで宏樹の顔を見た。

「でも、ダメよね。こういうことは自分で言うべきだものね…。ごめんなさい、宏樹さんにしか頼るところがなくて…」

少し瞳を潤ませる。

「…ん、仕方ないなあ…」

彼は、困ったような顔を作っていたが、その表情には、まんざらでもない笑みが潜んでいる。宏樹が誰かに頼られると弱いタイプだということ、悠奈は見抜いていた。

「よかった。やっぱり宏樹さんに相談してよかった」

彼女はにっこりと笑って、また彼にビールを注ぐ。

「今週末に出たいなら、はやく亜希に言っておいたほうがいいな。明日にでも俺から言っておくよ」

「ありがとう。あ、今までのお礼にこんなことしか出来ないけど、どんどん飲んでね」

彼の気持ちが変わらないようにと、悠奈は接待を続ける。

「なんだ、二度と会えなくなるような口振りじゃん？」

「え…、そんなことある訳ないじゃない」

「だよな」

にこにこ人なつこい宏樹の笑顔を見ると、彼を利用しているような気持ちになって罪悪感が湧く。だが、今、亜希と顔を合わせる、疑った目で見えてしまいそうで怖かった。亜希が巧とどういう関係にあるのかは分からなかったが、会わずに去ることが先決だと思われた。

「悠奈ちゃんも飲んだら？」

宏樹は、そう言って彼女にビールを注ぎ返し、グラスを持って乾杯くつと無邪気に笑う。

このマンションを出ていけば、宏樹の純粹な笑顔にも会えなくなる。悠奈は、寂しさを押し殺して、普段以上にはしゃいで笑っていた。

【5】蜘蛛の巣―5

引越し前日の金曜日、悠奈はアルバイトを休んで、半日がかりで荷物を片付ける作業をしていた。

「悠奈ちゃん、キッチンは片付けなくていいの？」

キッチンの周りを所在無さ気にうろうろしていたユキが、リビングで段ボールの箱を組み立てていた悠奈に聞いた。

「ないわよ。元から、ここにあったものばかりだから。ユキちゃんは座っておいて」

「でも、お手伝いに来たのに…」

そう言いながらリビングに来て、落ち着かない様子でそわそわしている彼女を、悠奈は心の中で苦笑いする。

ユキは、胸元の広く開いた白いカットソーに、深いスリットの入ったピンクのミニスカートを履いていた。どう見ても、引越しの手伝いをしにきたという格好ではない。

「荷物少ないから、一人で大丈夫よ。もうほとんど片付いてるから。することないだろうから、亜希さんの部屋にでも行ってきたら？」

悠奈は、段ボールに雑誌やDVDを詰めながら、ユキに向かってにやっと笑う。

ユキは、ぱっと目を輝かせて、頬を紅潮させると、

「ほんと？ いいの？」

と、ソファから腰を浮かせた。

「いってらっしゃい」

悠奈は、静かな声で後押しする。

ユキは、その言葉を聞くやいなや、リビングから玄関に向かって、全速力でバタバタと走って部屋から出て行った。

「全く、分かりやすいコなんだから…」

ユキは、引越しの手伝いとかこつけて、亜希に会うことを期待して来ていたのだ。

そのことを悪びれた様子もなく全面に態度に出してしまう彼女を、悠奈は心から可愛らしく思っていた。

—ユキみたいに、素直に生きられたら幸せだろうな…。

一通り、荷物をまとめ終えた悠奈は、バルコニーに出て手摺に手をかけ、前に広がる街明かりを見つめた。周りには高い建物が少なく、遠くまで夜景を見ることができた。瞬くような光を見つめていると、今日でこの景色を見ることが最後なんだという実感が湧いてくる。

—亜希さんとも、宏樹さんともお別れなんだな…。

彼女は、不思議な寂しさを感じていた。今年の春以降、色々なことが起こり、その度に彼等と関わってきたような気がする。出会って間もない人たちだったが、親切にしてくれたことはずっと忘れられないだろうと感じていた。

不意に、上方からユキの笑い声が聞こえてきた。亜希の部屋のバルコニーに面しているガラス戸が開いているのだろう。嬉しそうな彼女の笑い声を微笑ましく感じると、悠奈は少し笑って静かに部屋の中に入った。

「あれ？ お母さん？」

彼女がリビングに足を踏み入れると、キッチンの冷蔵庫を覗いていた母がいた。

「あ、ただいま」

冷蔵庫から顔を上げた母は、悠奈を見てにっこり笑う。

「おかえり。仕事、はやく終わったのね？」

「そう。荷物まとめなきゃって思ったんだけど…。もうほとんど終わってるみたいね」

母は、冷凍室からピラフを取り出すと、レンジの中に入れる。

「ごめん、ご飯、食べてくるかなって思ってたから、何も用意してなかった」

「いいのよ。これで十分。それより、ユキちゃんが手伝いに来てくれるんじゃないの？」

ペットボトルの水をグラスに注ぎながら、母は悠奈に聞いた。

「ん、来てるけど…。堂藤さんの部屋に遊びに行ったわ」

悠奈は、肩をすくめてみせる。

「そうなの？ あ、堂藤さんにも挨拶に行かないといけないわね」

母は、レンジからピラフを出すと、皿に移してリビングのダイニングテーブルの上に置いた。

「お母さんは挨拶しなくていいわ。彼、気を遣うだろうから」

「そう…。じゃあ、堂藤さんのことは悠奈にまかせておくわ。食べる？」

「ん、一口食べる」

悠奈は、母の前に座り、ピラフをスプーンにすくうと一口頬張る。

この豪華なマンションには似つかない食卓だと彼女は思った。明日の昼にはこの部屋から出て元のマンションに戻る予定だ。ここでの生活は贅沢な気分浸らせてくれたが、やはり分相応というものがある。このマンションを出る理由の一つに、贅沢で便利な生活に慣れてしまわないうちに、本当の自分の生活に戻りたいということもあった。

質素な食事を終え、二人が、お茶を飲みながら他愛ない話をしているとインターフォンが鳴った。

「ユキちゃんね…」

悠奈は、そう言いながら玄関に向かった。

「お邪魔しま〜す」

ドアから玄関に入ってきたユキは、引越しの手伝いを全くしていないことに引け目を感じているのか、少し申し訳なさそうな顔をして立っている。

「おかえり」

「ね、お母さんって帰ってる？　ちょっと亜希さんから頼まれごとしたんだけど…」

「え、うん、帰ってるけど。ま、中に入って」

悠奈は、ユキに玄関から中に入るよう勧めた。

ユキは、リビングのダイニングテーブルでお茶を飲んでいる悠奈の母を見ると、会釈して、

「おばさん、こんばんは」

と、笑顔をつくった。

「いらっしゃい。ゆっくりして行ってね」

母はにっこり笑って立ち上がり、ユキに、お茶でいい？　と聞きながら急須にポットのお湯を注いでいた。

「あの、おばさん、亜希さんから渡してほしいっていわれたものがあって…」

「は？　わたしに？」

「はい、これなんですけど、餞別らしいです」

ユキは、持っていた小さな紙袋をテーブルの上に置く。

彼女の隣にいた悠奈は、亜希の行動に不可解なものを感じた。彼は母とは全く面識がなかったのだ。餞別を渡す理由が見つからない。

【5】蜘蛛の巣―6

「ユキちゃん、とりあえず座ってよ」

「うん、ありがと。その餞別、元々は亜希さんのお母さんのものらしいんだけど、一度も使わないまま閉ってあったみたい。だから、良ければ使ってくださいって言ってた」

ユキは、亜希からの伝言を伝えながら椅子を引いて座る。

「堂藤さんのお母さんのもの？ いいのかしら？」

母は、お茶を入れたコップをユキの前に置くと、紙袋を持って、中から細長い箱を取り出した。

「なんだか、高価そうね…」

戸惑った表情を浮かべた母が箱を開けると、深紅の宝石ケースが出てくる。

蓋を開けると、黒真珠のネックレスが入っていた。

「それって…。価値がよく分からないけど、高そうだね…」

悠奈は、母が手に持っている黒真珠を見ながら、囁くように言う。

「これは、戴けないわね…」

意外な餞別の品に、母は呆然としていた。

「えー、でも、亜希さんは、もらって欲しいって言ってたんだけどな…」

ユキは悲し気な声を出す。

「だからって、品物が品物なだけに、これはちょっと…」

悠奈は困ったように顔を曇らせた。

彼女は亜希との関わりを、これ以上持たないほうがいいと感じていた。たとえ使わないものだから貰ってほしいと言われても、受け取ってしまうと、また繋がりができてしまうようで気が引ける。

「ユキちゃん、悪いんだけど、この真珠を亜希さんに返してきてくれない？」

「えーっ、わたしが？」

驚いた彼女の顔を見つめ、悠奈はこくりと頷く。

悠奈は、自分も母も、彼と顔を合わせない方が無難だと感じていた。

「悠奈、それはユキちゃんにも堂藤さんにも申し訳ないわ。お母さんが返してくるわ」

母は、真珠をケースに戻しながら笑顔を彼女に向ける。

「お母さん…ちょっと…」

悠奈は、紙袋を持って急いでキッチンから出ていく母を止める理由を見つけられなかった。

彼女は、心の底から湧き出る不安に襲われる。極力、亜希と顔を合わせないように、関わらないようにしてきたが、ここに来て崩れてしまうような予感がしていた。

「もしかしたら悠奈ちゃんて、亜希さんのこと避けてる？」

ユキは隣に座っている悠奈をじっと見つめる。

「…そんなことないわよ。それより、この部屋が空くから住まわせてもらったら？」

真を突いてきたユキの言葉から話を反らすように、悠奈は話題を変えた。

「だめなんだって」

「え？」

「もう、次に住む人が決まりそうなんだって。タイミング逃がしちやった」

少しふくれっつらをして見せる。

「でも、いいの。さっき部屋に行ったら、いつでも遊びにおいでって言うてくれたから」

彼女の表情は一変して幸せそうな笑顔になった。

ユキの表情はくるくる変わる。恋をしているからか、素直だからか、どちらにしても悠奈はユキをうらやましく思った。自分の気持ちをそのまま自然に態度に現すことができる。そこには何の迷いも

見られなかった。

その後、亜希に会って満足していた彼女は、十分もしないうちに帰って行った。

母が、亜希の部屋に行って二十分以上は経っている。悠奈は落ち着かず、キッチンで食器を洗いながらもリビングの置時計を気にしていた。ちょうど三十分が経った時、玄関のドアが開く音がする。彼女はほっと安堵すると、キッチンに近付いてきていた足音に笑顔で振り返った。

「おかえり。ペンダント、堂藤さんに返せた？」

そう言った悠奈は、母の顔を見て、表情を固まらせた。

「ただいま。返してきたわよ」

廊下からリビングに入ってきた母は、微笑みを浮かべてダイニングテーブルの椅子に座った。

悠奈は、彼女の顔をじっと見つめながら、ゆっくりと前の椅子に座る。

「お母さん？」

眉を寄せて、母の顔を覗き込んだ。

「どうしたの？ 妙なものを見るような顔して」

にっこりと笑みを浮かべた母は静かに呟いたが、その視線はつかみどころがなく、生気が抜けているように感じる。

悠奈は、ここ最近、何度かこういう状況に居合わせていた自分を思い出した。何故か、身震いが彼女の身体をかけぬけた。

「…お母さん、堂藤さんと何話してたの？」

できるだけ平静を装って、悠奈は母に聞いた。

「ちょっとした世間話よ。真珠はちゃんと返してきたから、心配しなくていいわよ」

「…そう。それならいいんだけど」

彼女は、渦巻く胸騒ぎを感じながらも、気のせいだろうと、嫌な気分を追い払って立ち上がった。

「じゃ、わたし、お風呂入るわね。もう明日の用意は全部片付いてるから、ゆっくりしていて」

彼女は、そう言いながらキッチンに入り、自分の湯呑みを手早く洗って、水切り網の上に置いた。

「あ、悠奈」

母は、咄嗟に声をあげると、振り返った悠奈をじっと見つめる。

「どうしたの？」

「…あのね、明日の引っ越しを延期したいんだけど…」

穏やかに言った母の言葉は、気持ちが入っていないかのように淡々としていた。

悠奈に向けられている瞳は、彼女を通り抜けて、違う次元を見て

いるかのように虚ろに見える。悠奈は、自分の中で追い払っていた不安が、倍になって戻ってきたように感じた。

椅子に座りなおした彼女は、

「どうして？ …もう明日引越すって決めたじゃない？」

と、できるだけ落ち着いて言葉を発した。

「決めたつもりだったんだけど、急に前のマンションに帰るのが怖くなってきて。もう少しここに住ませてもらわない？」

「…怖くなったって…」

悠奈は戸惑っていた。かつての母は一度決めたことを、簡単に覆すような性格ではなかったし、何より、今の彼女が漂わせている空気がおかしい。

「ね、いいでしょ？ また体調が悪くなると困るのよ。仕事にも行けなくなるし…」

母は、悲し気な声を出したが、悠奈には、彼女の言動が気持ちをどこかに置いてきてしまっているように不自然な気がしてならなかった。

「お母さん、もう、堂藤さんには引越すことを伝えたのよ。今更ここには住めないわ」

彼女はゆっくりと、母に言い聞かせるように話す。

「…それは分かっているけれど、もしかしたら、まだ間に合うかも

しれない。もう一度住ませてもらえるかもしれない？」

母の表情からは、切願していることが読み取れたが、やはり悠奈が感じる不自然さは消えない。何度となく悠奈が元のマンションに戻ろうと説得しても、母は巧が捕まっていない状態で戻ることが怖いと言うばかりで、全く話に耳を傾けなかった。

結局、悠奈は押し切られた形で、このマンションでの生活を延長してもらうことを、亜希に頼まなくてはならなくなった。彼とは関わらないと決めていたのに、その決心は簡単に崩されてしまった。

彼女は、ふと、この部屋から抜けだせなくなるように、何か得体の知れない力に操られている気分になっていた。

【6】揺らぐ1

今回ばかりは、宏樹に間に入ってもらう訳にもいかず、荷物をまとめる作業ではこりっぽくなっていたジャージを、Tシャツとジーンズに着替え亜希の部屋に向かう。

ユキの話では、部屋の次の住人が決まりかけているということだったので、延長はできないかもしれない。悠奈は、いっそ、彼が延長を断ってほしいと願っていた。

部屋の前で動悸を抑えながら、インターフォンを鳴らして待っていると、しばらくしてドアが静かに開き、亜希の微笑みに出迎えられる。

「どうぞ」

落ち着いた声で、彼女は部屋の中に入るように促された。

「いえ、ここで。少しでも相談があるだけなんで…」

無理に笑顔をつくって答える。

「立ち話は好きじゃないんだ。どうぞ」

亜希は、くすりと笑うと、ドアを大きく開けて悠奈が部屋に入る道をつくった。

彼女は強く拒むことができず、ためらいながらも玄関に入る。彼の部屋はシンプルで無駄なものが全くなかった。リビングダイニングに通された悠奈は、その部屋に微かな違和感を感じる。TVも電話も時計もない。階下の彼女の部屋よりも広いリビングには、白いローソファとテーブルだけが置かれていた。

―意外：なにもない空間なんだ：

悠奈がイメージしていた亜希の部屋は、沢山の人が入り出る賑やかな空間だと想像していたが、静かで無な空間だった。ただ、壁に掛けられた一枚の絵だけが色を持っていた。彼女は、その絵に吸い込まれる。抽象画風なその絵は、グレー地に白と薄いピンクの点が流れているだけのものだったが、構成が桜の木を物語っていた。

―この絵は：

その、グレーと桜の色のコントラストが、彼女の記憶の何かと繋がったような感覚に落ちる。

「適当に座って」

キッチンから氷の入ったグラスを持ってきた亜希は、ローソファに座ると、テーブルの上の真っ青なボトルに入ったジンを傾けた。

「あ、わたしは…」

悠奈は、慌てて前のソファに膝をつき、2個目のグラスにジンを注ぎかけた彼の手を止めた。

「…ごめんなさい」

思わず彼に触れた手を咄嗟に引く。

亜希は、そんな彼女を見つめて、ふと笑うと、

「ジン、飲めるよな？ 一杯くらいつきあえば？」

そう言って、グラスにジンを注いだ。

彼の声は穏やかで、決して押し付けているようには感じなかったが、悠奈には、どうしても抗えない力が秘められているように感じた。

彼女は、差し出されたグラスを両手で受け取ると、少し口をつけ、自分の前のテーブルの上に置く。

「で、相談って？」

亜希は、グラスを持って、カラカラと氷の音色を楽しむように軽く揺らす。

「引っ越しのことで…」

悠奈は、言いにくそうに、両手で持っていたグラスに視線を落としながら声を出した。

「明日出てくことは宏樹から聞いてるけど？」

亜希は、優しく彼女に声をかける。

「…ごめんなさい。そうなの。そうなんだけど、事情が変わって…。逆で…」

「ああ、マンションに戻るのが難しくなったのか」

笑んだ彼は、全て見通しているかのように呟いた。

「え？ どうしてそれを…」

悠奈は戸惑いと疑いの入り交じった視線で彼を見た。

「君のお母さんが来た時に口にしてたからね。戻ることが不安だっ
て」

彼は片膝を片手で抱えると、軽くソファに凭れた。

「…そんなことを言ってたんだ…」

彼女は戸惑う。はじめから母は元のマンションに戻るものが苦痛だったのだろうか。そうだとすれば、自分の気持ちばかりを優先して、戻れることを押し進めてしまったということになる。悠奈は、母の本当の気持ちに気付かなかったことにショックを受けたと同時に、まだ、胸のどこかに引っ掛かる何かを感じていた。

「居ればいい」

そう言った亜希は、ソファから立ち上がって、キッチンへと向かう。

残された悠奈は、彼の気持ちが読めずに落ち着かずにいる。気持ちを言葉に表すことが少ない彼の心を察することは難しく、ちょっとした行動から読み取るしかなかった。亜希といくと、必要以上に神経のアンテナを張らなくてはいいけなくなること、彼女は感じていた。

キッチンから冷蔵庫を開け閉めする音がして、彼は、グレープフルーツジュースを持って戻ってきた。ジュースの瓶の蓋を開けると、半分程ジンが入っていた悠奈のグラスに注ぐ。

「こっちのが飲みやすいだろ」

彼は呟くと、腰を下ろして煙草に火をつけた。

「…ありがとう」

悠奈は、毎回、彼の洞察力に驚かされた。

緊張していた彼女の喉に、ロックのジンは通らなかったのだ。そのことに気付いてジュースを足してくれたのだろう。

—そういえば、このジン…。どうしてわたしがジンを飲むことが分かったんだろう…今まで彼の前でジンを飲んだ覚えがないのに。ソファの背もたれに腕を回して煙草を吸っていた亜希に、悠奈は盗み見するような視線を投げた。煙と共に立ち込める甘い香り。南国のハードな煙草を吸っていた彼だったが、不思議と品よく様になって見える。

「なに？」

すぐに視線に気付いた彼は、軽く首を傾げて悠奈を柔らかく見る。前髪がさらりと流れ、彼独特の色香が漂った。

「え…いえ」

彼女は、敏感な彼の反応に焦りながら、不自然にブルドックに口をつけた。

【6】揺らぐ―2

緊張して喉が乾いていたせいか、喉に通るブルドックが心地よく、二口程度でほとんど飲みほしてしまった。

「悠奈って、他に聞きたいことあるよな？」

空になった悠奈のグラスに、さりげなくジンを注ぎながら、亜希は自然に聞いてきた。

「え…？」

悠奈は、どきりとしたが、動揺を隠すようにグラスを持ち替える。

「…いえ」

内心焦りながら、不器用な笑顔をつくってグラスに口をつけた。

「誤魔化すのが下手だな…」

目を細めてふっと笑った彼は、テーブルに頬づえをついて彼女を見つめた。

「誤魔化すって…」

彼女は、目の前にある亜希の瞳から視線を反らせた。

ずっと、巧がこの部屋に来ていたことが気に掛かっていたが、そのことを聞いてしまえば、負の引力で良くない方向に吸い込まれそうな予感があった。悠奈は、ためらいがちに亜希に視線を戻す。

返答を待っている優しい瞳に出会い、この場を避けて通ることができなと感じた彼女は、重い口を開いた。

「あの…1週間程前に、この部屋から出てくる巧くんを見たの。彼は、ここに来ていたの？」

微かに声が震える。真直ぐに亜希を見つめた彼女の瞳には疑惑の色が浮かんでいた。

「ああ、来てたよ」

躊躇なく答えた彼は、煙草の火を消してグラスを持つと、氷をちらんと鳴らす。

「え…？」

「彼、どうやら被疑者みたいだな。今追われてるって」

そう言いながらジンを一口飲むと、グラスを上から指で掴むように持ちかえ、けだるそうに回した。

「どうして亜希さんの部屋に来たの？」

悠奈の頭の中は疑問だらけになる。

「さあ…。いきなり来たからね。自分は被疑者になっているけど、実は犯人は違うんだと言ってたかな。興奮気味だったから、よく分からなかった」

落ち着いた表情で静かに答えた亜希は、悠奈を見つめると微かに

笑った。

「…どうして、あなたにそんなことを？」

府に落ちない悠奈は、質問を重ねる。

「さあ。自分は犯人じゃないって、そればかり言ってたな」

彼は、テーブルの上にグラスを置くと、氷を次ぎ足した。

これまでの彼の言葉から、巧は、無実を訴えに彼の部屋に来ていたということが窺えた。

―でも、何故彼に？

悠奈の頭の中は混乱したままで、何一つ解決しなかった。かと言って、更に巧のことを亜希に聞いたとしても、これ以上の情報は出てくる様子はない。

「気になるだろうけど、そのうち解決するさ」

亜希の声は穏やかではあったが、この話は終わったと言わんばかりの威圧感を感じさせた。

「で、他に、隠してることはないか？」

「え？」

悠奈は、驚いたように視線を上げて亜希を見た。

「俺をずっと避けてるだろ。俺に対して不安に思ってることとか、

あるんじゃないかと思ってね」

彼女は、心の奥で傷んでいる部分をナイフで突かれたような気分になった。

このまま彼に問いただされると、余計なことまで言ってしまうそうで口をつぐんで俯いた。

「悠奈」

亜希は、テーブルに両肘をついて手を組んだ上に顎を乗せ、彼女の瞳を覗き込んだ。

「今、感じてること当ててみようか？」

少し面白がっているような彼の表情が、悠奈の不安を掻き立てる。彼への、常に感じている疑惑を感じ取られる前に、すぐにでも立ち上がってこの部屋から出て行きたかった。帰る頃合を見計らおうと、ちらっと腕時計に目を走らせる。

「話の途中だ。逃げない」

悠奈の行動を読んでいた亜希は、瞳に笑みを浮かべて含み笑いで言った。

「…そんな、逃げるなんて…」

亜希は、緊張で固まっていた彼女の片手を、おもむろに取ってグラスから離させると、優しく握り頬つえを付いた。

驚いた悠奈は、視線を上げて彼を見た。相変わらずの優しくて深い瞳。その瞳に心の奥まで魅入られ、自分という存在全てが溶け出

しそうな錯覚に落ちた。

「悠奈は…」

落ち着いた響きを持つ彼の声。悠奈は、繋がっている手の感覚だけで、抑えられない胸の高鳴りを感じていた。

「俺のこと、どうしようもなく気になってる」

亜希は、悪戯気に笑うと、魅惑の瞳で彼女を見つめる。

悠奈は、その魔力とも言えるような魅力から逃れる術が分からず、心臓の音が大きくなっていくことを止められない。

「当たり前？」

心地よく身体に響く彼の声に逆らえず、悠奈は微かに頷いた。

彼女は自分を見失いそうな程の鼓動の高鳴りを感じていたが、冷静な部分で彼の暖かい手と優しい瞳の中に住む、影の存在を見つけていた。自分の心音が聞こえる中で一呼吸置くと、微かに目を閉じる。

「…気になるの」

ためらいがちに口を開いた悠奈は、少し眉間に皺を寄せ、再び考え込むように目を閉じた。

彼の手から感じる正体の分からない何かを掴み取ろうとするが、それは追うたび、するりと逃げてしまった。彼女は、ゆっくりと目を開くと静かに亜希の瞳を見つめた。

「その瞳…。底しれない痛みのような悲しみが…」

彼女の声は、部屋に吸収されて消えた。

悠奈の囁くような声を聞いた亜希は、一瞬、目を見張ったが、穏やかな瞳で笑うと、そっと彼女から手を離れた。

「可愛くないな。口説いたのに、はぐらかされた…」

彼は楽しそうに笑ってソファに凭れると、腕を組んで、見下ろし加減に悠奈を見た。

悠奈は、彼が自分を口説いたのではなく、試したことを感じ取っていた。

「俺が怖い？」

亜希は片膝を立てると腕を組む。何かを訊ねる時に首を傾げる彼の癖。その、楽しみながら何かを探っているような瞳が、悠奈の心を揺さぶった。

「いえ。…ただ」

—関わってはいけないということは分かってる

彼女は、その言葉を飲み込んだ。

いつも心の中から警告が発せられる。亜希とは離れなければならない。そのことに気付きながらも、彼から離れられずに、今こうして一緒に空間にいる。しかも距離はどんどん縮まっていた。

「ただ？」

彼の瞳が、柔らかく、かつ、確実に答えを促す。

悠奈がためらっていたその時、部屋のインターフォンの音と共に、
ドアの開く音がした。

【6】揺らぐ―3

「入るわよっ」

玄関から叫ぶ声が聞こえると、バタバタと足音をさせて部屋に入ってくる人間がいた。

「あら、悠奈ちゃん、いらっしやい。引越しの用意はもう済んだの？」

そう言って、にっこり笑顔で現れたのは、真っ赤な長いウィッグを付け、濃い化粧をして、見事な龍の刺繍が入った黒いチャイナドレスを着た宏樹だった。

「…宏樹さん？」

悠奈は、キラキラとした扇子を持って笑っている彼を見て目を丸くした。

「あら、亜希、用意できてないじゃない。」

軽くくねらせた腰に手を当てて立っていた彼は、すぐにでもニューハーフの店でナンバーワンになれそうな程、鮮やかで綺麗だった。

チャイナドレスのスリットから覗かせる足は、すらりと長く、悠奈は思わず見とれてしまう。

「悠奈ちゃん、こんな格好でごめんなさいね。今日はクラブでゲイナイトなもんだから…」

「え…ゲイ…？」

その言葉を口にする、悠奈は、更に目を丸くして二人を交互に見つめる。

「誤解するんじゃない。宏樹も俺もノーマルだって」

亜希は苦笑いすると、ソファから立ち上がって

「ゲイナイト、行く？」

と、悠奈に聞いた。

「い…行きません」

彼女は、ひきつった笑いを浮かべて、首を横に振った。

「そっか。残念」

彼はくすつと笑い、リビングから奥の部屋に向かう。

「はやくしてね。もうすぐ迎えがくるから」

急かすように声を上げた宏樹は、悠奈の前に腰を降ろして斜座りをする、テーブルの上の亜希のグラスにジンを足して口をつける。

「宏樹さん、すごく綺麗…」

しぐさまで女性ぽく変化した彼の姿に、悠奈は感心したように呟

いた。

「や〜ね。嬉しいんだか嬉しくないんだか」

彼は、少し照れるように笑った。

「もしかして、バツゲーム？」

悠奈は、クラブで会った時の亜希も、バツゲームで軽い女装をしていたことを思い出していた。

「当たり。ほんと、あのメンバーはしょ〜もないこと考えてくれるもんだわ。それより、明日は何時頃から引っ越し作業するの？ 手伝いに行くけど？」

彼は、にこにここと笑って彼女に聞いた。

「あゝ、引っ越しは延長になったの。もう少しここに住ませてもらうことにしたんで…」

「え？ ほんとに？」

驚きながらも嬉しそうな笑顔で、彼はテーブルから身を乗り出す。悠奈は、頷くと、分かりやすい反応をする宏樹に笑顔を返した。

突然、宏樹が持っていた、長い鎖が付いたがま口のバッグから携帯電話が鳴る。彼は、女性らしい手つきでバッグを開けると、電話を取り出した。

「はーい、もう着いたの？ まだ亜希が用意できてないのよ。…え？ …当たり前でしょ。もう女よ」

悠奈は、彼が電話で話している間に、テーブルの上を簡単に片付けると、静かに立ち上がった。

「悠奈ちゃん、帰るの？」

宏樹は、電話に出たまま彼女に話しかけた。

「うん、帰るね。亜希さんに、よろしく言うておいて」

悠奈は、小声で囁く。

「あ、ちよつと待って。…え？　そうなの？　もうエレベーター？」

彼は、悠奈と携帯と、器用に両方に話しながら、ソファの背を持つて立って、目の前にいる彼女の手を握る。

「うん、分かった、じゃね」

宏樹は、そう言って携帯を切り、

「ごめんなさい。留美が迎えに来たものだから。とにかく、送ってくわ」

と、にっこりと笑った。

「いいよ。すぐ下だもん」

留美という名前を聞いた途端、悠奈は、はやくこの部屋を出ていきたい衝動にかられる。彼女と顔を合わせるのは、どこことなく気ま

なかった。

宏樹は、悠奈の言葉を聞いているのかいないのか、彼女の手を握ったまま廊下を進み、玄関まで引っ張って歩く。彼がドアに手をかけたと同時に、外からドアが開かれた。彼は、少し驚いた様子だったが、そこに立っていた留美の顔を見ると、とびきり愛想のいい笑顔をつくった。

「いらっしゃい」

「…やだ、すごい、いい女…」

留美は、一瞬、目を見開いて宏樹を見る。

「今、悠奈ちゃんを送っていくところなのよ。中で待ってて」

彼がそう言うと、留美は、後ろにいた悠奈に視線を向けた。

悠奈はぎこちなく、「こんばんは」と小さく会釈する。

「引っ越すんですって？」

留美は口元で笑いながらも、冷たい視線を投げかけた。

「あ、悠奈ちゃん、引っ越しは延長するんだって。ま、とにかく中で待ってて」

宏樹の言葉に、留美の顔色がスッと変わる。

悠奈を見つめた冷酷な瞳が、攻撃的な色に染まっていった。

「悠奈ちゃん、行くわよ」

宏樹に手を引かれて、彼女はドアから外に出る。玄関に入った留美とすれ違った瞬間、言い様のない寒気が襲ってきたが、振り返らず足を進めた。

玄関から部屋に入った留美が、廊下をリビングダイニングに抜けると、丁度、グラスとボトルを持ってキッチンに入ろうとしていた亜希が目に入った。

「留美、はやかったんだな」

黒いシャツとチェックのスリムなローライズパンツに着替えていた彼は、留美に微笑むとキッチンに入り、シンクにグラスを置いた。

「…亜希、今日、わたし、嫌な予感がしてたの」

留美は、カウンター越しに亜希を見ながら、不安そうに呟いた。

「心配いらない」

彼は、淡々とした調子で答えると、手早くグラスを洗ってキッチンから出てくる。

「心配いらないなんて嘘だわ。最近のあなたは少しおかしいもの。ここところ、わたし、嫌な気分になることが多過ぎるの。亜希、自分を見失ってない？」

「留美は考え過ぎだな。そんなに心配するようなことは何もないだ

ろ」

留美の前で、軽く肩をすくめて見せた亜希は、無造作にカウンタ―に置いていた部屋の鍵を手取る。

「すぐに宏樹も戻ってくるだろうから、行こうか」

そう言った彼は彼女に背を向けて、部屋を出ていこうとした。

「知らないから。最後に、傷ついて全てを抱え込まなきゃいけないのは亜希なのよ。また琴美のような人が増えるの？」

留美の咎めるような声音に、亜希は足を止めて、ゆっくりと表情の無い顔で振り返る。

留美は、思わず口にした自分の台詞に、はっと我に返り、彼の色のない瞳を見て、頭から血の気が引いていくのを感じた。

「…行くぞ」

亜希は、無表情なまま、口許にだけ笑みを浮かべて呟くと部屋から出ていく。

留美は、彼の背中を見ながら、沸き上がる自分への嫌悪感を唇と一緒に噛み締めた。

【6】揺らぐー4

巧が街外れのビジネスホテルに泊まっていたところを任意同行されたのは、悠奈が再び亜希のマンションに住むことを決めてから数日後のことだった。

巧は、事件のことを聞かれると、あっさり火炎瓶を投げ入れたたことを認めたということだ。ただ、少し動揺しているようで、動機があまりにも不自然で、すぐに興奮状態になってしまうということだった。

その連絡を受けた一週間後の今日、巧が弁護士を通して、悠奈に面会を切望していることを伝えてきた。

悠奈の頭は混乱したままだったが、とにかく巧に会わなくてはいけないと感じ、部屋着からベージュのシャツとジーンズに着替えると、鞆を持って部屋から出る。

エレベーターを降りた所で、ちょうどエントランスから入ってきた留美と出くわした。

「こんにちは」

悠奈は、すれ違い際に、できるだけ平静を装って笑顔で会釈すると、彼女の横をすり抜けた。

「悠奈ちゃん」

不意に後ろから名前を呼ばれて、びくつとし、彼女は立ち止まった。

「なにかあったの？ 顔色が悪いわ」

留美は、彼女の前に回ると、顔を覗き込んで視線を絡ませる。

「え、いえ…。あ、化粧してないからかも？」

悠奈は、必死で無理な笑顔を作ったが、自分の顔がひきつっているのが分かる。

「慌ててるようだけど、どこに行くの？」

不安が伝わったのか、留美は、少し心配気な表情をつくって訊ねてきた。

「いえ…。あ、ちょっと…。その、コンビニに…」

咄嗟に何と答えればいいのか分からなかった悠奈は、言葉を途切れ途切れに誤魔化しながら答えた。

「悠奈ちゃん？」

留美は、真剣な表情で悠奈の腕を掴む。

誤魔化しきれないと感じた悠奈は、

「自宅の事件の犯人と接見しないといけないんです…」

と、観念したように言葉を落とす。

二人の間に、一呼吸ほどの間が空いた後、留美は静かに口を開いた。

「送るわ。車出してくるから駐車場の前で待ってて」

それだけ言うと、留美は足早にエレベーターに乗り込んだ。

落ち着かないまま駐車場の前に行き、留美を待っていた悠奈は、中から出てきた薄いブルーグレーのビートルに気付く。運転席に留美が乗っていることを確認すると、助手席側のドアを開けて車に乗った。

「ごめんなさい。お願いします」

「いいのよ」

悠奈の申し訳なさそうな声に、留美はそっけなく応えて車を発進させた。

拘置所までは、マンションから車で三十分程の距離だった。悠奈は心が散り散りになったようにそわつき、窓から外を眺めたまま鞆の肩紐をいじっていた。

巧のことで頭が一杯になっていた彼女は、彼が自分のマンションに火炎瓶を投げ込んだ理由を考えていた。クラブから帰った時には事件は既に起きていたのだから、クラブの2Fで会った後すぐに、マンションまで行って火炎瓶を投げ込んだとしか考えられなかった。

？わたしがあの時、巧に何かしたのだろうか？ 彼が憤るようなことを？

彼女はクラブでの出来事の一部始終を思い出していたが、全く検討がつかなかった。

車が拘置所の入り口の前に着くと、悠奈は急いでドアから外に出る。車の中で、ほとんど口をきかなかった留美に外から会釈して、振り返らず小走りに建物の中に入った。

接見室の分厚いガラスの向こうで、カウンターに肘をつき両手を組んで座っていた巧は、悠奈がマンションで見かけた彼より二回り程小さくなっていた。彼は、視線を上げて悠奈を見ると、微かに瞳を潤ませて、弱々しく口許に笑みを浮かべた。

悠奈は、ガラスの前に設置されているカウンターの椅子に腰を掛ける。

「巧くん…大丈夫？」

頬がこけて、別人のようにやつれた彼に心配そうに声をかけた。

「…悠奈、ごめん」

巧は、今にも泣き出しそうな声で、頭を抱えて俯いた。

「…どうして？ 本当に巧くんが犯人なの？ 理由を聞かせてほしい」

「…分からない…。でも…」

「分からないって…。覚えてないってこと？ 酔ってたの？」

その悠奈の質問に、巧は大きく首を左右に振って、真直ぐに彼女を見つめた。

「近寄るな…。堂藤に」

彼は、低く小声で呟いた。

「…え？」

彼女は、彼の口から亜希の名前を聞いた途端、ぞくつと身体全体に嫌な悪寒が走ったことを感じる。

「あいつが…俺を動かした。俺を操ったんだ。命令したんだ」

巧は苦しい表情になると、絞り出すように声を出した。

「…どうということ？」

悠奈は、微妙な気持ちで彼の話を聞いていた。心のどこかで、これ以上聞きたくないと耳を塞いでいる自分がいる。彼女は、気持ちに構えをつくると、巧の言葉を待った。

「…誰も信用してくれやしない。だけど、俺は操られたんだ。悠奈の部屋に火炎瓶を投げ込めて命令されたんだ。俺がそんなことする理由なんてどこにもないだろ？ 頭の中に響くあいつの声には逆らえなかった。勝手に身体が動いてた…。クラブで空き瓶を探して、悠奈のマンションに行った。無我夢中だったよ。電話で母親を起こしてから投げろって言ってたんだ…。酷い火事になったら困るから…だから…」

「巧くん?？」

悠奈は、一気に話し続ける彼の血走った瞳が、宙を泳いで何かに怯えていることが分かった。嘘をついているようには思えなかったが、何か異質な狂気めいたものが感じられ、彼女の手は微かに震え

はじめていた。

「あいつ…俺を覚えてないって言いやがった」

巧は、諦めたように投げやりに笑うと、吐き捨てるように呟く。

「あいつのマンションへ話しに行ったら、俺のことは、ユキの写メでしか見たことないだど。俺に一度も会った覚えがないってさ。全く取り合おうともしない。でも、確実にあいつなんだ」

「…ね、落ち着いて。わたしとマンションで会った時、あの時に話しに行ってたの？」

「ああ。まさか悠奈があの場所にいるなんて思ってたけど…。あの日までは、堂藤と話さえできれば、あいつがどんなトリックを使ったのかさえ分かれば、俺は被疑者扱いから解放されると思い込んでた…」

除々に、冷静に話し出した巧は、少し考え込むように視線を落とすと続けて話す。

「けど、甘かった。俺は完全に被疑者で、あいつは全く知らん顔だ…。もちろん、あいつに証拠なんかないしな…」

「巧くんは、堂藤さんから命令されたの？ 何て言われたの？ わたしの部屋を狙った理由は何？ なんだか、巧くんの話はよく分からない…」

悠奈は、震える両手を膝の上で強くにぎりしめながら、出来るだけ優しい口調で彼に話しかけた。

彼女のその質問に、巧は悲し気な笑顔を作って首を横に振る。

「…分からない…ただ、自分の意思が効かなくなった。洗脳されたような感じだった。あのクラブの2Fであいつと話した後、頭を乗っ取られたような感じだった…」

「クラブの2F…」

悠奈は、あの日、クラブの2Fでの巧と亜希のやりとりを瞬時に思い出した。

拘置所までの車の中で、クラブでの一部始終を思い出していたはずなのに、2Fでのシーンだけは無意識の下に隠して思い出さないようにしていたことに気付く。

あの時、目眩を感じ意識が朦朧としていたことで、はっきりと何があったのかは思い出せない。だが、おぼろげながらも二人の状況を思い出し、今、巧が話している内容と、どこかで合点がいったような気がして、自分の血の全てが下降していくような錯覚に落ちた。

「悠奈、俺を信じてくれ。確かに、火炎瓶を投げ入れたのは俺だ。だけど俺は無実なんだ！」

巧は、スがるような瞳を彼女に向けた。

「俺じゃない。堂藤が犯人なんだ!!」

【6】揺らぐ―5

接見室を出た悠奈は、ゆっくりと拘置所の建物から外に出た。外は夕暮れで、いつの間にか空の雲はオレンジに染まっていたが、彼女には、その色すら感じる余裕がなかった。

頭の中で、「堂藤に操られた」という巧の言葉が巡っている。彼が平気で嘘をつくような人間ではないということは、恋人としてつきあってきた悠奈にはよく分かっていたが、接見室で聞いた話は、あまりにも現実味がなく、にわかには信じがたい。確かに、クラブでの二人のやりとりの間には、異常な空気が流れていたような気がするが、巧の話を全て鵜呑みにはできなかった。

彼女は、自分の周りで起こっている事態が把握できず、巨大な迷路に迷い込んでしまったような気分になって、無力感に襲われた。

悠奈が、拘置所の門を抜けると、薄いブルーグレーのビートルが、送ってきてもらった時と同じ場所に止まっていた。留美が待っていることを予想だにしていなかった彼女は、一瞬ためらって足をとめる。混乱した頭で彼女と顔を合わせることにより多少の不安を感じたが、無視して通り過ぎる訳にもいかず、ゆっくりと車に近付いた。

「もしかしたら一人になりたい気分かもしれないけれど、話があるの」

彼女は、悠奈に助手席に乗るように窓から顔を出して催促した。悠奈は、少し愛想笑いを浮かべると、助手席側のドアを開けて、車に乗り込む。

「死にそんな顔してるわね。大丈夫？」

留美は、そう言いながらエンジンをかけて車を発進させた。

「…マンションに火炎瓶を投げ込んだ犯人、わたしの彼氏なんです…」

フロントガラスから外を見ていた悠奈は、まるで感情が入っていないかのように淡々と話した。

留美に内情を話すべきか迷う余裕すらなく、口からついて出てしまう。

「知ってるわ。宏樹に聞いた。で、彼に会ってきたの？」

「…ええ…。面会してきたんだけど、どうもおかしなこと言っている…」

悠奈は、しゃべりすぎている自分にはっとして、ちらりと留美を見たが、彼女は前を向いたまま運転をしていた。

「捕まった時は精神状態が不安定になるだろうし、仕方ないんじゃない？」

表情を変えず、相変わらず素っ気なく返事を返してくる。感情的にもならず、冷静に、全くの他人事のように話を聞いていた。

？巧が、亜希に指示されて火炎瓶を投げたと言っていることは、この人には絶対に言わないほうがいい…

悠奈はそう思うと、それ以上は何も話さなかった。留美も、黙ったままで運転している。

流れていく窓からの景色を眺めながら、彼女はこれから先のことを考えていた。犯人が巧だと分かり捕まった以上、今度こそ元のマンションに帰るべきだろうが、まず何からどうすればいいのか整理できず、思考はぐるぐると巡っていた。

車がマンションの前に着くと、留美はエンジンを止めて、シートベルトを外す。助手席の悠奈は、車から降りようと思ったが、留美が話があると言っていたことを思い出して彼女を見た。

「あの、お話って？」

隣でシガレットケースを取り出していた留美に声をかけた。

「…あなたがこんな時に、ちょっと言いにくいんだけどね」

そう言った彼女は煙草に火を付けて、ふっと短く煙を吐いた。

「このマンションから出て行ってほしいの」

留美は、そう言って煙草を見つめたまま口許に乾いた笑みを浮かべた。その瞳には好意的な色は全く映っていない。

「え…？」

悠奈は一瞬、背筋に寒さを感じると、無意識にほんの少し身体を窓側に寄せる。

「犯人が捕まったなら、もういいじゃない。帰れば」

「あ…あの…」

悠奈が戸惑いながら口を開いた時、留美は左手を延ばして悠奈の腕を強く掴んで、ぐっと自分に引き寄せる。

「出て行って。亜希に近寄らないで」

悠奈の瞳を、睨むように覗き込んだ留美は低く呟いた。

腕が、じんじんと痛み、掴まれている肘のすぐ上で血が止まっているように感じる。

悠奈は目の前に、全身で自分に敵意を向けている人物がいることを気付かされた。

「亜希の前に現われないで。遠い場所へ消えてよ」

留美は、除々にのけぞる悠奈の腕を再び引っ張り、身体を引き寄せると、

「消えて。二度と現れないで」

と、薄笑いを浮かべて、敵意のこもった瞳で彼女の顔を見据えた。

「…あ…」

悠奈は、どう答えればいいのか分からず、留美の瞳から目を離せないまま固まっていた。彼女の言っている意味も、自分が置かれている状況も、何もかもが理解できずにいた。留美は、亜希のことを特別に想っていることは分かっていたが、嫉妬心だけでマンションから出ていけと言っているように思えない。

留美は、ふっと視線を弱め悠奈の腕から手を離して運転席のシートに凭れた。

「あなたの存在自体が、亜希にとっては迷惑なの。あなたには分からないでしょうけど、あなたが彼を不幸にするのよ。だから、彼の前からいなくなって。これ以上、近付かないで」

棒読みのように淡々と話した彼女は、煙草を深く吸う。

悠奈は、彼女の言葉に、巧の話を思い出した。

？近寄るな。堂藤に

今度は、留美が彼に近付くと言ってきている。悠奈の頭は、混乱したまま整理がつかなかった。

「…留美さん、今会ってきた彼からも、亜希さんには近付くなんて言われた…。どうして？ わたしがここを去れば、そうすれば全てうまくいくの？」

微かに震える声で、悠奈は留美の横顔に訴えた。

「…そうよ。何もなかったことにして、亜希という人間が存在していたことさえ忘れて、ここから去れば全てがうまくいくのよ」

留美は、前を向いたまま答えると、煙草を消す。

「あなたが亜希の近くからいなくなればいいの」

低く呟いた留美の声は、悲しみの色を帯びて響いた。

車から降りた悠奈は、呆然とマンションに向かって歩いていった。巧の言葉と留美の言葉が交互に頭に浮かんで消えていく。自分の心の中にも、二人と同じように、亜希に近付いてはいけないという警鐘が鳴っていた。

「どうしたらいいの…?」

悠奈は、独り言を呟くと、疲れたように笑った。

【6】揺らぐー6

引っ越しを延期してから2週間、悠奈は元のマンションに戻らなければと考えながらも行動に移せず、変わりのない日々を過ごしていた。だが、巧が捕まってからというもの、周りの好奇や哀れみの目を向けられることに疲れを感じはじめ、外に出ることさえ億劫になっていた。数カ月もたてば落ち着くだろうと、出来るだけ気にしないようにしていたものの、「椿屋」では、同人同士が働いていたこともあり、余計な詮索をされることも多く、バイトを辞めざるを得なくなった。バイトを辞めた彼女は、大学に行って講義が終わるとすぐにマンションに帰り引きこもるという、ネガティブな生活が日常になりはじめていた。

巧の弁護士に彼の様子を何度か聞いたが、少し落ち着きを取り戻したようだった。動機について聞くと、少し感情的になり、変わらず亜希に動かされ利用されたと口走るらしい。彼は、火炎瓶を投げ入れたことを認めていたし、動機で奇妙な嘘をついたところで何のプラスにもならない筈だ。亜希を貶めたいがための嘘ということも考えられるが、巧が亜希を恨む理由も見当たらなかった。

悠奈は、その日も自分の部屋にこもり、ベッドに座ると何気なくクラブでの巧の表情を思い返していた。巧の動機の説明は納得できない点が多いが、心の奥底で、何かが合点が行くのだった。

？あの日、巧くんはクラブの2階で生氣なく立っていたんだ…。

彼女は、自分の中で何に合点が行っているのかを探っていたが、もやもやするばかりで答えは出ない。

突然、鞆の中に入れていた携帯電話にメールの着信音が鳴る。彼女は、携帯を取り出すと、ユキから送られてきていたメールの文言を目で追った。

「まったく…」

呆れたように笑うと、すぐに返信メールを打って、鞆を持って部屋から出た。

二人が待ち合わせていた場所は、いつものショッピングセンターの中のカフェだった。いつもと同じ席に座っていたユキは、店に入ってきた悠奈に大きく手を振った。悠奈は手を振り返すと、カウンターでアイスコーヒーを注文して、テーブルまで持っていく。

「わざわざ来てもらってごめんね。でも、迷っちゃって…」

ユキは、前の席に座った悠奈を見て、グラスに挿したストローをくるくる回しながら甘えた声を出した。彼女はいつものように、女の子らしい大きなフリルの付いたシャツを着ていた。

「で、どれなの？ 渡せないでいるプレゼントは？」

悠奈は、笑いながらユキに急かすように聞く。

「んっとう、これなんだけど」

ユキは、携帯を悠奈に見せる。そこには、ハンティング帽が映っていた。

「かわいいじゃない。どうして迷うの？」

「んゝ、亜希さんて、お洒落すぎて、どういゝのが欲しいのか分からないし。それに、誕生日もかなり過ぎてゐるし、今更って思われるかなって…」

困ったように笑ったユキは、携帯を閉じると小さくため息をついた。

「いいじゃない。プレゼントなんて気持ちが大切なんだから。きっと、喜んでくれるって」

悠奈は、珍しく消極的になっているユキを、勇気づけるように励ました。

「そうかなあ…」

「そうよ。でも、ほんと、ユキちゃんは亜希さんのこと好きなんだね」

「え…。うん。へへっ」

ユキの顔が、赤みを帯びて緩む。

幸せそうな表情に変わる彼女の素直さを、毎回のことではあったが、悠奈は羨ましく思った。

「どうしてかなあ。はじめて店で会った時、この人だっと思ったんだ」

「はいはい、あの団体の中で目をつけたんだよね？」

悠奈は、からかうようにユキに聞いた。

「うん。て言うか、あの団体さんが入ってきた時、店の入り口で亜希さんにトイレの場所聞かれたの。で、見たことある人だっと思っただよね」

「え…？ 彼と話すきっかけがあったんだ…」

悠奈は、あの日、二人が会話をしていたことを知ると、くつと胸に引っ掛かりを覚え、ユキを見つめる。

「そう。きつと、わたし、亜希さんと話した時から彼にはまっちゃったんだと思う。なんだか、その後は自分が自分じゃなくなったみたいにフワフワしてたもん」

「…ふわふわ？」

「んー、なんていうんだろ、恋しちゃったって言うのかな。自分でもワケ分かんない行動してたかも」

ユキは、そう言うと、ふふっと笑ってアイスコーヒーのストローに口をつけた。

「どういう？ ワケ分かんない行動って？」

悠奈は、自分の中でモヤモヤしている何かを鮮明にするかのよう
に、ユキに詰め寄って聞いた。

「それはー、亜希さんの携帯から自分の携帯に勝手に番号飛ばしたり…。悠奈ちゃんに『彼を見たことある？』なんて聞いたことも、

今となったら変な話よね」

ユキはそう言うとき少し苦笑いする。

「…もしかして、あまり自覚なかったの？」

詮索するような視線を悠奈は投げた。

「うーん、自覚ないって言われればそうだけど、恋ってそんなものじゃない？」

にっこり笑ったユキは、ふと、不思議そうな顔をした。

「で、なんでそんなこと聞くの？」

「…ユキちゃんは、亜希さんにトイレの場所聞かれた時、他に何も言われなかった？」

ユキの問いには答えず、悠奈は質問を重ねた。

「え、うん、別に。トイレの場所を聞かれただけよ。ただ…」

「ただ？」

「彼の視線に吸い込まれそうだった。何も考えることができなくなっちゃった。その後は見えない声に導かれてた感じ？自分の行動が自分じゃない感じがした…。恋するってすごいよね」

彼女は、頬を紅潮させながら嬉しそうに話す。

ユキとは正反対の表情をした悠奈は、自分の心の奥に、蓋をして

見ないようにしてきた何かを覗いてしまったような気分になっていた。

「ユキちゃんは、声に導かれるように、自分の意思じゃなく身体が動いてしまったように感じたってこと？」

ゆっくりとした口調で訊ねる。

悠奈は、ユキの次に発せられる言葉が、否定の言葉であることを期待していた。

「うん。そう。その表現がぴったりかな」

彼女の無邪気な笑顔に、悠奈は薄く笑うと、自分の中で確信しなくなかった事実が、はつきりと浮かんできた。

？やっぱり、彼なんだ…

彼女は、頭をフル回転させ、今まで周りで起こってきたことを思い出しながら、整理していた。

ユキが亜希とはじめて会ったあの日に「椿屋」で見せた態度や表情は、普段の彼女の快活な様子とは全く異なっていた。身体は動いていたが、操り人形のように瞳に生気が感じられなかった。その時の行動は、本人にもあまり自覚がない。

？巧がはじめてじゃなく、ユキがはじめだったんだ…。

ユキは亜希に惹かれ、その延長上のことを声に指示されたため、操られたというより自分の意志で動いたと感じている。だが、巧は自分の意志ではない行動を強いられたことで、その声の主の亜希の存在に気付いたのだ。

？あの時のお母さんもそうだった。元々マンションに戻りたくない気持ちがあった上で彼に利用された…。

考え込むように視線を落としていた悠奈に、

「どうしたの？ 亜希さんがどうかした？ 何かあったの？」

と、心配そうにユキは訊いた。

「え…ううん、ただ、ユキちゃんは、亜希さんのこと、すっごく好きなんだな…って思ったの」

無理に笑顔を作った悠奈は、視線を上げると、適当に話を誤魔化した。

「えー、当たり前じゃない。大好きよ」

照れ笑いをして呟いたユキは、気持ちが溢れ出すのを止められないように話し続けた。

「亜希さんの外見も性格も全部大好き。声も。なんていうんだろ、一目惚れなのよね。わたしの理想そのものって感じ…。彼が望むこと、何でもしてあげたいって思うくらい好きなのね。自分でもおかしいくらいハマっちゃってるのよね…」

ユキの言葉を、笑顔で聞いて相槌を打っていた悠奈は、頭で全く別のことを考えていた。

？留美さんと宏樹さんは、亜希さんのことを何か知っているかも

しれない……。留美さんは確実に知っている筈……。

悠奈は、周りに張られた蜘蛛の巣から必死で逃れようと足掻いてきたことをやめ、蜘蛛の正体を知るために、自ら巣の真ん中に向かって決心をしていた。

【7】桜の因—1

悠奈がユキと別れたのは午後7時を過ぎていた。駅前でケーキを買った悠奈は、マンションに戻ると自分の部屋ではなく、そのまま宏樹の部屋に向かう。3階の彼の部屋の前に着くと、門を開けて中に入り、玄関のインターフォンを鳴らした。

「はい？」

インターフォンから、いつもの明るい宏樹の声が聞こえる。

「悠奈です。ちょっと、聞きたいことがあって…」

彼女がそう言って十秒も経たない間にドアが開き、にこにこ笑っている宏樹が顔を覗かせる。

「いらっしやい」

ケーキを持っていた悠奈の逆の手を掴んだ宏樹は、

「入って入って」

と言いながら彼女を部屋の中に入れた。

彼の部屋は、悠奈の部屋と同じ間取りだったが、通されたりベングは一回り狭く見える。一人掛け用の真っ赤なソファが2対に丸テーブル、TVと本棚が置かれているだけだったが、本棚が壁一面を覆ってしまう程大きかった。

「本だらけって思ってる？」

冷蔵庫から出してきた缶コーヒーをテーブルの上に置いた宏樹は、ソファに座って本棚を眺めていた悠奈に訊いた。

「うん…意外だな〜って」

棚に並んでいる本は、法律関係のものから宗教的なもので、色々なジャンルのものが並んでいた。

「意外って失礼だな〜。ま、そりゃそうだ、その本、俺のじゃなくって、亜希のものだから」

彼は、そう言ってソファに座ると、缶コーヒーを開けて悠奈の前に置く。

「亜希さんのもの？ どうしてここに？」

「なんでも、部屋にモノがあると落ち着かないらしくて。だから、リビング見ても分かっただろうけど、ヤツの部屋は何もないよ。俺は亜希の倉庫代わりの部屋をタダで貸してもらってるんだ。みんなが集まる時もいつも俺の部屋。ヤツの部屋には特別な時以外は、俺か留美くらいしか入ったことないんじゃないかな」

「…そうなんだ」

悠奈は、亜希のリビングを思い出していた。何もない白い空間。ただ、唯一色のあるものは壁にかけられた桜の絵だけだった。自分のごく近くには人も物も寄せつけない。そんな亜希の本質が出ている気がしていた。

本棚から視線を宏樹に移した彼女は、一息つくと口を開く。

「あのね、宏樹さんて、亜希さんと一緒にいる時、何かおかしいことが起こったこととかない？」

缶コーヒーに口をつけながら目を丸くした彼は、ごくりと喉を鳴らすと、

「おかしいこと？」

と、奇妙そうな顔をして悠奈に聞き返した。

「そう。ない？ たとえば、彼のまわりで、普段とは違う変な行動をした人がいたとか。何か事件みたいなことがあったとか……」

悠奈の言葉に、宏樹は一段と訳が分からないといったような顔をしたが、彼女の真剣な表情から冗談で言っていることではないことを察すると、考え込むように斜に視線を落とす。

「……うん、変な行動って、俺らの周りには変なヤツばかりだからよく分からないんだけど……」

「そう……。そうよね。ごめんね。変な質問して」

「いや、いいんだけどね……。亜希の周りには変なヤツしかいないしね……。事件的なことって言えばドラッグで捕まったヤツがいるとか、そんな感じかなあ……。そんなの日常茶飯事だしなあ……」

宏樹は眉間に皺を寄せて腕を組むと、更に考え込むように天を仰いだ。

「そういえば…。事件じゃないけど、亜希の家族や親戚には事故や自殺が多いみたいだな」

「事故？」

「ああ、琴美ちゃん：あ、ヤツの双児の妹ね。も、事故ってるな。車に飛び込んでって脳死状態になっちゃってね。今だに入院中だよ。回復する見込みはないだろうけどね。」

「亜希さんて、妹さんがいたんだ…」

初めて、亜希に妹がいたことを知った悠奈は、彼の何を何も知らない自分を再認識する。

「そう。その事故を、亜希は自分のせいだと思ってるとこあってね。詳しくは知らないんだけど、あの時、ヤツの伯父の自殺も重なって。亜希はひどく落ち込んで学校にも来なかったな…」

遠い過去を思い出すかのように、宏樹は目を細める。

悠奈は、宏樹の情報の中に、自分の周りで起こっているような事実を見つけられなかったが、亜希の身近な人の不幸が彼の力と関係しているのかもしれないと考えた。

「あ、ケーキ、食べてね」

悠奈は、沈んでしまった場の空気を変えるように、ケーキの箱を差し出して立ち上がる。

「お皿、勝手に持ってきちゃっていいよね？」

そう言いながら、足早にキッチンに向かった。

「ねえ、悠奈ちゃんてさ、さっきから亜希のこと聞いてるけど、何かあったのか？」

キッチンに届くように声を張り上げる宏樹。皿とフォークを持ってリビングに戻った悠奈は、ソファに座るとテーブルの上の箱を開けてケーキを取り出しながら口を開いた。

「ごめんね。宏樹さんには気分いい話じゃないよね。亜希さんのこと詮索するようなこと聞いて。でも、どうしても知りたい気がするなことがあったから」

皿の上にケーキを乗せると、宏樹の前に差し出した。

「俺は別に何もなければかまわないんだけどさあ」

宏樹は、フォークを持ってケーキを一口食べ、

「ん、うまい」

と、にこにこつと子供のように幸せそうな表情をした。

【7】桜の因—2

宏樹の話を聞いても自分の中で解決が出来なかった悠奈は、亜希と直接会って話す約束をとりつける。何故か彼は、話をする場所に小さな公園を指定してきた。電車で隣町まで出た悠奈は、駅から南に5分程歩いた住宅街にある小さな公園に向かっていった。

悠奈は、両親が離婚する前に、この近所に住んでいたことがあり、その公園の場所は微かに記憶に残っていた。

？どうしてこんな場所に呼んだのだろう？

昔の記憶を辿りながら、公園に向かって歩く。街は、新しく建てられたマンションが増え、古い家が少なくなっていた。昔を思い出しながら歩いていると、右前に小さな公園の入り口が見えた。

遊具も少なく何の特徴もない地味な公園だったが、桜の木が周りに植えられ、春には鮮やかに変貌する。彼女が中学生時代、たまにこの公園を抜けて家に帰ることがあったことを思い出していた。

？懐かしい？

中秋の今は、落ち葉が情緒を誘っている。悠奈は落ちている葉を踏みながら砂場を抜け、滑り台の奥にあるベンチの人影に目を向けた。

？亜希さん？

ベンチに座って、横に植えられていた桜の木を眺めている彼が目に入った。軽く髪をまとめ、ラフなジャケットにジーンズ姿の彼だったが、秋が漂うその場に馴染み、ヨーロッパ映画のワンシーンよ

うな独特の空間を作り出している。小走りにベンチの傍まで行った悠奈に、亜希はゆっくりと視線を移した。その瞳に、悠奈はふわっとしたデジャヴを感じたが、その感覚はすぐに逃げた。

「どうしてここに？」

彼女はベンチの前に立ったまま亜希に聞いた。

亜希は、その問いには答えず、黙ったまま静かに悠奈を見つめていた。再び、悠奈に沸き上がるデジャヴの感覚。目に入っている光景が何かを感じさせる。

？この感覚には前にも？

古い記憶を呼び戻そうと、悠奈がこめかみに手をあてた時、亜希が微かに笑んで手を延ばし彼女の手首を取った。

その瞬間、悠奈の脳裏に閃光のように記憶が蘇る。

「デジャヴじゃない？。あの時の？」

呆然と言葉を落とすように呟いた彼女に、

「舞うように去っていった君が印象的だった」

と、亜希は小さく笑った。

ベンチに座った亜希は、片膝を抱えると、軽く首を傾げて悠奈を見た。風に揺れた、彼の伸びた前髪の下の表情のない瞳を見た悠奈は、頭の中が過去に遡り、どこかに忘れてしまっていた他愛ない一つの出来事を思い出した。

「わたしが、あの日、傘を渡したのは亜希さんだったんだ？」

彼を見つめながら、自分の記憶を確かめるように彼女は呟いた。

？そうだ、あの日は雨桜だった？

悠奈が中学の2年の春、その日は桜が満開の見頃なのに、生憎朝から冷たい雨が降っていた。

この公園は、桜の木が植えられていることで、春の間は大勢の人が集まる。花見客のざわつきが苦手だった悠奈は、雨の日は誰もないだろうと、学校帰りにふらりと抜け道として寄ったのだった。案の定、人の気配がない公園。

？雨に打たれている桜達を独り占めできる

傘をたたくように降っている雨にも関わらず、浮いた足取りで桜から桜に蝶のように移っていた彼女は、ふと、滑り台の向こうのベンチに黒い塊のようなものがあることに気付いた。焦点を合わせると、それは黒いパーカーを頭から被って、ずぶ濡れになったままベンチに座っている人間だった。

？人？？

春の終わりの雨はまだ肌寒い。傘もささず、自分で自分を抱き締めるように前屈みに座っている姿が気になり、身動き一つしないその人物にゆっくりと近付いた。

？体調が悪いのかな？

悠奈は、ベンチの数メートル手前まで行くと、その人物の顔を覗き込んだ。全身から雨がしたり、長時間雨に打たれていたことが窺えた。背中を丸めて座っていた彼のパーカーの下には、視線を落とす、今にも倒れてしまいそうな白く青ざめた表情があった。目は開いているものの、虚ろでどこを見ているのか分からない。強く降っている雨など、全く目に入っていないようだった。

「あの？」

彼女は、ベンチの横から彼の様子を伺いつつ、自分の傘を差しかけた。

「大丈夫ですか？」

恐る恐る声をかけたが、彼は何の反応もせず、黙ったまま何も聞こえてもいないように固まっている。

悠奈はその様子に不安になり、傘を差しかけながらベンチの前に回って屈むと彼の顔を覗き込んだ。整った顔は青ざめ、瞬きさえしなかった。

「あの、大丈夫ですか？　どこか傷むの？」

言葉に反応しない彼を、本当に具合が悪いのだと心配になった悠奈は、そっと彼の腕に手を置いた。その手の冷たさに驚くと、携帯電話を取り出して、まだ学校にいるはずの担任に相談をしようと電話番号を押す。何コール目かで電話が繋がったと同時に、彼女は傘を持っていた手首に凍るような冷たさを感じた。

「きゅ。」

小さく悲鳴を上げた彼女は、自分を掴んでいるものが、目の前の彼の手だということに気付き、咄嗟に視線を向ける。そのオリーブ色の瞳は何も言わず、悠奈を見つめていた。

？なんて綺麗な瞳？

一瞬、その瞳に吸い込まれそうになる。彼女は、彼の目が誰にも言うなど言っていることを察知すると電話を切った。

「大丈夫ですか？」

反応があったことにほっとした悠奈は、彼の瞳に自分が映ったことを感じると、自然と笑顔を浮かべた。

彼は、相変わらず何も答えない。彼の、自分に関わってほしくないという気持ちを感じ取れた。

「置いてきますね」

悠奈は、にっこりと笑って傘を手渡した。そして、鞆を抱えるように持ち、水たまりを器用に飛び越えるように公園から走り去った。

詳細に思い出した10分程度の過去の些細な記憶。

悠奈は、あの日、雨の中ベンチに座っていた彼が亜希だったことを思い出した。

【7】桜の因—3

「亜希さんは、覚えていたの？」

「ああ、ずっと」

「それを知らせるため、ここに呼んだの？」

「いや、ただ、それを思い出してくれば、話が少しだけ簡潔になると思ってね？」

亜希は、ふと視線を自分の隣に向け、そこに座るよう悠奈に目で示した。

彼女は戸惑いながら静かに座ると、いつもの彼の柑橘系の香が漂ってくる。すぐ隣の彼にいないはずの存在が遥か遠くにあるように感じた。

「わたし、聞きたいことがあって」

悠奈は、亜希の横顔を見つめて呟く。

「何？」

彼は、短く言葉を返した。

「どうして、あなたの力でわたしの周りの人を操るようなことをしたのかが聞きたいの」

彼女は、亜希に特別な力があることを前提として話をはじめた。

今にも破裂しそうな心臓の動機を感じながら、彼の反応を窺った。

亜希は、一呼吸置いて、

「悠奈の存在を近くに置きたくなかったからかな？」

と、彼女の言葉に否定も肯定もせず、視線を前方に向けたまま口許に笑みを浮かべる。

「？ユキちゃんには、あなたとわたしとを繋ぐ役割をさせた。巧くんには、わたしがあなたのマンションに住むきっかけを作らせた。母には、あなたから離れることを止めさせた。ということよね？」

悠奈は、声に出しながら自分で確認するように言って、また言葉を続ける。

「巧くんは、頭に響くあなたの声に操られて火炎瓶を投げ入れたと言っていた。あなたの力は、人を自在に操る力だと思っていいいの？」

彼女の問いかけに、亜希は肩をすくめてみせたが、否定はしなかった。

「何故、そういう方法でわたしを傍に置きたいと思ったのが解らない？」

彼女には、亜希が考えていることが全く解らなかった。傍に居てほしいと思うのであれば、言葉で伝えればいいだけの話ではないだろうか。悠奈は、彼を見つめて言葉を待った。

「？今年に入って、悠奈をキャンパスで見つけた。その時は、俺と関わることは悠奈にとってプラスじゃないことは分かってたから、

離れた場所から見守るくらいの気持ちでいるつもりだった。でも、君は、俺の気配に気付いただろ？」

悠奈は、彼の言葉に、思い当たるところがあった。春頃、頻繁に感じていた視線を思い出す。今考えると、あれは亜希の気配だったのだと理屈ではなく感覚で納得できた。

「あの視線と目眩？？」

そう聞いた彼女に、亜希は何も言わず微笑んだ。

「だから、俺を感じた君に、自分の存在を気付かせたくて仕方なくなった。気付かせたら、今度は傍に置きたくなった。傲慢だけだな」

ふっと笑う彼の表情に、陰りが見えた。

「見守る？傍に置きたいって？」

「あの雨の日、俺の心を救ってくれたのが悠奈だった。君が察するように、俺は人とは違う所がある。だからこそ君の知らない所で見守っているだけにしようと思ってた。けど、君はあの日と変わらず今も真っ白で？。その癒しが欲しくて傍に置きたくなった」

「？分からない。あの日、わたしが何かしたの？亜希さんを救ったつもりなんてないし？」

「分からなくていい。ただ、近くに居てほしい。悠奈には、すぐ近くで普通に笑って暮らしてほしい」

亜希は、悠奈を見つめて静かに微笑む。

「普通に笑ってって？」

「ああ、普通に。君が何をしようと干渉しない。誰かと結婚して子供ができて、傍で笑って暮らしていてほしい。何かあれば、必ず守るから」

悠奈は、亜希の言葉の意図を理解しかねて混乱する。

「？それは、亜希さんにとって、どういう意味があるの？ 家族のようについていう意味？」

「意味なんてない。傍にいてくれればいい」

彼は、変わらず穏やかな表情で言った。

「分からない。宏樹さんのように友達として？ それとも妹のように？」

亜希の抽象的な言葉の表現の捉え方が解らず、真意を読めずにいた悠奈は彼に食い下がった。

悠奈の質問に、亜希は一瞬遠い目をする、

「宏樹ね？ そうだな。彼のようにかな」

そう言って、膝の上で組んだ手の上に頭を凭れさせ、彼女を斜に見た。その薄茶の美しい瞳に、悠奈は少し威圧的なものが潜んでいることを感じる。

「?モノじゃない」

悠奈は、脱力したように呟いた。

「わたしは、モノじゃないわ。どうして、そんなあなたの我が儘な思いに答える必要があるの?そんなことのために、わたしの周りを惑わせ苦しめたの?」

彼女は悲し気に問う。亜希の未知な力も行動も、そして思考も理解できない。ただ隣人のように傍に居てほしいという願いに、悠奈は戸惑いと、そして胸を突き刺されるような痛みを感じていた。

「宏樹は、友達としての俺に何の疑問も持たず傍に居てくれてるんだけどな?。誤算は、悠奈が俺の力に気付く程敏感だったってことか?。女の子はもう少し鈍いほうが可愛い」

亜希は、憂いを映した瞳で笑んだが、その瞳には彼の本当の感情が見えない。

?人形じゃない?

「わたしは、あなたの人形じゃない」

激しい憤りを感じた彼女は、亜希の瞳を強く見返した。彼は、彼女の拒否を了解したかのように、ふっと笑って視線を落としベンチから立ち上がる。

「解ってる」

変わらない優しい瞳で彼女を見下ろした彼は、背を向けてゆっくり

りと立ち去る。悠奈は、その背中を見つめながら、自分自身に言い聞かせていた。

？二度と関わってはいけない

自分のために、彼から離れなければいけない。これ以上近付くことは、自分自身を壊すことになる。胸を締め付ける理由の解らない痛みと共に、彼女は決心を固めていた。

【7】桜の因—4

吹く風が冷たさを帯び、透き通る空気が冬の気配をもたらしてくる。

悠奈が、亜希のマンションから以前住んでいたマンションに戻って1ヶ月が過ぎようとしていた。亜希と会ってからの半年弱の出来事を全て忘れたと思っていた彼女は、思い出す時間を作らないように毎日を忙しく過ごしていた。だが、故意に忘れようとする度、何倍にもなって色々な事が思い出されてしまう。全てが過去になってしまいうまで、しばらく時間がかかりそうだった。

そんな中、巧は現在保釈されているようだった。拘置所で会って以来顔を見ていないが、次は裁判所で会うことになるだろう。悠奈の彼への気持の中で、すでに愛情というものはなかったものの、複雑な同情と責任を感じていた。

？わたしが亜希さんと出逢わなければ？

今更、彼と出逢わなかったことには出来ないが、その出逢いが巧の運命を変えてしまったことには変わらない。

？亜希さんはどうしているんだろう？

悠奈は、また無意識に亜希のことを考えている自分に苦笑いすると、西向きの窓から太陽がほのかに赤みを刺して傾きかけているのを見てバルコニーに出た。朝に干した洗濯物を籠に取り入れ、最後の1枚のタオルを取った時、ジーンズのポケットの中で携帯がバイブしていることに気付く。籠を持って部屋に戻り電話を取り出すと、表示された意外なメールの送り主に目を止めた。

？宏樹さん？

彼のアドレスを知ってはいたが、メールが来ることははじめてだ。少し戸惑いを感じながらも文面を読みはじめる。

『悠奈ちゃん、元気？ 急なんだけど、話があるんだ。亜希のこと。ちょっと会えないかな？』

飾り気のない彼の性格がそのまま文面に出ている。悠奈は、考え込むように携帯を見つめた。

？亜希さんのこと？？

彼女は自分の気持ちが波立ったことに気付いた。彼のことを考えないように我慢してきた毎日の積み重ねが簡単に崩れはじめるような気がしていた。

『亜希さんのことって、何かあったの？』

悠奈は、宏樹への返信を打とうとしたが、途中でそれを消去する。ここで宏樹に会って何かしらの話を聞いてしまうと、全てを忘れると決断した想いが大きく揺らいでしまうと感じたからだった。

洗濯物をたたみながらも、宏樹のメールがずっと気になっていた。どうしても、その文言が頭の中から離れようとしなない。彼女は、リビングのテレビをつけてボリュームを上げると、キッチンで無心に玉葱をみじん切りにする。頭の中を空にして夕飯の用意をはじめていたが、1時間もしないうちに終わってしまい、何もすることがなくなった。

？やっぱりダメだ？

宏樹のメールが気になって落ち着かなかった悠奈は、悩んだ挙げ句に彼に直接電話をした。

ワンコールで出た彼は、

「悠奈ちゃん、5分だけ付き合って。30分後に悠奈ちゃんのマンションの下に行くから」

とだけ言うと、彼女の返事も聞かずにすぐに電話を切った。

悠奈は、思い立った時に即行動に移す宏樹の性格を思い出して苦笑いする。相変わらずの彼だったが、その電話の声には普段の明るい彼にはない陰りがあったように感じた。

20分程経ってから部屋を出た悠奈が、マンションの玄関の前で彼を待っていると、見覚えのある車が脇に止まる。

「悠奈ちゃん、乗って」

窓から顔を出した宏樹に促されるままに助手席に乗ると、彼は邪魔にならない場所に車を移動させた。

「ごめん、いきなり来て。時間とらせないから」

いつもの笑顔が消えていた彼は、真剣な表情で呟いた。

悠奈は、今までに見たことのない宏樹の表情が気になり、彼をじっと見つめる。

「どうしたの？ 亜希さんのことって？」

「ああ？」

一息、間を置いた彼は、悠奈を見つめ、

「あいつを助けてやってほしいんだ」

懇願するような瞳で呟いた。彼女は、彼の言葉に眉をしかめると、え？と聞き返す。

「1週間前かな。亜希の妹が亡くなったらしくてね」

「？妹さんって、植物状態だって言ってた人？」

「そう。亜希、相当ヤバいと思うんだ。妹を事故させたのは自分だ
って思ってるようだし？」

宏樹は、彼らしからぬ険しい表情をつくると視線を落とした。

「亜希さんは、妹さんの事故に関わってたの？」

「さあ？。はっきりしたことは分からないんだ。でも、以前琴美ちゃん
が事故った時の亜希の様子を思い出すと、またあんな風になる
んじゃないかって心配になって？」

宏樹は眉間に皺を寄せながら言葉を並べていた。いつも明るい彼
を見てきた悠奈は、別人が隣に座っているような錯覚を起こす。

「でさ、悠奈ちゃんが今、亜希と連絡をとっていないことは分かっ
てる。何があったのかは聞かない。でも、助けてやってほしい。亜
希を。君じゃなきゃダメだと思うんだ」

宏樹は真直ぐに彼女に視線を向けた。彼の言葉も気持ちも、全て
が純粹なものであることを感じた悠奈は、苦渋の表情を作る。

「ごめんなさい。わたし、亜希さんを助けられない？。彼には留美さんがいるから大丈夫よ」

「留美じゃダメなんだ。俺もね。君じゃないと」

「？分からない。混乱させないで。どうして、わたしなの？ わたしに何をしろって言うの？」

悠奈は、せつな気に言って頭を振った。

「悠奈ちゃん、君は亜希にとって特別なんだ。やつと長く付き合ってきた俺には分かる。今だけでいいから、傍に居てやってほしい」

彼の強い瞳が、悠奈の亜希への壁を叩き破ろうとしていたが、彼女は亜希に対してどう対応すればいいのか分からなかった。宏樹や亜希が言うように傍に居れば、それでいいのだろうか。ただ傍にいれば？。

ためらいながら視線を落とした彼女を見た宏樹は、労るように優しく声をかけた。

「悠奈ちゃんだって、亜希のこと、好きなんだろう？」

「わたし？？」

彼の言葉に、悠奈は目を見張り、他人事のように宏樹を見つめた。

「え？ 違う？ ってことないよな。はじめから亜希のこと好きだったよな？」

「？そうなの？」

「そうなのって、そうだろ」

宏樹は、可笑しそうに声を上げて笑った。

悠奈は、亜希を特別な存在と感じ、色々な意味で惹かれていた自覚はあったが、彼を自分とは違う世界にいる人物のように思い込んでいた。近くに居るのに、まるで別の空間に居るように手が届かない存在。そういう距離感で彼を見ていたのだ。その上、友達のユキが想っている相手だということもあり、好きだという身近な感情を実感することを避けていたのかもしれない。

「そう？なんだ」

彼女は、今やっと自分の本当の気持ちに気付いたように納得する。

？わたし、亜希さんが好きなんだ？

そう心の中で呟いた悠奈は、無意識に抱え持っていた難問が解けたような爽快感を味わった。

？だから、宏樹さんのように、友達として傍に居てほしいって言われた時、すごく辛かったんだ？。

「変なコだな」

宏樹は不思議そうに悠奈を見た。

悠奈は可笑しそうに肩を揺らせて笑うと、首をかしげている宏樹を見つめる。

「ありがとう。宏樹さん」

亜希を助けて欲しいと言われた悠奈は、彼のことが気掛かりで、すぐにでも逢いに行きたいと思っていた。それは、彼に対して愛情があるからだというのを宏樹の言葉で気付かされ、たった今、自分自身の中で認められたのだ。

「わたし、亜希さんの所に逢いに行く」

そう言った彼女の声は、晴れやかに透き通っていた。

【7】桜の因—5

悠奈は、駅の裏側の細い路地を入ったところにある、年代を感じる煉瓦造りの建物の前に建っていた。地下へ降りる階段の横には、J A Z Z B A R F と書かれたネオンサインが置かれている。宏樹に教えてもらった亜希のバイト先だった。

宏樹の、亜希を助けてほしいという言葉に背中を押されてきたものの、彼と何を話せばいいのか、まるで見当はつかなかった。ただ、逢いたいという気持ちだけが、彼女を動かす原動力となっていた。細く狭い階段を地下に降り、微かに洩れていたサックスの音を耳にする。薄暗い廊下に、間接照明で浮かび上がる重厚な木の扉を開けると、急に大きくなったサックスの音に紛れて店員の声が聞こえてきた。

「いらっしゃいませ」

黒いスーツで出迎えた店員は、丁寧なお辞儀をしてくる。

彼女がいる場所からは、前方にテーブル席が5席程置かれているスペースが見えるだけで、店内全てを見渡すことができない。だが、外観からは想像のつかない格式の高そうな内装に、悠奈は自分のジーンズとニットという軽装を後悔した。

「失礼ですが、御予約はお済みでしょうか？」

「あ、いえ？」

「そうですか」

彼は、残念そうに眉を下げると、

「今日は特別なイベントがありまして、御予約がないとお席が御用意できなくなっております。申し訳ありません」

と、腰を低くして謝った。

「あの、違うんです。こちらで堂藤さんて方がアルバイトをしていると聞いて、少しだけお会いできたらと？」

悠奈は、客ではないことを説明したが、彼は「あゝ、今は？」と、更に困った表情を作る。

「その彼女、中に入れてあげて」

不意に店の奥から飛んできた聞き覚えのある声に、悠奈は自然と視線を移した。

「？留美さん」

そこには、髪を美しくまとめあげ、朱色の艶やかな絹のドレスを着て立っていた留美の姿がある。

「わたしの友達なの。席がないならいいわ。一緒に座るから。だから入れてあげて」

そう言った留美に、黒スーツの店員は頷くと、どうぞ、と悠奈を中にすすめた。

悠奈は留美の傍まで行くと、ペコリと頭を下げた。

「こちらへいらっしやい」

留美は、悠奈についてくるようにと目で合図して前を進む。店内が見渡せる場所まで進むと、その広さに驚かされた。正面にステージがあり、右にバーカウンターがある、そして、ゆったりとしたソファ席が20席程並び、更にその後ろにテーブル席が10席程並んでいた。そのほとんどが客で埋まっている。

今はライブの合間なのだろうか、客達は、思い思いに雑談に花を咲かせていた。

ステージから一番後ろのソファ席に留美は座ると、悠奈を前に座るように示す。小さく会釈をして彼女の前に座った悠奈は、目の前の大きな瞳に、怒りの感情が映っていることを感じていた。

「今日はどうしてここに？ わたしの歌でも聞きにきてくれたのかしら」

留美は、整った顔に、美しく冷たい微笑みを浮かべた。

「いえ？。ごめんなさい、留美さんが、ここで歌っていることは知らなかったの？。宏樹さんに、亜希さんがバイトをしている場所だと聞いて来たの」

「宏樹が教えたのね？。そんなことより、亜希から離れてって言ったわよね。言ってる意味が分からなかった？」

「いえ。でも、逢いたいと思ったから。宏樹さんに亜希さんを助けてほしいと言われたわ。傍にいてあげてって言われた。だから来たの」

静かに落ち着いた表情で答えていた悠奈を、留美の煮え立ちそうな怒りの瞳が貫いていた。その瞳は一瞬燃え上がったように激しく

なったが、すぐに醒めた色を宿した。

「は？。何言ってるの、あなたたちは」

怒りを通り越し、呆れたように笑った留美は、長い足を組み換えると言葉を続けた。

「彼を助ける？何も知らないくせに」

侮蔑したような瞳で悠奈を見下す。

「それなら、亜希さんのこと教えて。あの人に悲しみが見えるのは何故？宏樹さんは、妹さんを亡くした今の彼が危ないと言ってたわ。どうして？亜希さんの特別な力が関係しているの？」

その悠奈の言葉に、留美は大きく目を見開いて驚愕の表情をつくる。

「あなた？何故彼のパワーのことを知ってるの？」

「亜希さんに特別な能力があることに気付いたから？。彼に直接そのことを確かめたわ。彼は能力のことを肯定はしたけれど、詳しいことは聞けなかった？」

彼女は、変わらず落ち着いた調子で、瞬きもせずに留美を見つめて話していた。

留美は、観念したように小さくため息をつく、鞆の中からシガレットケースを取り出し、煙草に火をつけ、ゆっくりと口を開いた。

「？聞いたなら仕方ないわね。そうね、彼は人の心を操ろうと思え

ば操れる。あなたが言うように、特別な能力だわね。彼は病気だと言ってるけれど」

「病気？」

「そう。彼とわたしの祖父が、亜希のように強力ではないけれど似た力を持っていたの。その祖父からの病的な遺伝子が悪化したケースだって、亜希は皮肉って言ってたわ。わたしも少しだけその力があって、彼がパワーを使った時は確実に分かる。波のように伝わってくるから？」

悠奈にとって、留美の話は、非現実的なようで現実的でもあった。彼等の能力は、一般的には超能力という胡散臭いものかもしれない。だが、病気、遺伝子のトラブルと言われれば、一気に現実味を帯びてくる。

「その力は、彼の妹さんの事故と関係してるの？だから、亜希さんは苦しんでるの？」

「？さあ。それは直接聞いてみれば？わたしが答えることじゃない。ただ、あのパワーがなければ、彼は周りの薄汚れた情に気付くことはなく、幸せに生きてこられたことは確実ね？」

留美のふっくらとした唇と煙草が、妙にアンバランスにうつる。煙が彼女の周りを幻想的にまもっていた。

「薄汚れた情？って？」

悠奈は、その彼女の唇を見つめながら聞いていた。

「少し考えれば分かることよ。彼は財力も魅力も才能もある。そんな彼に近づく人間は、彼を性の対象として意識しているか、損得勘定を考えているか。どちらかなのよ。人の心を察することが出来る彼は、そんな周りの人間の心に押しつぶされそうだったはず？。悲しいことにその中にはわたしも入ってるわ。唯一の例外が宏樹だったの」

例外が宏樹。何の見返りも期待せず、亜希を大切に想っているということだ。悠奈は、亜希が宏樹のように傍に居てほしいと言っていた理由が、たった今理解できたような気がした。

「でも、宏樹さんだけじゃなく、亜希さんの家族だって、彼に愛情はあったでしょ？」

「家族ね？。母親は亜希のパワーを恐れて逃げ出したわ。今の父親は義理の父親だし。実父は彼が産まれる直前に亡くなったから。だから、彼にとって家族なんて形だけなのよ」

「亡くなった妹さんは？」

「そうね？彼女は亜希を大切に思っていたでしょうね？。でも、彼女はとても弱かった」

留美は、過去を思い出しているかのような遠い目をして、瞳を陰らせる。

「悠奈ちゃん、あなたはとても敏感だし、確かに真っ白に亜希を包んであげられる。だから、異性としての愛情だけじゃなく、それ以上、人としての愛情を向けてくれるあなたを、彼が必要としていることは分かる。？でもダメ。あなたが、きつと、もっと亜希に惹か

れていくことになる。そうすると、二人とも奈落の底まで落ちてしまおうわ」

留美の瞳には底知れない絶望が見える。

？一体、この人は亜希さんの何を知って、こういう目をするのだろうか

悠奈は、留美の瞳に映る闇がとても気になった。

「とにかく、今すぐ帰ってちょうだい。もう亜希には二度と会わないで」

強く命令するように留美は言う。悠奈は、その言葉にゆっくりと首を振ると、

「ごめんなさい。わたし、亜希さんと話したい」

はつきりとした言葉で拒否を告げた。

留美は瞬きもせずに悠奈を見つめ、口許に笑みを浮かべた。

「そう？それがこの先、あなたを破滅させることになってもいいのね？」

彼女は微かに笑うと、怒りや悲しみを超えた表情をつくって聞いた。

悠奈は、冷静な顔でこくりと頷く。

「わたし、亜希さんが好きだから」

そして、幸せそうに鮮やかに笑った。

悠奈は、自分でこういう素直な表現ができることに驚きを感じていた。宏樹のおかげで自分自身に正直になれたのだろうか。宏樹は、彼の持ち前の純粹さで、周りを素直にさせてしまう力があつた。これまで気付けなかった彼女自身がそこにいた。

留美は、そんな悠奈に、氷のように冷たい視線で無言の圧力をかけていたが、唇の端を上げると席を立つ。

「ごゆっくり」

感情のこもらない言葉でそれだけ言うと、おもむろに席から離れて行った。

？破滅

常に予想してきたことだった。彼に出会ってからずっと感じてきたことだ。どこかで危険を察知していた。亜希という存在が大きくなるにつれ、その警鐘は常に鳴り響いていた。そして、その度、彼から中途半端に逃げてきた。

？もう、逃げない。破滅しようとも？

残された悠奈は、亜希を探すために席を立った。

【8】深淵へ―1

悠奈が席を立ったと同時に、店員がドリンクを運んできた。

「堂藤から、この席で待っててもらおうようにとの伝言です」

店員は彼女の前にドリンクを置くと、にっこり笑う。

悠奈は、そのジントニックスを目にすると、また席に座りなおして両手でグラスを持った。

？亜希さんはどこにいるんだろう？

店内を見回してみるが、彼らしい姿は見当たらない。店の時計は、21時少し前を指している。悠奈が所在無げにグラスに口を付けていると、不意に明かりが落ち、ステージ周りが騒がしくなった。ところどころで黄色い声が飛んでいた。ジャズバーにはふさわしくない声に、彼女は違和感を感じる。改めて客層を観察すると、圧倒的に若い女性が多く、花束を抱えている人が目についた。

？あれ？亜希さんのバイトってもしかしたら？

ステージ上に現れたプレイヤー達は、それぞれに自分の場所に着いている。ステージの上には、ベースを真ん中に、左後ろにピアノ、右後ろにドラムという形で楽器が設置されていた。

「え？」

悠奈は、その正面に向かって斜に置かれたピアノの前に座った、見覚えある顔に思わず声を漏らした。

？亜希さん？

白いシャツを着て、ピアノの前に楽譜を置いていた彼は、ふと客席に視線を向けて微笑んだ。沸き上がる女性の歓声。彼にスポットライトが当たり、ピアノソロからはじまる曲。ステージでピアノを弾いている彼は、生命力に溢れ、喜怒哀楽の全ての感情をそのまま音で表現しているように見えた。ライトに照らされて、延び延びと演奏する亜希の姿を、目に焼きつけるように見つめていた悠奈は、自分の気持ちがどんどん高揚してきていることに気付いた。

？やっぱりすごい？。彼は天才なのかもしれない？。

クラブで踊っていた彼を見た時の非凡人さを再び感じさせられた。彼から感じるエネルギーに惹き付けられ、周りは目が離せなくなる。ずっと、その感性を感じていたくなるのだった。

5曲程の演奏が終わると、拍手が湧き起こり、演奏者たちが笑顔で一礼する。客席からは、『亜希』という声が飛んでいた。他の演奏者がバックステージに戻る中、亜希は、客席に降りて挨拶にまわっている。店員が言っていた特別なイベントとは、亜希がこの店でプレイする最後の日のライブだったのだ。

彼は、抱えきれない程の花束を持っていた。悠奈が座っていた席にたどり着くまでに、何度も客に捕まり、握手と写メをねだられていた。

「すごい人気ね」

悠奈は、黄色い声をぐぐり抜けてきた亜希に笑いかけた。

「おかげさまで」

彼は肩をすくめると苦笑いし、傍にいた店員に花束を渡すと悠奈の前のソファに座った。座り方一つをとっても、優雅で倅がない。微かに漂う、いつものオリエンタルな柑橘系の香り。変わらない深くて美しい瞳が前にあった。

「亜希さんて、ピアノ弾く人なんだ」

「少しね。子供の頃、母親に教わったみたいだ。あまり覚えてないけどね」

「少し」で、ここまで人を惹き付けるプレイができるのは、やはり生まれ持った才能だろう。亜希と話している間も、悠奈は、周りの女性客からの妬みの視線を身体中に感じ、彼の魅力を再認識させられた。

彼は、全てを手に入れているように見える。天性の才能に溢れ、人々を魅了し惹き付ける。彼の例の能力は、その代償なのかもしれないとさえ思えた。人間の見なくていい部分まで見てしまい、それを操る空しさに苦しむ。それ程の苦しみが代償になり得る、秀でた才能を持っているということかもしれない。

「宏樹に、この店を聞いて来たのか？」

亜希は、店員が運んできたウォッカのグラスを受け取りながら悠奈に聞いた。

「？宏樹さん、亜希さんのこと心配してた」

悠奈は、亜希の顔を数秒見つめる。

「?心配?」

「そう。わたしに、あなたを助けてほしいって」

悠奈の言葉に、亜希は不思議そうな表情をつくると、可笑しそうに笑った。

「何のことだ?」

「?妹さんが亡くなって、?辛いだろうからって」

彼女は、少しためらいながら言葉を口にした。

「あ、ね。妹は、いっとうなってもおかしくなかったんだ。だから大丈夫。心配なくていい」

微笑ってそう言った彼は、長い指でグラスに刺していたライムをとって、ウオッカの中に絞った。

悠奈は、彼の瞳に一瞬差し込んだ闇を見つけると、

「亜希さんの瞳には、いつも悲しみが感じられる?」

と、せつな気に目を細めて言う。

亜希は、グラスを置いて、テーブルの上に腕を組んで首を傾げ、話の続きをどうぞと言わんばかりに優しい瞳で彼女を見た。

「宏樹さんに、亜希さんを助けられるのはわたししかいないって言われたわ。わたしは、あなたを助けたい。あなたの悲しみを知っていたいの」

「？宏樹が何を言ったのかは知らないが」

亜希は、眼に暗い影を落とすと、胸ポケットから煙草を出し、髪をかきあげてけだるく火をつける。

「もし、本気で他人の悲しみを知りたいなんて思ってるなら？随分、無責任な話だな」

「無責任？」

「ああ。他人の傷なんて聞いてどうする？大概、「そんな辛いことあったんだ。カワイソウ」で、終わりだろ」

立ち上る煙を見つめたまま、口許に笑みを浮かべて亜希は言った。彼は、周りのものを全てシャットアウトしたように、煙を通して遠くを見つめている。何も返す言葉が思い付かなかった悠奈は、悲し気に亜希の瞳を見つめていた。二人にしばらくの沈黙が続いた後、亜希はウォッカを一口だけ飲んで、椅子から軽く腰を浮かせて立ち上がろうとした。

「待って！」

悠奈は、慌てて彼のシャツの裾を掴む。

意外そうな表情をした彼は、椅子に座りなおすと、小さいため息と共に苦笑いした。

「なに？ まだ話すことある？」

「わたしは？」

悠奈は、シャツの裾を離すと、言葉を詰まらせながら話した。

「わたしは、どうすれば、あなたのその瞳の悲しみは消えるのかが知りたいの？」

「？悠奈は、俺の傍に居ないことを選んだ。今更、どうしてそんなことを知りたい？」

静かに彼女を眺めながら、彼は灰皿を引き寄せ、煙草を押し付ける。

「わたしは？」

？わたしは、あなたが好きだから？

悠奈は、言いかけたその言葉を途中で切った。

「言いかけたことをやめない。悠奈の悪い癖だ」

亜希は、悠奈の瞳を掴んだまま、

「わたしは？ 何？」

と、誘うように次の言葉を促す。

「？わたしは」

彼女は、気持ちを言葉に出来ず、戸惑いながら視線を落とした。
亜希は、そんな彼女の表情を黙ったまま見つめていたが、何かに気付いたように口を開いた。

「? ああ、俺のこと、好きなのか?」

ソファに深く身を沈めた彼は、悠奈の顔を覗き込んでからかうように呟いて笑う。

「好きなんだろう」

亜希の、魅惑的な瞳の中には、微かに自嘲の色が含まれていた。悠奈は、彼の表情に違和感を感じた。

「出るぞ」

彼は、ソファから立ち上がると、悠奈の腕を掴んで強引に立たせた。

「え、どこに?」

急に引っ張られた悠奈は、慌てて鞆を持つと、亜希の顔を見上げる。彼は、彼女に視線を向けることもせず、腕を持ったまま後ろのテーブル席を抜け、入口の方向に歩いていった。

【8】深淵へ―2

「あ、堂藤さん、次のステージは？」

キャッシャーにいた店員が慌てたように声をかけてきたが、亜希は無言で笑うと、扉を開けて悠奈を外に連れ出した。彼女は、ビルの入口とは逆の方向へと進む彼に引っ張られ、転びそうになりながら足を運んでいた。

「亜希さん、どこへ行くの？」

声をかけるが、彼からの返事はない。

廊下を突き当たると裏口へと通じる階段があり、亜希は慣れた場所のように悠奈の腕を取ったまま上がっていく。いつもと違う彼の雰囲気不安になった彼女は、扉から外へ出たところで掴まれていた腕をふりほどいた。

「亜希さん、？変だよ」

少し怯えた表情で、数歩前にいた亜希を見上げる。電灯のうす青い光の下で、不安そうな視線を投げている悠奈を見下ろした彼の表情には何も映っていないかった。

彼は口許で笑むと、いきなり悠奈の腰に手を回して強引に抱き寄せ、彼女の耳に顔を近付ける。

「俺のこと好きなんだろ？ 今から、二人きりになろう」

低い声で甘く囁き、悠奈の首筋に唇を添わせた。

彼の豹変振りに驚いた彼女は、咄嗟に飛び退くように後ずさる。

「亜希さん？　どうしたの？」

「？は？　好きなんだろう？」

不思議そうな顔をした亜希は、再び悠奈の手をとると、冷たく微笑んだ。

動揺していた悠奈は、彼らしくない行動に困惑した表情で立ち尽くす。

「俺が好きなんだろう？　なら、ついてこい」

悠奈の手をきつく掴んでいた亜希は、片手をビルの壁に付くと、苦い笑みを浮かべ悠奈を見下ろした。その瞳には一切の感情が見られず、美しいメタルのように冷たい。彼の気持ちが読めずにいた悠奈だったが、その瞳に、絶対的な拒絶の色が含まれていることを感じ取る。今の彼の態度は、わざと自分から彼女を離させるためのものだということを悟った。

「？そっか。わたしが、うつとうしいんだ。色々と詮索するようなことを言うわたしのことが。留美さんにも、あなたから離れろって言われてる。そういうこと？　もう近付くなって？」

悠奈は、悲しい瞳で息を詰めるように彼を見た。

「なんだそれ。相手してやるって言ってるのに？。その気がないなら、さっさと帰れ」

悠奈の手を離した亜希は、ビルの壁に凭れて腕を組み、無機質な声で冷ややかに言った。

悠奈は、しばらく瞬きもせずに色のない亜希の瞳を見つめていたが、やはり彼の表情には何の感情も見出せない。悲しみとも苦しみとも判別のつかない痛みが、彼女の心に沸き上がった。

「分かりました?。」

涙が溢れ出てくることを感じた悠奈は、急いで彼の前を横切り歩き出す。

「痴話喧嘩か。醜いな?」

悠奈が足をはやめようとした時、ふと前方から聞こえてくる声があった。その声の主は、闇の中からふらりと街灯の光の下に出て、暗い瞳で薄ら笑いを浮かべて立っている。

彼女は、目の前の人物に目を見張った。すぐ近くに居たにもかかわらず、彼の黒い服が闇と同化し、今まで気配を感じさせずにいたのだ。

「悠奈、元気そうだな」

「巧?くん? どうして?」

その男は、隅内巧だった。保釈中だと聞いていた悠奈だったが、まさかこんな場所で会うとは予想がつかないでいた。目の前の彼は、拘置所で会った時の憔悴しきった彼とは別人のように、敵意の込めた眼を向け、全身から立ち上るような殺気を放っている。

「どうして?か。保釈中で暇な時に、ちょっと耳に入ってきたことがあってさ?」

口の端を上げて顔を歪めた彼は、数歩前に歩み出た。異様な興奮を抑えたようなその表情に、悠奈は、血が頭から下がっていくような不安を感じた。

「悠奈、お前、あいつとできてたんだな」

巧は吐き捨てるように言うと、悠奈の数メートル後方にいた亜希を顎で示し、ゆっくりとした足取りで彼女に近付いた。彼女は後ろに下がろうとしたが、彼の視線に縛られたように足が竦んで動けずにいる。

「俺が馬鹿だった。お前ら、俺が邪魔になったんだろ。だから、あんなワケの分からないトリックで俺を？」

怒りを抱えた重い声で言うと、巧は悠奈の上腕を強く掴んだ。

「ち？違うわ」

「おかげで、俺の人生めっちゃだ？。どうしてくれる？」

悠奈が、彼の異様な気迫に押され、何の言葉も返すことができずに固まっていた時、後ろにいた亜希が二人の会話に自然に入った。

「待てよ。俺は関係ないからな？。俺が、お前の女とできてる？。それ程、不自由してない」

彼は、挑発するかのような言葉を投げ、巧の怒りを自分にそらせながら二人のすぐ脇まで近付いて来た。

「とぼっちりは喰いたくないんでね？」

巧に皮肉めいた笑みを向けつつ、悠奈を掴む巧の腕に手を延ばす。

「触るな！」

途端、巧は悠奈を掴んだまま後ろに除けた。いきなり引っ張られてよろめいた悠奈は、彼に後ろから首に手を回され、羽交い締めにされた。

「近付くな？」

興奮していた巧は、彼女をひきずるように数歩下がって、右手を胸元に入れる。

頭の上から降りてくる彼の重い声。悠奈は、目の端に映った光る物を確認すると、尋常ではない不安を感じた。

「?どう、したい？」

亜希の緊張感のある静かな声が響く。

顔を強張らせながら暗い瞳で笑っている巧の右手には、刃渡り20センチ程のナイフが光っていた。十分に人を刺し殺すことができるナイフの長さは、周りを十分に緊張させ得るものだった。

時間が止まったようなはりつめた空間の中を、突如、3人の後方でビルの扉が開く音が聞こえる。

「亜希、探したわ。フィナーレはじまるわよ」

弾むような声とヒールの音が早足に近付いてきたかと思うと、亜希の後ろで立ち止まった。

彼の脇から顔を覗かせた留美は、前の二人に目を向けると、目を

見張らせて声を無くす。

「下がれ」

亜希の低い声に、彼女は黙って足音を消すように数歩下がった。
巧は、そんな彼女など目に入らないかのように、興奮に震える声で、

「俺の元の生活を返せ」

と、亜希を睨んだ。

勢いよく差し出された手にはナイフが鈍く光っている。
悠奈は、首に回された巧の腕を引き離そうと何度ももがいたが、その度にきつく締め上げられた。

「ナイフを下げる。罪が重くなるぞ」

亜希は、落ち着いた調子で冷ややかに命令する。

「うるさい！」

巧は呼吸を荒げて叫ぶと、ナイフを悠奈の顔に向け、更に数歩下がった。

【8】深淵へ―3

「この女と一緒に警察に来い。自分が犯人だって証明しろ」

「行ってもいいが？。こんな状態で警察に行って、俺が犯人だと言ったとしても、誰が信じる？ 捕まるのは誰だろうな」

相変わらず涼しい顔で挑発するように言葉を投げる亜希に、巧は憤りが増したかのように低く唸った。彼の額には、汗が流れ、腕は小刻みに震えている。眼には、今ナイフを構えている自分自身の行動への恐怖の色が映っていた。亜希は、そんな巧の隙を探すように、無言で様子を伺っている。

数秒の沈黙の間、巧の力が弛んだ一瞬を見つけた悠奈は、咄嗟に、首に回された腕に思い切り噛み付いた。

「っっ?!」

言葉にならない叫びをあげた巧は、悠奈に回した腕を引っ込める。

「悠奈！ 来い！」

亜希の声が響く。

悠奈は、走り出そうとしたが、すぐに巧に髪を掴まれ、勢いよく頭から引き戻された。

「大人しくしろ！」

巧は、ナイフを持った手で、悠奈の顔の上から拳を振り降ろすように殴る。微かに刃が頬をかすめ、血が滲んだ。彼女は、目のくら

むような衝撃と痛みに抵抗できず、再び彼に羽交い締めにされた。

亜希は、憤りを抑えた無表情な瞳で、巧に視線を向ける。

「堂藤？取引だ」

巧は、荒い息遣いでにやりと笑った。

「これから、警察に行って全部話してこい。もし逃げたら、こいつを殺してやる」

彼の目は血走り、攻撃的な色に染まっていた。

亜希は、巧とは真逆に、緊張の中にも、落ち着いた余裕の微笑みを浮かべている。

「ヘタレなあんたに、人を殺すなんて無理なんだよ。できるものならやってみろ」

「なんだと？」

巧は、怒りに震え上がり、悠奈を離して突き飛ばすと、ナイフを両手に持ちかえて亜希に向けて身構える。

壁に当たってその場に崩れた悠奈は、朦朧としながらも、素手で巧と向き合っている亜希が気掛かりで、彼に視線を向けた。

亜希は冷たく冴えた顔つきで巧を見返し、一歩前に足を踏み出した。

「来いよ」

彼は、笑みを浮かべた唇を軽く噛んだ。冷たい風が彼の髪を揺らせる。

「殺してやる！」

巧は低くそう叫ぶと、ぎらついた眼で獣のようなうなり声をあげ、跳躍するように亜希に飛びかかった。

亜希は、巧の動きを読むようにわずかに身を翻して後方に回り、彼の腕を後ろに捻るとナイフを叩き落とす。

「だから、無理だって言ってるんだろ？」

亜希は、苦しそうに身を振っている巧の腕をあっさりと離し、小馬鹿にしたように呟いた。

屈辱的な行為に呻き声を上げた巧は、亜希に振り返りざまに殴り掛かる。だが、その手は亜希の顔のすぐ横をかすり、巧の目の前にあるメタルのような瞳が、彼を冷たく貫いていた。巧は、血走る目で亜希を睨み返したが、すぐに虚ろな表情になり、彼の瞳に吸い込まれていくように脱力した。

「あ？亜希さん？」

よろめきながらも、壁を頼りに立ち上がった悠奈は、亜希の瞳に釘付けになっていた。

？この瞳？

身体に絡まる、重い空気と目眩を感じた彼女は、亜希の瞳から目を離さなかった。

？そう、この瞳だった？

無言で、巧を見つめ続けていた亜希の瞳は、グレーがかって発色していた。美しく凍るような無表情の中に、深い闇が感じられる瞳だけが生命力を感じさせる。

悠奈は、吐き気を伴う目眩を感じ、時間の感覚が不正確になった。耐えられずに頭を下げると、壁に全身を寄り掛ける。数秒、数分、数十分、時の流れを計れず、まるで異次元の空間にいるような感覚を過ぎ、霞む目を開けた時、いつの間にか真横で留美が脇を取って身体を支えてくれていた。辺りには、まだ身体に絡み付くような重い空気が流れている。

亜希は、ゆっくりと巧から視線を外し、数歩ほど後ずさった。無表情で生気のない顔をしていた巧は、腕をだらりと下げて、どこことなく不自然な動きで、ふらふらと呼びよせられるように細い路地に入って行った。

彼が消えたことを見届けた亜希は、ふっと力を抜いたようなため息について悠奈に視線を移した。

「怪我させたな？」

彼は、留美に支えられていた悠奈の前で、壁に手をつけて少し上体を屈め、せつなく彼女の顔の傷を見つめた。

悠奈は、彼の右肘のあたりのシャツが、重そうに赤黒く染まっていることに気付くと、涙をためた瞳で大きく首振り、

「わたしより？腕が？」

そう言って、はらはらと涙を落とした。

「大丈夫だから」

亜希は、微かに笑うと、右肘を押さえて留美に視線を向ける。

「留美、悠奈を送ってから、連絡してくれ」

「?はい」

留美は小さく答えた。

悠奈は、闇に消えてゆく亜希の後ろ姿を見送る。傍に居たかったが、彼の背中が何者をも拒んでいるような気がして近付けずにいた。道路の隅に飛ばされていた悠奈の鞆を拾い上げた留美は、一瞬、眉をしかめてこめかみに手を当て、動きを止めた。

「わたし飲んでるから、タク、拾うわね」

彼女は無理に笑顔をつくると、亜希が消えた方向とは逆の国道へ、悠奈の背に手を置いて、気遣うようにゆっくり歩き出した。

留美に、いつもの覇気がないことを悠奈は感じ取っていた。亜希がパワーを使う時、彼女の体調が崩れることは知っていたが、そういう表面的なものではなく、何か彼女の“気”のようなものが憔悴しきっているように思えた。

「?留美さん、大丈夫?」

悠奈は、留美の顔を覗き込んで心配気に聞いた。留美は、一瞬目を丸くしたが、少し疲れた表情に笑顔を見せる。

「それは、わたしがあなたに使うべき台詞よね?。ほんと、あなたって?」

そう言うと、彼女は困ったような笑顔を浮かべた。

【8】深淵へ―4

路地から10分程度歩き、ようやく国道の交差点に着いた時、脇に停まっていたベンツに気付く。

咄嗟に腰を屈めて、フロントガラスを凝視した留美は、車に向かって大きく手を振る。

その彼女に気付いたように、急いで車から降りて二人に近付いてきたのは、心配そうな表情を浮かべた宏樹だった。

「亜希から電話あったんだ。急いで悠奈ちゃんを迎えにきてくれて。何があったか詳しくは聞いてないけど、大丈夫？」

悠奈のハンカチで押さえた腫れた顔を、心配そうにじっと見つめる宏樹に、彼女は頷いて笑顔を返した。

「ごめんなさい。心配かけて」

「とにかく、病院行こう」

宏樹は、悠奈の肩を抱いて支えると、留美に視線を向けて、

「留美、亜希が駐車場で待ってるって」

そう言い、留美から悠奈の鞆を取り上げ、目で、はやく行けと合図する。

「あ？ありがとう」

留美は、少し動揺したように瞳を揺らせたが、振り返って元来た道を急ぎ足で戻って行った。

悠奈を助手席に乗せ、車を発進させた宏樹に、彼女は病院には行かずにマンションに送ってくれるように頼む。

「本当に大丈夫か？」

「うん、ありがとう。大丈夫」

「悠奈ちゃん、ごめん。俺が亜希を助けてほしいって言ったからこんなことに？」

宏樹は、苦しそうに呟いた。

「違うわ。わたしが亜希さんに逢いたいって思ったから行ったの。だって、亜希さんが好きだもの。それは宏樹さんが気付かせてくれたのよ」

悠奈は、沈む宏樹を励ますように笑顔で言った。

「悠奈ちゃん？」

宏樹は、そんな悠奈を見て、苦しい表情の中に笑顔をつくった。

？亜希さんが好き

悠奈は、流れるネオンを見ながら心の中で呟いていた。誰に何を言われても、彼がどんなパワーを持っていようとも、彼を想う気持ちは変わらない。彼の傍に居ることができるなら、破滅しようとかまわれない。彼女の中で、亜希への気持ち迷うことなく固まってい

た。

留美は、亜希が待つ屋外パーキングへと足を進めていた。自分自身を抱き締めるように腕を回し、俯き加減に歩く。彼女の瞳には、深い不安の色が潜んでいた。

パーキングに着いた留美は、一番奥に停めてあったビートルに向かう。車の前まで行った時、隣の空スペースの輪止めに座っている人物がいることに気付いた。

「疲れただろ？」

存在を消すかのように、怪我のない腕で片足を抱えて座っていた亜希は、留美を見て微かに笑う。

「怪我は？ 大丈夫？」

「かすっただけだ」

留美は、急いで彼の傍に走り、座り込んで腕の怪我に手を延ばしたが、彼女の手が触れる直前で、亜希は右手をすっと引いた。

「すぐに病院に行きましょう」

彼は、シャツの肘から下が真っ赤に染まり、止血していたハンカチにも血が滲んでいる。

「？いや、大丈夫だ。それに？面倒なことは避けたいんだ。隅内とのことは、他の誰にも気付かれたくないからな。それより？」

目の前にいる留美をじっと見つめて言葉を繋ぐ。

「隅内は、俺と悠奈が付き合ってるって思い込んだ。あいつがここまで信じきって、大胆なことをしたのは、きつと相当信用できるネタがあつたってことだ。てことは？」

亜希の言葉を聞きながら、留美は、血が引いていくことを感じていた。身体中が緊張で微妙に震え出している。

「俺達の身近な人間からの情報だな」

留美を見て薄く笑った亜希は、視線を外さず、ゆっくりと左手を彼女の肩に乗せる。

びくっと身体を震わせた留美は、青ざめ、顔を逸らせると視線を落とした。

亜希は、僅かに震えている彼女の横顔を静かに見つめていた。

「留美を、追い込んだのは、俺？」

いたわるように囁いた亜希の声が、留美の心に突き刺さった。

彼女は、身体の震えを止めるように、自分の腕を強く抱いて、口を開いた。

「?ごめんなさい。彼を使って、彼女を亜希から遠ざけるつもりだった?」

顔を逸らせたまま、苦し気な表情と絞り出すような声で訴える。

「?二人に人生を狂わされたままでいいの?悔しくないの?悔しい

なら、亜希から彼女を取りかえしなさいって？。彼がその気になれば、彼女が亜希から離れてくれるかもしれないって思ってた。でも、彼は想像通りにはなかった。彼、器が小さいのね。自分のことで精一杯で、彼女のことなんてどうでもよくなってた？。まさか、あんなことをするなんて？」

一気に言葉を吐き出した留美は、力尽きるように項垂れると、両手で顔を覆って小さい嗚咽を漏らした。

「もういい。俺が追い込んだんだな？」

「ごめんなさい？こんなことになるなんて？亜希は？騙せないって分かってたのに。自分の気持ちが抑えられなかった？」

彼は、怒られた子供のように小さくなっていた留美を、憂いを含む瞳で見つめると、頭をそっと撫でて優しく肩を抱いた。彼女は、彼の胸にすがりつくようにして泣き続けている。

「もう、いいから？」

優しく微笑んだ亜希の瞳は、深い悲しみを映していた。

【8】深淵へ―5

駅から徒歩二十分程の場所に、スナックやバーが集まった歓楽街があった。その一件のバーで、深夜に店に入ってきた男が、持っていたナイフで自分の喉を刺して自殺を図る事件があった。男は、二十一歳の学生、病院に運ばれたが、出血多量で一時間後に死亡した。

悠奈は、朝のローカルニュースで、その事件が起こったことを知り、二十一歳の学生というのが巧に違いないと確信した。だが、自分から連絡を取って、妙な疑いをかけられることを避けたかった彼女は、彼の家族や弁護士に確認はとらなかった。放っておいても、近い日に、彼の近親者から訃報が入ることだろう。

亜希が彼の行動を操作し、そういう結果になったことは分かっていた。巧に、わざと人の目につく場所で自殺を図らせれば、万が一『F』の前でのトラブルを見ていた人がいたとしても、亜希に疑いの目が向くことはない。巧を生かしておく選択もあったはずだが、この先、彼がまた同じようなトラブルを起こす確率は高いと考えた上での選択だったのだろう。

？巧くんが、この世界からいなくなった？。よく考えれば恐ろしいことなのに？

悠奈は、以前付き合っていた彼氏が、自殺したように見せかけられて殺されたということに、少しの驚きも感じていない自分に気付いた。悲しい、という気持ちはあるものの、自然にこの事件を受け入れて、動揺さえしていない自身の感覚に戸惑いを感じている。

？亜希さんが全て悪いワケじゃない？

そう思うと、何故か全てが自然に受け止められた。亜希に罪がな

いとは言えないだろうが、悠奈には、彼から伝わる測り知れない悲しみの深さが、その罪をも薄れさせていた。彼女は、すでに亜希のことを客観的に見られなくなっている自分自身に不安を感じながらも、彼へと膨らむ気持ちを抑えられなかった。

？嫌われてもいいから、傍にいたい？

昨日、宏樹に送ってもらってから、何度か亜希の携帯に電話をかけていたが一度も連絡がとれない。

悠奈は、朝食を食べ終えて、ニットとジーンズに着替えて部屋から出ると、大学に行く前に亜希のマンションに寄ってみる。インターフォンを鳴らして、少し待ってみたが、部屋の中からは何の反応もなかった。

？帰ってないんだ？。留美さんと一緒にいるのかな。

悠奈は、少し苦笑いすると、胸を締め付けられる傷みを抑え込んだ。

？嫉妬するなんて、馬鹿みたい？。わたしが嫉妬できる立場ですらないのに。

マンションから外に出た彼女は、日々冷たくなる風に身体を縮めると、歩きながら鞆から携帯電話を取り出す。亜希が電話に出ることはないと分かっているながらも、彼の番号を押していた。

亜希に連絡が取れたのは、それから十日後のことだった。

それまで悠奈は、何度も彼に電話を入れていたが、ずっと電源が切られたままで、留美にも連絡は取れなかった。宏樹には、亜希から、しばらく戻らないと一通だけメールが届いていたらしい。

携帯が繋がった日の夜も、彼女は諦め半分に義務的な感覚でボタンを押していた。

「悠奈？」

数回のコールの後、亜希の声を聞いた悠奈は、繋がる期待をしていなかったため、心の準備ができていずに驚きで絶句する。

「悠奈？ どうした？」

声を出せなかった悠奈は、亜希の自分を呼ぶ声を聞いて実感が湧くと、はらはらと涙を落とした。

「亜希さん？」

なんとか声を出した彼女は、泣いていることを悟られないようにしようと、

「怪我は大丈夫？ 電話繋がらなかったから心配になっちゃって」

と、できるだけ明るい口調で話した。

「？ああ、大丈夫。心配かけたな？」

「ううん、大丈夫ならいいの。しつこく電話してごめんね」

止められない涙を指で拭いながら、努めてテンションを上げた声

音を出した。

悠奈は、亜希の次の言葉を待っていたが、受話器の向こうで沈黙が流れる。

「亜希さん、どこにいるの？」

何か話していないと不安だった悠奈は、彼に居場所を訪ねた。

「今は、少し離れたところにいる。誰とも会いたくなかったからな？」

誰とも会いたくないと言った亜希の言葉が切なくて、悠奈の瞳にまた涙が溢れた。

「当分、戻らないの？ わたしは、あなたに逢いたい」

せつない感情に憑かれたように自分の素直な気持ちを声に出した彼女は、亜希の返事を息を詰めて待った。

長い沈黙の後、彼の落ち着いた声が受話器から響いた。

「海のマンション、そう言って、宏樹に送ってもらっておいで」

【9】闇を舞う―1

宏樹にメモ書きしてもらった住所を元に、悠奈は一つの駅に降り立った。辺りには、民家以外には何もない風景だったが、西に歩くと、すぐ目の前に青い海が広がっている。

吸い寄せられるように海へと向かった彼女は、堤防の手前で足を止め、真っ青な空を映した深い青を眺めた。太陽に反射している細かな光が、キラキラと輝いている。吹く風は冷たく、微かに潮の香りを運んできた。

？こんなところに亜希さんが？？

彼の普段のイメージからは程遠い場所だった。誰一人として姿をみかけない古い町並。しばらく海を眺めていた悠奈は、冷えきってきた身体を感じると、コートを着忘れていることに気付いた。慌てていたせいだろう、鞆の中には財布が入っているだけで、携帯も置いてきてしまっていた。苦笑いしながら、もう一度住所に目を通して、民家の方向に足を向ける。

亜希には、宏樹に送ってもらおうようにと言われていたが、彼女は一人で彼が居る場所を訪ねたかった。そうすることで、ほんの少しでも今の亜希の気持ちがかかるかもしれないと感じていたからだ。

民家から少し離れた海岸の間近に、平家が多いこの辺りには珍しい5階建の真っ白なマンションが見える。住所を確認した悠奈は、鼓動が高鳴っていることを感じながら、ゆっくりとマンションに向かって足を運んでいた。

？どうか、逢えますように

彼女は、祈る気持ちで一步一步足を進めていた。

そのマンションは、オートロックも、エレベーターもなく、長方形のようなシンプルな形をしていた。階段で5階まで上がり、部屋番号を探そうとした時、一番奥の部屋のドアが開いていることに気付く。部屋の前まで行った悠奈は、亜希の部屋だと確信を持つと、ためらうことなく中に入ってドアを閉めた。

玄関を上がり、薄暗い廊下を抜けて正面の扉を開けた途端、世界が変わったかのように急に視界が明るくなる。そこには、西から太陽の光が差し込む十帖程の部屋があった。

「一人で来たのか？」

バルコニーに繋がる窓辺に立っていた亜希は、部屋に入った悠奈を振り返りながら呟いた。白い長袖のTシャツを着て、太陽の光の中にいた彼は、髪も肌の色も透き通って見え、今にも消えてしまいうように透明だった。

部屋には、カーテンすらなく、白いベッドマットが無造作に置いてあるだけだった。その上にぽつんと置いてあるスチール製の灰皿が、やけに目につく空間だった。

「ごめんなさい。宏樹さんが居たほうがよかったのかな？」

「?いや」

一言だけ言葉を落とした彼は、微かに微笑ってマット上の灰皿を取り上げ、窓の下の床に移動させる。

「そこ、適当に座ってくれたらいいから」

ジーンズのポケットから煙草を取り出した、目で、ベッドマットの上を示した。

悠奈は、黙って彼が言った通りに座る。亜希は、煙草に火を付けると、窓枠に凭れて悠奈の顔を見つめた。

「怪我、良くなったみたいだな」

「?ん、亜希さんは大丈夫?」

「ああ、かすり傷だしね?」

ふっと笑った彼の表情が、少し窶れて悲し気に見えた悠奈は、急にせつなさが込み上げてくる。

?この人は、ここでずっと一人で居たんだ。全てを抱えたまま、ここで一人?

甘く漂う煙草の煙に、無言の時間が流れていた。床の灰皿に煙草を押し付けた彼は、窓を開け、前方に広がる海を見つめている。やはり、誰をも受け入れない壁を感じた悠奈は、彼の背中に向かって言葉を投げた。

「あなたのその瞳に映る悲しみの理由を教えてほしいの?」

その声に、ゆっくりと振り返った亜希は、色のない瞳で微笑う。

「?何のために?」

「あなたを救いたいなんて言わない。ずっとずっと、あなたの悲しみを感じていた?。あなたが気になって仕方ないの。わたしのために教えてほしい。」

「?もう、俺とは関わるな。俺が特殊なことは分かっているはずだろ? 隅内のことも?」

彼は、後ろ手に窓を閉めると、優しく笑みを携えた瞳を彼女に向ける。悠奈は、この世の悲哀を全て映したような亜希の瞳に、自分の瞳を重ねて見つめると一瞬目を細めた。

「その悲しみは、消える日が来るの?? わたしは、亜希さんに逢いたくて来たの。どうしようもなくあなたに逢いたかったから来たの。あなたのことが知りたい」

悠奈は、立ち上がると、迷いない純粹な瞳で真直ぐに彼に言った。亜希は、静かに深い瞳で彼女を見つめたまま数秒の間を置いたが、彼女の揺るがない瞳を感じると、力を抜いたように微笑う。

「おいで」

彼は、穏やかな微笑みを浮かべて、片手を差し出した。

悠奈は、彼の行動に一瞬ためらうが、ゆっくりと近付き、ぎこちなくその手をとる。

「悠奈」

亜希の声に、顔を上げた彼女は、見下ろしてくる彼の瞳に強く引き込まれた。深く悲しい、そして優しい瞳。その瞳から目が外せない。徐々に視界がフェイドアウトしてゆくと同時に、身体力が抜け、亜希の腕の中に優しく包まれたことを感じた。すぐ近くにある彼の静かな呼吸と体温を感じる。溢れ出しそうな愛情と理由の分からない不安が、彼女を取り巻いていた。

「怖がらなくていい」

耳元で聞こえる彼の静かな声が、悠奈の身体に響き渡る。彼女は、その声に安らぎを感じ、一切の不安を消して彼の胸の中に留まっていた。

「あ？」

心を開けた途端、暗闇を急降下するような錯覚に落ち、意識が夢と現実の間を彷徨うように漂った。直接伝わってくる彼の優しさの中から、じわりじわりと、絶望感や虚無感が身体に染み入るように流れ込んだ。真っ暗な闇。降下は続き、底がないように落ちてゆく。

？これは一体？ 亜希さんの心？

深い闇の静けさの中に、彼女の意識は浮遊していた。徐々に一つの光が近付いてくる。その光は充満して弾け、粉々に散らばり、前方に映像を写し出すスクリーンとなった。

【9】闇を舞う―2

十代半ばだろうか。悠奈がはじめて亜希と出会った頃の彼の容貌が浮かび上がった。かすかに青ざめた顔で息を切らせて走っていた彼は、一つの部屋のドアを勢いよく開ける。

「琴美?!」

部屋を一望して息を飲んだ彼は、一瞬目を見開いたがすぐ視線を落とし、中に入って静かにドアを閉めた。

薄いピンクの壁紙に、白い家具で統一された女の子らしい部屋。小さな窓から入る春風がレースのカーテンを微かに揺らせている。

「亜希??」

ドアに背を向けてペタリと座っていた女の子が、呆然としたように半身程振り返った。その瞳は亜希と同じ深いオリ―ヴ色を携えている。透き通る程の白い顔に、無表情の笑みを作った彼女は、首を傾げて艶やかな栗色の長い髪を揺らした。制服だろうか、清楚さを引き立てる白いブラウスが眩しく映った。

「?おかえりなさい」

彼女は亜希に向かって力なく笑う。

亜希は、足早に彼女の正面に回って腰を下ろし、無言で苦悩の表情を作った。

彼女の片側の頬は赤く腫れ、ブラウスの胸元が乱れている。その瞳は、周りのものを映すことを拒んだように色が失われていた。

「? いいか。全て忘れるんだ」

亜希は、彼女の両腕をきつく掴んで顔を覗き込み、憂う瞳で低く言い聞かせるように呟いた。

「亜希? わたし」

悪夢から覚めたように、目に生命力を戻した彼女は、彼のパーカの胸元に細い腕でしがみついて震える声を出した。

「大丈夫。心配するな。忘れる」

そう言った彼は、彼女の腫れた頬に、そっと手を触れる。

彼等は、顔のパーツは全く違うが、同じ空気感と瞳の色を持ち、すぐに双子児であることは分かった。天使のような二人が寄り添うシーンには、美しさと哀しみが映し出されている。だが、一部、それにはにつかわしくない色が映し出されていた。

亜希の足下の床には、辺り一面に赤黒い染みのようなものが付着している。そして彼の後ろに、人間が、まるで全身を真っ赤に染め上げられた人形のように転がっていた。その顔は血走った目を見開き、口から血の泡を吹いたまま固まっていた。身体中におびただしい傷が口を開け、自分で胸部にナイフを刺した形で絶命しているように見える。

「? 亜希、わたし、亜希を守りたかっただけ。あなたを傷つけたくなかった?」

「分かってる。何も言わなくても分かってるから」

彼は、彼女の溢れ出る涙を指で拭くと、抱きかかえるようにして

優しく立たせた。

「亜希？」

立ち上がった瞬間、崩れるように彼の胸に寄り掛かった彼女は、消え入りそうに震えながら泣いていた。

「全部、俺が片付けるから、忘れるんだ？」

亜希は、彼女の両肩に手を乗せ、落ち着いた声で静かに呟いた。彼女は、今にも倒れてしまいそうに頼りなく弱々しい身体を、彼の胸に預けて嗚咽を漏らしている。静かに受け止めていた亜希は、彼女の頭を柔らかく撫でていた。彼の表情や行動は、不思議と落ち着き払った様子が見られる。まるで、前から全てを予想していたような、そして、それが現実になったというような、シュミレーション済みの出来事を体験しているかのような平静振りだった。

しばらくして落ち着きを取り戻したように泣き止んだ彼女は、俯きながらゆっくりと彼から離れた。

「予想通りだった？」

突然、可笑しそうに肩を揺すって笑い出し、上目使いに亜希を見た。彼は黙ったまま彼女を見返す。

「こんな時でさえ、抱き締めてさえくれない？」

「琴美？」

「亜希のためなのよ。この男があなたを傷つけないように。わたしが誘惑して、亜希から気持ちいを逸らせてやろうと思った？」

彼女は、悲し気に眩き、床に転がる男を憎悪を込めた眼差しで一瞥し、

「でも、耐えられなかった。こんな汚い男に少しでも触れられるかと思うと、一気に血が逆流して？」

と、苦しそうな表情で自分で自分の身体をきつく抱き締める。

「そして、気付いたらこうなったの。殺すつもりはなかったわ。力の使い方が分からなかった。でも、ずっと消してやりたいって思ってたのは確かよ。あの馬鹿女とできてるだけじゃなく、亜希にまで卑しい目を向けていたこの男？」

「もういい」

亜希は、強い調子で彼女の言葉を遮る。

「琴美、着替えて俺の部屋に行け」

彼はそれだけ言うと、手早くベッドカバーを取って床に転がる男に覆い被せ、シーツを床の血黙りの上に置いた。

「亜希っ!!」

甲高い叫び声が室内に響く。その声に、反射的に振り向いた彼は、色のない表情を浮かべていた。

「どうしてそんなに冷静なの？もっと心配してほしい。わたしを見てほしい？。こうなることを、あなたは分かってたんでしょ？何故

止めてくれなかったの？」

どうしようもない苦しみを訴えるように胸に手をあて、彼に美しくも烈しい眼差しを向ける。

彼女を見つめていた亜希の瞳の中には、優しさと哀しみと冷たさが交錯していた。その瞳の奥に、凍るような無の感覚があることに気付いた彼女は、肩を落として淋しく微笑み、小さなため息をついた。

「？疲れちゃった」

「いいから、何もかも全て忘れて少し休め」

「聞いて！」

華奢な身体から振り絞られたような叫び声が響く。亜希は、その声に、黙って立ったまま彼女の言葉を待っていた。

「？今まで亜希の気を引こうと必死だった。あなたは誰をも惹き付けてしまうから、心配で仕方なかった？。分かってる。叶わないとは分かっているの。わたしは妹だもの。でも、すごく愛しい人がこんなに近くにいるんだもの？あきらめられないの？。あなたがわたしの気持ちを察することが出来るように、わたしだって亜希の気持ちに分かる？。嫌でも分かってしまう。わたしに対して、妹以上に愛することが出来ないことも、こんなわたしの気持ちに微かな憎悪を感じていることも」

「琴美？」

「でもね、ずっとよ。ずっと、あなたを見てきたの。愛おしく感じ

るたび、亜希から離れなくちゃって思ってた。でも離れることは辛すぎる？。この気持ちはもう自分ではどうしようもないの。お願い。分かってるでしょ。これ以上傍に居ると、何をするか分からない。もう、わたしは？」

亜希に瞳を向けた彼女は、何かを決意した顔つきで笑んだ。

「お願い。苦しいの。楽になりたい？。あなたには分かるはずよ」

彼女の瞳に涙が滲んだ。亜希は、そんな彼女を何も言わずに見つめる。その瞳には、感情を超えた悲哀が映っていた。彼は彼女にゆっくりと近付くと、背中に手を回し、愛おしむように優しく抱き締めた。

「俺が、琴美の前から居なくなる」

「ダメよ？。わたしたち繋がってるんだもん。どこに居るかなんてすぐ分かってしまうわ。そうしたら、すぐに逢いに行ってしまう？。お願い、わたしをこの呪わしい力からも、あなたへの執着からも、全てから解放して！」

彼の腕の中、哀しみと恍惚の色を浮かべた彼女の瞳が、亜希の瞳を捉える。彼は微かに苦し気な表情を浮かべてしばらく目を閉じていたが、決心したように瞳を開き、彼女の願いの全てを受け入れたように静かに微笑って、彼女の瞳に入り込んだ。

「愛してる？」

彼女は幸せに満たされた表情を浮かべながら、珠玉のような涙を落とした。

深い愛情と、身体を引き裂くような哀しみ。そして、その感情を消す冷酷さが、彼の発色した瞳に映し出されていた。

【9】闇を舞う―3

一瞬、悠奈の頭の中で、破裂音がしたように光が落ちて、真っ暗な闇に戻った。

闇が数秒続いた後、再び、ぼんやりした光が浮かび上がり、どこか無彩色で殺風景なビルの中の様子が映し出された。壁に沿って置かれた長い椅子に座って、ひっそりと項垂れている女性が見える。長く続く廊下。そこは、病院の待ち合い室だということが分かった。

「あなたなんですよ？。亜希」

細い声が静かな空間に響いた。40代前半くらいだろうか、亜希に話しかけている女性には、小さな顔と腰の位置の高さから、純粋な日本人ではないことが窺える。

彼女が座っている斜め前の壁に、腕を組んで凭れている亜希の姿があった。彼は、遠くに追いやっていた視線を、たった今この世界に戻したかのように彼女に向けた。

「？叔父さんは自殺なんかじゃないわよね。わたしには分かるのよ。あなたが仕組んだんでしょ？ それに、琴美の事故も？。同じ日に重なるはずなんてないわ？」

彼女は、まとめた髪から額に落ちた後れ毛を、小刻みに震える手でなで付けながら、泣き腫らした真っ赤な目で亜希を見る。その瞳には、憎しみのみが映っていた。

「どうして、わたしの大切な人達を奪うの？」

震えで声にならない嘆きを聞いた亜希は、軽くため息をついて一

瞬視線を落とし、口の端を微かに上げて含み笑いをした。

「大切な人達？ね？」

「そうよ！　当たり前でしょ！　家族なんだから！」

感情的に声を発した彼女は、悲しみと怒りの形相で涙を落としながら亜希を睨む。だが、その表情に、どこか怖じ気付いたように怯んだ色が見え隠れしていた。

彼は、そんな彼女を静かに見つめていたが、ふと瞳に同情の色を浮かべたかと思うと、軽く茶化すかのように皮肉ぽく呟いた。

「あなたが大切だったのは、あの男だけだろ？」

「亜希？」

「？全く、母親のくせに俺達には少しも近付こうとはしなかったよな。けど、なぜかあの男？旦那の弟とは心身共に仲良くなれた。？マジ、大胆だよな」

彼は、淡々と言葉を流し、彼女を眺めて微笑う。彼女は、青ざめて押し黙ったまま、ぴくりとも動かなかった。

「薄気味悪かったんだよな。自分の子供がさ。俺達だって、あんたの親父の能力なんて受け継ぎたくなかったさ。俺達の傍に居なかったあんたに、この力がどんなものか実体験で教えてやりたいよ？」

亜希は、腕を組んだまま長椅子の前まで足を進め、彼女の目の前で屈んで冷笑を浮かべた。

「そう？、お望みなら、すぐにでも、あの男の居る場所に連れて行ってあげられる」

彼女の瞳を覗き込んで首を傾げ、優しい声でいたわるように呟く。彼の瞳には嘲笑と侮蔑が映っている。表情を凍りつかせていた彼女は、亜希に殺人鬼を見るような瞳を向けていたが、すぐに怯えたように彼の瞳から目を逸らせた。

「？だよな。いやだろ。なら、二度と俺の前に現れるな」

立ち上がった彼は、彼女を見下ろし、無表情に言葉を落とす。

彼女は、信じられないというように目を見開き、一瞬射抜くような視線を彼に向けたが、諦めたようにその憔悴しきった顔に絶望を浮かべて、虚ろな目で独り言のように声を出した。

「？あなたを産んだのは？間違いだった？」

彼女の言葉が終わったと同時に、悠奈の目の前の映像には公園が浮かび上がる。

あの日、桜と雨が降る公園で、彼が濡れながら座っているシーンが見えた。自分という存在の全てを無に還すかのように、ひっそりと、誰にも気付かれず息が絶えることを祈るかのように、彼は冷たい雨の中を座り続けていた。

「大丈夫ですか」

彼の心に声が響く。

何の恐れも期待もない、純粹に自分に向けられた人としての情に、思いがけず彼は途方のない安らぎを感じた。目の前の少女の存在が、彼に温もりを感じさせ、再び現実の世界に意識を戻させる要因となる。

「君の想いが俺を助けてくれたんだ」

低い、落ち着いた声？。

夢から覚めたように現実に戻された悠奈は、亜希の声を実際の耳で聞いた。彼女は、いつの間にかマットの上で、隣にいた亜希の肩によりかかるように座っていた。

「あなたのせいじゃない？」

悠奈は、気持ちを込めて言葉にした。亜希の悲しみは、確かに彼の能力がなければ、生まれ得なかったものだろう。その痛みを知った悠奈は溢れ出る涙を止められなかった。

「悠奈、ここを出たら、もう俺には関わるな」

「いや！ 亜希さんの周りが幸せじゃないように見えたとしても、それは、その人が選んだ運命よ。あなたは関係ない。わたしはあなたの傍に居たい」

悠奈は彼から離れ、顔を上げて真直ぐに亜希を見つめた。何の曇りもないその瞳が、彼の心の闇に光りを差し込む。

「君は、全く変わらないな？」

「？変わったわ。亜希さんのこと、好きになった？。あなたが、好きなの」

彼女は大きく震える自分の胸を感じながら、指で涙を拭いて潤んだ瞳で微笑んだ。

悠奈の瞳を見返すように、亜希は少し睫を伏せて、ふっと、愛しいものを見るように瞳を和らげると、いきなり彼女の腕を掴んで強く引き寄せ抱き締める。

急に抱き締められた悠奈は、身体に緊張が走ったが、彼という存在の腕の中にいることに魔力のような魅力を感じ、力が入らず身動きが出来なくなった。

「少し？君を感じていたい？」

亜希の低く落ち着いた声が、悠奈の耳の上から落ちてくる。

彼との一体感を感じた悠奈は、どうしようもない甘い感覚に浸ったが、同時に深い底の見えない悲哀の感情が、亜希から自分の中に少しずつ流れ込んでくることに気付いていた。呼吸が徐々に浅くなり、息が出来ない程の苦しさを感じる。ただ、眼を閉じて彼の全てを受け入れるよう、自分の心を解き放った。

？落ちる？！

急に地面が逆さまになり、深い粘り気のある闇の中に、二人で果

てなく落ちてゆくような幻覚に襲われる。

彼の心に寄り添っていた悠奈は、周りの闇に浮遊している得体のしれない塊に、落ちながら何度も捕われそうになった。それは、彼女にまわりつき、あたかも感情を抜き取ろうとする。あまりの不快さに、もがけばもがく程、その異様な塊は大きく膨れて、ねつとりと絡まり付いてきた。

？これは？この塊は、彼の昇華できずにいる悲しみ？

彼女は、一切の抵抗することを止め、再び心を開く。どんどん沈み続ける光の届かない世界で、亜希の苦しみを浄化できるように願いながら、その塊が壊れてゆくイメージを浮かべ続けていた。

？あなたを闇から連れ出したい

彼女は強く念じ続けた。闇は底を見せない。悠奈が心を開ききり、彼の背中に腕をまわした時、不意に目の前に出口のように一つの光が見える。いつの間にか降下は止まり、穏やかな流れの中で闇が霧のように晴れていった。

「悠奈」

亜希の落ち着いた声が響いた。

目を開けた彼女のの前には、彼の瞳があった。その瞳は、いつもと変わらず、深く静かな色を帯び、穏やかに彼女を見つめていた。

「もう、君を闇に近付けたくない。妹のようにはしたくない」

彼は、温かい声で呟いた。その瞳は、微かにシルバーに発光して見えた。瞳に吸い込まれるように、視線を外せずにいた悠奈は、徐

々に身体にけだるさを感じる。

？それでもあなたの傍い居たい

そう声に出そうとしたが、喉が詰まったように声が出ず、言葉が心の中だけで止まってしまった。彼女は、声だけではなく、身体さえ自由が効かないことに気付く。亜希は、悲しみの色を映した瞳で微笑むと、悠奈を優しく抱き上げ、ベッドの上に横たわせた。

？亜希さん

悠奈は、身体が自由がきかなくなったマリオネットのように横たわっていた。全く反応しない。動きたいと願っても脳が指令を出さない。どこかで身体とのリンクが切れてしまったようだった。

伝えたいことが伝わらず、全身が麻痺したように動かない。ただ、先の展開が予想出来ていた彼女の瞳には涙が溢れていた。

亜希は、相変わらず深く澄んだ瞳で悠奈を見つめると、涙が伝う彼女の頬に手を添わせた。

「ずっと想ってた。雨を舞う君を見た時から？」

柔らかに優しい声で囁き、限り無く慈愛に満ちた瞳で悠奈を見下ろす。

悠奈は、その瞳に見入れられながら、徐々に意識が真綿にくるまれるよう薄れてゆくことを感じていた。

彼女の記憶が途切れる寸前、彼の声が頭に響いた。

？幸せに

悠奈が深い眠りから覚めた時、亜希の姿は、彼の存在が最初からなかったかのように消えていた。

【9】闇を舞う―4

？もう二年以上経ったのよ？

悠奈は、亜希が座っていたベンチに腰を下ろして、春が訪れてはじめている公園の桜の木を見上げていた。まだ冷たい風が残っていたが、身体にまとわりつくような暖かい香りが漂いはじめている。

この公園は、二年前から一切何も変わらない。きっと、亜希と出会った頃からずっと変わっていないのだろうと悠奈は思った。

桜のつぼみが所々はじけ、ふっくらとした花が咲きはじめていた枝に目を注ぎながら、心は常に亜希の思念を追い続けている。

？どこに消えてしまったの？

二年前、最後に海の近くのマンションで会って以来、亜希の姿は跡形もなく消えてしまった。

その日、亜希から宏樹の携帯に送られた、心配しないでいい、探さないでほしいとのメッセージを最後に、彼の携帯は解約され、以降、全く消息が分からなくなってしまった。

悠奈は、そのメールの文言通り、むやみに亜希を探すことをやめ、彼とはじめて出会った公園で、彼が戻ってくることを待つことを決めた。

きっと、もう一度逢える日が来ると信じながら待ち続け、既に二年が過ぎてしまっていた。

？もうすぐ逢えるよね

静まり返った公園で、雲一つない淡い青の空をゆっくりと仰ぐ。目を閉じると、光の粉が降ってきた。

?きつと、逢える

ほぼ毎日、彼女はこの公園で彼を待ち、桜に祈り続けていた。彼女の亜希への気持ちは、時間が経つ程に不思議と強くなっていく。

この日も日課のように桜の花に強く念じていた彼女は、ふと近付いてくる人影に気付いて、視線を正面に向けた。

視線の先には、グレーのロングワンピースを着た女性が、悠奈に向かつて歩いてきているのが見える。その人物の片足を引きずるような動きに、一瞬目を凝らした彼女だったが、確かに見覚えのある顔に、思わずベンチから立ち上がった。

「留美さん？」

悠奈は叫ぶと、その人物に小走りに近付いていった。

留美は、大学を卒業してすぐに海外留学したと宏樹から聞いていた。悠奈は、今この場所に彼女の姿があることに、微かな不安を覚えた。

「おひさしぶりね」

二年振りに会う留美は、真っ黒な髪を肩の上で切り揃えて、元からの美しさの上に知的さが重ねられていた。変わらない強い瞳に微笑みを浮かべ、悠奈の手を優しく握る。

「宏樹から聞いたの。あなた、ほとんど毎日ここに居るって」

「わたしに会いに？」

留美の言葉に、悠奈は戸惑いつつも微笑みを返しながら聞いた。

「そうよ。あなたと話したくて。ねえ、あの場所に座っていいかしら？」

留美は、視線を悠奈が座っていたベンチに向けて目を細める。

「？ええ。それより留美さん、足どうかしたの？」

「ちょっとね？」

留美は、意味深げに笑い、ベンチに向かって歩き出した。数歩後ろから歩いていた悠奈は、右足を引きずる留美の後ろ姿を見つめると、説明できない気持ちのざわつきを感じる。

ベンチの前で、留美は腰を下ろそうと重心を左足に置いたが、バランスを崩してよろめいた。悠奈は慌てて留美を抱きとめると、彼女の腰に手を回してベンチに座らせ、その隣に腰を下ろした。

「ごめんなさい。まだ足が悪いことに慣れてないのよ」

留美は苦笑いし、ふいと意識を飛ばしたかのように遠くを見つめた。悠奈は、そんな留美の痩せた横顔に見入ると、この二年の間で彼女の周りに何かが起こったのだろうと悟る。心配そうな悠奈の視線を察したように、留美は意識を今に戻して微笑み、口を開いた。

「わたしね、亜希が消えてから彼を忘れるために日本から逃げたの。兄と祖父のいるイギリスにね。でも、結果、彼を追うことになったの」

「亜希さんはイギリスに？」

「そう。亜希は、祖父と折り合いが悪かったから、まさかイギリスに居るなんて思わなかったわ。もちろん二人は別の場所で暮らしてはいたけれど？。彼はロンドンに居たの。彼がロンドンに居ることは祖父しか知らなかったんだけど、たまたま祖父が亜希に電話してるの聞いたちゃったの」

「ロンドン？」

悠奈は、亜希がイギリスに居ると聞いたことに対して、さほど驚きは感じなかった。彼の祖父がイギリスにいるということは知っていたし、祖父の元に居るかもしれないという可能性もゼロではいだろうと考えていたからだ。

彼女は、遠い異国に思いを馳せ、その空間に亜希の姿をイメージする。ロンドンという街に、何ら違和感のない彼の姿が頭に浮かんだ。

「わたし、我慢しようとしたのよ。でも、どうしても亜希に会いたくて、荷物を持って押しかけたわ。彼は、いつもの笑顔で受け入れてくれた。恋人でもなく友達でもなく、同志としてのわたしをだけねどね」

留美は、微かな笑みを浮かべ、鞆から煙草を取り出して火をつける。風がその煙を舞い消すように吹いていた。

「それなら、留美さんが今日本にいるのは？」

「わたしはね、また亜希を忘れようとして、今度はイギリスから逃げてきたの」

「逃げてきた？」

「彼がイギリスに居た理由は、自分のルーツ、というより自分のパワ－のルーツを探るためだったの。なのにわたしは邪魔なことばかり？」

悠奈は、留美のくわえた煙草の先が燃えるのを見つめながら、彼女の言葉に耳を傾けていた。

「わたしね、亜希の傍に居られて幸せだった。一緒に居れば居る程、彼に想いを募らせていった。でも、そのうち、慣れない街でわたしは友達もできなくて、彼しか見えなくなってた。彼から一秒たりとも目を離せなくなった。彼をどこまでも追いかけていった。朝目覚めてから夜眠るまで、一時も一秒も離れることができなくなった？。周りの、彼に近付くあらゆる人達に嫉妬して、監視するようになったわ。ずっと一緒にいて幸せな筈なのに？、ずっとずっと果てなく苦しかった？」

言葉を止めて、煙草を携帯灰皿に入れた留美は、悲し気に笑って悠奈を見つめる。

「留美さん？」

悠奈は、留美の苦しみをそのまま受け取ったかのように、せつなく、そして慈しみに満ちた表情を浮かべたが、彼女を癒せる言葉を見つけれなかった。留美は、そんな悠奈の情感を感じると、わずかに瞳を和らげ再び口を開いた。

「そんな狂気直前のわたしを、亜希が制したのよ。ある日、わたしは気付けば病院に居たわ。資材置場のコンクリートの下敷きになっていたらしいの。右足は砕けていた。そんな場所に行った記憶も、

痛みも全くなかった？。わたしは、自由に動けなくなって、亜希から離れざるをえなくなった？」

自分の右足を見つめた留美は、淡々と他人事のように話し続ける。

「悠奈ちゃんには分かるわよね。わたしを動けなくしたのは亜希。彼が、わたしを疎ましく感じてしたことなのか、それともわたしが狂気に至らないうちに離れようとしたのか？。多分、後者だとは思いますが、わたしは怖くなった。この足が治っても、また亜希と一緒に居られる自信がなかった。だから逃げたの」

彼女は、つと空を見上げて、過去を思い出すようにため息をつくと、瞳をわずかに潤ませる。

「今でも亜希が好きよ。他の誰よりも。でも、わたしはやはりわたしが一番大切なの」

悠奈は張り裂けそうな留美の痛みが伝わってくることを感じていた。

「？留美さんは、亜希さんを精一杯愛したんだと思う。誰だって、自分が一番大切よ。わたしは？留美さんには幸せになってほしい」

頬が落ち込んだ留美の横顔を見つめた悠奈は、優しく強く声をかけた。力なく悠奈を見返した留美の瞳に、微かな光が宿る。

「ありがとう。わたしは大丈夫よ。ただ、気になるのはあなた？」

「わたし？」

驚いた表情で聞き返した悠奈に、留美は頷いた。

「こっちに戻って、宏樹にあなたのことを聞くまでは、ここに来るつもりなんてなかったのよ。でも、こんな場所で亜希をずっと待ってるって聞いてしまったから？」

留美は、口許に笑みを浮かべると、鞆からメモ書きした用紙を取り出して、悠奈に差し出す。

「?これは」

悠奈は、メモに書かれているアドレスを見ると、目を見開き留美に視線を戻した。

「亜希の住所。あなたの好きにするといいわ。わたしや、彼の妹のような運命になっていい覚悟があるなら、この場所に行くといいわ?」

そう言って、右足をかばいながらゆっくり立ち上がった留美は、どこか悲し気な表情で悠奈を見下ろすと、背を向けて足を引きずりながら歩き出した。悠奈は思わず立ち上がり、彼女の補助をしようと腕を取ろうとしたが、留美は断るように手の平を悠奈に向ける。

「いいの。わたし一人で大丈夫」

彼女が悠奈に向けた微笑みには、凜としたものがあつた。悠奈が手を離すと、留美はまたゆっくりと歩き出す。

「留美さん、ありがとう」

声をあげた悠奈に、留美は半身ほど振り返って微笑んだ。

？あ？

風になびく髪を押えて微笑んだ彼女の表情に、悠奈は一瞬凍り付く。

その美しい顔には感情が見えなかった。向けられた瞳の焦点は合わず、生気を感じられなかった。悠奈に、過去の記憶が閃光のように蘇る。

彼女は、留美に走り寄ろうと一歩足を踏み出したが、ふととどまり、微かな笑みを浮かべた。

？そうであってもなくても、わたしの気持ちは変わらない

すでに遠のいていた留美を、視界から外れるまで見送った悠奈は、再びベンチに腰をかけ、手に持っていたメモに目を向けた。

？この住所が彼の居る場所

そう思うと、愛おしい気持ちが溢れ出し、今すぐにも飛び立ちたい衝動に駆られた。

留美の話を聞いたところで、亜希に対する自分の気持ちは一向に変わる様子はない。

？決めていたんだから。彼に嫌われようと、何があろうと、わたしは亜希さんに逢うって。彼の傍に居るって？

悠奈は顔を上げ、ふくらんだ桜のつぼみを、強い意志を秘めた瞳で見つめていた。

終章

5日後、悠奈はヒースロー空港に降り立った。

地下鉄でロンドン中心部のピカデリーサーカスまで移動した悠奈は、地上に上がると、ロンドンの街を肌で感じる。華やかな中にも歴史を感じる活気ある街は、立っているだけで圧倒されそうだった。彼女が予約していたB&Bはウエストミンスターにあったのだが、チェックインまでまだ時間があり、待ち時間の間に有名なピカデリーサーカス周辺を観光しようと考えていたのだ。

すぐにでも亜希がいるサウスバンクに訊ねていきたい気持ちはあったが、スニーカーを持ってきたまま訪れるわけにもいかず、ロンドンという街に少し慣れて、気持ちを落ち着けてから逢いに行くつもりだった。

慌てて日本を飛び出してきた彼女は、ガイドブックを用意する余裕もなかったため、街の中など右も左も分からなかった。インフォメーションで、たどたどしい英語を使いつつ道を聞いて、地図を見ながら歩いてみるのだが、少し歩くとすぐに方角が分からなくなる。しばらく、どこからともなく甘い香水の香が漂ってくる街を、あてどなく歩き続けると、前方にテムズ河が見えてきた。彼女は、気持ちが高まり、歩調をはやめて河の遊歩道まで急いだ。

？想像してたよりずっと大きな河？。亜希さんはこの河を見ながら暮らしてるんだ？

悠奈は感慨深く、そのロンドン独特の景色を目に焼きつけるように立ち尽くす。

亜希は、この街で、自分のパワーに向き合い探ろうとしている。想像を超える痛みを伴うだろうと思うと、彼女は胸が締め付けられた。彼女の気持ちとは裏腹に、美しい街や橋やクラシカルな舟は、ず

っと眺めていても飽きることはない。

日が傾きかけ肌寒くなってきたころ、彼女はその美しい場所から離れる決心をして地図を広げ、ウエストミンスターの方角を確認した。

「Is not the road understood?」

いきなり、彼女は後ろから声をかけられた。無防備になりすぎていることに気付いた悠奈は、慌ててスーツケースを持つと、「It's safe」と振り返りもせずにもその場から逃げ去るように歩きだす。だが、彼女は耳に残る少し低い落ち着いた声と、漂ってくる香水の匂いを感じ取って、すぐに足を止めた。

？この感覚？

「The direction is different.」

柔らかく悠奈の身体にずっと入ってくる声に、彼女はゆっくりと振り返った。

「悠奈、ウエストミンスターはそっちじゃない」

彼女の目の前には、色素の薄い切れ長の深い瞳があった。

悠奈は、目の前に現れた人物を、実体がなく、スクリーンに映し出されている映像のような感覚で捕らえていた。グレーの長袖Tシャツに、薄手のフード付きのグリーンのコートを重ね着し、ジーンズを履いている彼は、少し髪が短くなっていること以外は、二年前と何も変わらない。コートのポケットに両手を入れ、瞳に優しい微笑みを携えて立っていた。

？亜希？さん？

幻を見ているのではないかと、彼女は何度も瞬きをしたが、ロンドンの街を後ろに佇む彼は、視界から消えることはなかった。

「昨日、桜が舞い降りる夢を見た」

久しぶりに聞く声が、ずっとこの日を待っていた悠奈の心を揺さぶる。

「亜希さん？なの？」

彼女は、まだ彼に実体があることが信じられずに、声に出して本人に聞いた。

亜希は、くすつと笑うと、「何に見える？」と首をかしげる。彼の何かを尋ねる時の癖。彼の前髪が、さらりと流れた。その姿を見て現実感が増した悠奈は、亜希を見つめながら近付くと、そつと手を延ばしてコートの裾を掴んだ。ふわり、と、オリエンタルな香が漂う。触覚と臭覚に感じる現実。

？限り無く優しく、そして冷たい程悲しい瞳。やはり彼なんだ？

見上げた彼女は、亜希の瞳に魅せられる。

「ほんとに亜希さんだ？」

そう言うと、これまでの複雑に混ざった感情が一気に沸き上がってくることを感じ、自然と落ちてくる涙を止めることができなかった。

「驚かせた？」

亜希は、微笑みを浮かべて彼女の顔を覗き込む。

「ううん、嬉しいの。ごめんなさい。涙、止められなくて？」

悠奈は、無理に笑顔を作ろうとしたが、予想しなかった喜びにどうしても涙が止まらず、手で顔を覆った。

亜希は、悠奈の頭に優しく手を乗せ、穏やかな表情で彼女を見つめていた。

「ごめんなさい。もう大丈夫」

「少し、歩こうか」

亜希は、ようやく笑顔になった悠奈に微笑みかけると、さりげなく彼女のスニーカーを持ってゆっくりと河沿いを歩きはじめた。

彼女は、亜希の背中を見つめながら少し斜後ろを歩き、徐々に、彼の存在がすぐ近くにあるという現実を実感できるようになっていた。

すれ違う人々は、誰も二人に関心を向けない。ここはロンドンなのだと、悠奈は実感した。誰もがいい意味で他人に関心がない。日本のように他人のことが気になり、他人の目が気になる国民性ではないのだろう。人々は自立して、自分の道をしっかり歩んでいるように見えた。

亜希は、時計台の傍まで歩くと、不意に悠奈を振り返って微笑みを浮かべた。

「君が俺をずっと待っていたことは感じてた。俺の力を知った上で、それでも待ってるなんて？不思議だったよ。ここに来ることを選ん

だのも?」

彼は、悠奈を静かに見つめる。彼女は、亜希の視線に高鳴る鼓動を感じて胸を手で押さえ、彼の瞳を見つめ返して微笑んだ。

「ただ、逢いたいって思ってたの。逢えるって信じてた。亜希さんの傍に居るって、居たいって、ずっとずっと願ってた」

悠奈の瞳は一切の曇りもなく澄んでいた。亜希は、彼女に向かって手を差し伸べる。

「君は、あの雨桜の日から変わらない?。この俺の手が取れるのか?」

亜希の声に、その奥にある痛みを感じた悠奈は、彼の全てを受け入れるような鮮やかな微笑みを浮かべると、迷いなく両手を差し出して、彼の手を包むように握る。亜希は、ふと笑うと、柔らかな表情で彼女の片手を取り、置いていたスーツケースを再び持って、ビッグベンに背を向け、来た道の方へと歩き出した。

「亜希さん?」

「今すぐ連れ去ることにした」

亜希は、悪戯気な笑みを悠奈に向け、彼が住むサウスバンクの方へと歩みを進める。悠奈は、少し驚いた顔を見せたが、すぐに笑顔をつくると彼のほんのわずかに後ろを歩いた。

? 離れない。何があろうと、絶対に離れない

「風が出てきたな」

亜希は、吹く風の方角を見るように頭を上げ、繋いだ手を離し、コート片側に悠奈を包み込んだ。

彼の体温を間近に感じると、悠奈はそっと亜希に寄り添った。

あの日、桜の下で出会ったこと、再会してしまったこと、全ては宿命なのだと悠奈は感じた。隣に居ることを夢に見ていた亜希が、今ここにいる。彼女は、今までにない強い愛おしさの中に、微かな独占欲が芽生えていることを感じたが、そんな自分の気持ちを全て受け入れる。

？彼の傍で、この先、どんな運命を舞うことになるかと後悔はしない。自分で決めた運命なのだから。地獄に堕ちてもかまわない

気まぐれに二人を結びつけた桜の宿命に、彼女は従うことを決めていた。桜は彼の痛みを知っていたのだろう。彼の座るベンチの隣で、ずっと慰めようとしていたのだろう。

「桜になりたい？」

悠奈はぼつりと呟いた。

亜希は、ふと睫を伏せて彼女を見下ろし、美しい瞳で微かに笑う。そこには優しく深い悲しみを映す瞳があった。瞳を重ねて幸せそうに微笑んだ悠奈の背中に、いきなり手を回した亜希は、彼女を抱き締めるように引き寄せる。思わず彼の胸の中に包まれた悠奈に高い緊張が走ったが、すぐに力を抜いて身体を預けた。亜希の腕の中で、彼の意識に包まれながら、悠奈はなにものにも変えられない幸せを感じていた。

？逢うと決めていたのよ。地獄に堕ちてもいい。あなたの傍に居る。

そう、ずっと前から決まっていたの？。

傾いた夕日でオレンジに染まりかけた重厚な美しい街だけが、抱き合う二人を静かに見つめていた。

終章（後書き）

つたない文章を読んでいたいただき、ありがとうございました。
評価していただいていた読者様、本当に感謝いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3295h/>

桜に因りて雨を舞う

2010年10月18日23時26分発行